

---

# 東方戦仮面

ムッコロフェイス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方戦仮面

### 【Nコード】

N6995G

### 【作者名】

ムッコロフェイス

### 【あらすじ】

夏の幻想郷。ある日突然、謎の力を秘めたベルトが幻想郷へと流れ着いた。そのベルトは、装着者を「仮面ライダー」へ変身させるアイテムだった。ベルトの出現と共に幻想郷で次々に巻き起こる怪奇現象、人妖問わず襲う異形の怪物の出現、そして新たな異世界…。更には、幻想郷の賢者の一人・八雲紫が仮面ライダー同士で戦う新しい決闘法『ライダーバトル』を生み出し…

現在、更新停滞中…（汗）

## 第1話：「変身」(前書き)

この作品は「東方Project」と「平成ライダーシリーズ」の二次創作です。二次創作が苦手な人や、原作派の人は急いでブラウザの戻るボタンを押して下さい。

## 第1話：「変身」

幻想郷の夏の朝、香霖堂。

そこには既に二人の来客が来ていた。魔法の森に住む魔法使い・霧雨魔理沙と博麗神社の巫女、博麗霊夢。

「さて、今日も何か掘り出し物はあるかな？……、おっ？」

魔理沙は何やら、店の隅に置かれていた怪しげな「トランク」らしき物に手を掛けた。

「なんだこれ？この前来た時には、こんなヘンテコな箱なんて置いてなかったぜ」

「霖之助さんの趣味か何かじゃないの？あの人、やたらこういう奇妙な物に影響されるし」

魔理沙が手に掛けたトランクに入っていたのは、「SMART B RAIN」のロゴが入った、黄色のスジが怪しい雰囲気醸し出している黄色と黒のベルトだった。

「おーい香霖。これ、いったい何に使う道具なんだ？」

魔理沙が問うと、店主の霖之助は簡単に説明する。

「どつやらこれは、使うと普段の数十倍の力を発揮できる道具らしい。使い方はそのトランクの中に入っている筈だよ」

「ほー、パワーを高める道具か。気に入った！少し借りるぜ」

魔理沙はそのベルトを腰に巻くと、トランク内に入っていた説明書を読む。

「おい！それ売り物だから、あんまり無茶しないでくれよ！」

「解ってるって！！えーと、この変な機械に『変身コード』を打ち込んで…？」

魔理沙はトランクから携帯電話状の変身ツールを取り出し、コードを打ち込んだ。

『9、1、3……ENTER』

《STANDING BY》

「うおっ！？」

コードが認識され、ツールからは変身待機音が鳴り響く。

「よし…。後はツールをベルトに接続すればいいんだな？」

魔理沙は変身ツールをベルトの接続部に装着した。

《COMPLETE》

その瞬間急にベルトが光り出し、魔理沙の体を沿うように、黄色いフォトンストライプが展開される。そしてフォトンストライプがほぼ魔理沙の全身に行き渡ると、ベルトから強い光が発せられた。

「ま、眩しっ!？」

「こ、これは…」

光が治まると、魔理沙は黄色のストライプの入った黒い甲冑のようなスーツを身にまとい、ヘルメットのようなマスクを装着していた。その姿はまるで…、『仮面ライダー』。

「魔理沙…あなた、いつの間に着替えたの？」

「え?何言って…って何だこりゃ!？」

霊夢達の反応に、魔理沙は自分の姿を見て驚いた。

「背も僕よりも高くなってる…」

「身長も伸びるのか!!いやいや大した道具だ」

「…そんな反応でいいの？」

「大丈夫だぜ。ベルトを外せば元に戻るって、ちゃんと書いてあるぜ」

魔理沙はベルトに手を掛け、ベルトを外した。するとまた、魔理沙の体を光が包んだ。光が止めば、また元の魔理沙の姿に戻っていた。

「ほらな。流石に戻らないとなると焦るけどな。こーゆー奇妙なモノは、説明書をよく読んでから使わないとな」

「本当、奇妙なベルトね…。」

.....

第1の仮面ライダー 霧雨魔理沙

仮面ライダーカイザ 変身確認

.....

その頃、妖怪の山。

「な、何だ…こいつらは…！」

白狼天狗数人が、何やら奇妙な生物と交戦している。

「グオオオオオオオオ！」

その奇妙な生物「センチピードアンデッド」とトリロバイトアンデッドは、白狼天狗の振るう大剣をもともせず、拳を振るい、白狼天狗を殴り飛ばす。

「ぐあっ…！」

二匹のアンデッドは白狼天狗を片付けると、山の深部である空洞を目指し、奥へ進んでいった…その時だった

「グエエ！？」

突如、真紅のカブトゼクターが空から出現し、二匹のアンデッドに

攻撃を仕掛けた。

「ギー!?」

アンデッドは周囲を警戒する。そこには先程の赤いカブトゼクターを手に、二匹のアンデッドを見つめている鴉天狗の少女…、射命丸文がいた。

「人の住処に土足で入ってきた挙げ句、好き放題暴れた罪は大きいですよ?」

文がそう言うと、カブトゼクターを腰に巻いていたベルトに接続させた。

「覚悟はできてますね?」

《HENSHIN》

カブトゼクターは文の声に反応し、ベルトは彼女の体を包み込むように、鎧のような装甲を生成し、文の体を覆った。

「なに、直ぐに追い返しますよ…。『キャストオフ』!」

《CAST・OFF》

文はカブトゼクターの角を引いた。すると先程の装甲が勢い良く弾け飛び、装甲の中から新たに「仮面ライダー」らしき姿があった。

《CHANGE・BEETLE》

キャストオフ完了の電子音声が響き、頭部のゼクターホーンが起き上がる。それと同時に文は、腰のカブトクナイガン抜き、トリロバイトアンデッドに向けて発砲する。

「まずは、これでも喰らいなさい！」

「ギヤアアアアアー！！」

銃弾の直撃を受け、断末魔を上げながら倒れ込んだトリロバイトアンデッド。

しかし、トリロバイトアンデッドは素早く起き上がり、腕の盾でカブト目掛けて攻撃を仕掛けてきた。

「グルアアアアアア！」

「やっぱり、そう簡単には勝たせてくれませんよね。」

カブトはトリロバイトアンデッドの攻撃をバックステップで交わし、その直後にトリロバイトアンデッドの隙を突き、カブトクナイガン・アックスモードでトリロバイトを切り裂いた。

瞬間、トリロバイトは手にしている盾で攻撃を防ごうとしたがカブトクナイガンの刃はいとも簡単にトリロバイトの盾を引き裂き、そのままトリロバイト本体を切り裂いた。

「ギイエエエエエー！！」

体の切り傷から、緑色の血が染み出る。そしてそのままトリロバイトは、全身の力が抜けたかのように、バタリと地面に倒れた。

それに激昂したのか、センチピードアンデッドが雄叫びを上げながら文に突っ込んでいった。

「ガアアアアアッ!!」

文はそれを的確に分析し、迫り来るセンチピードアンデッドの攻撃をかわし、そのままカブトクナイガンで斬り払った。

「オオオオオオオ!!」

カブトの攻撃を直撃し、センチピードは叫び声をあげながら叩き斬られた勢いで空中を舞い、地面に体を強く打ち付けられる。…そしてそのまま、ピクリとも動かなくなった。

「さあ「これ」はどうしましょうか…」

文は変身を解除し、クナイガンの攻撃を受け、動かなくなった二匹のアンデッドを見つめ、ポツリと呟いた。

…不死生物たるアンデッドが、決して死なないことになど気が付かないまま…

.....

第2の仮面ライダー 射命丸文

仮面ライダーカブト 変身確認

.....

## 第1話：「変身」（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーカイザ

登場作品 仮面ライダー555

この作品の主人公・霧雨魔理沙が、香霖堂で仕入れた外の世界の企業「スマートブレイン」で作られたベルト「カイザギア」の力で変身した仮面ライダー。メインカラーは黒で、フォトンストリームの色は黄色。本来ならオルフェノクやその記号を持つ者のみが変わ身でき、それ以外の者が変身すると変身後に灰化して死亡してしまうが、魔理沙の場合は彼女の持つ魔力や霊力、オーラが何らかの理由で灰化に対する強い抵抗力を生み出し、身体にも悪影響や支障が出ない。故に唯一「純粋な人間でカイザに変身できる人物」となっている。

「カイザブレイガン」「カイザポインター」等武装も豊富で専用の可変型バリアブルビークル「サイドバッシャー」も操る。

仮面ライダーカブト

登場作品 仮面ライダーカブト

幻想郷のブン屋・射命丸文が、外の世界に存在する秘密結社・Z E C T の開発した対ワーム戦闘用昆虫型変身コア・カブトゼクターの力で変身した仮面ライダー（マスクドライバー）。現在、カブトに

ついでにはマスクドフォームとライダーフォームの二形態が確認されており、マスクドはパワーに優れ、ライダーはスピードに優れる。また「クロックアップ」という高速移動能力を持ち、俊敏な動きをする成虫ワームを相手にするとき役立つ。

なお、カブトの変身者はゼクター自身が選び、カブトゼクターに認められた者にしか変身できない。何故文が適格者として選ばれたのかは不明だが、文自身の身体能力の高さもあり、カブトの性能を十二分に発揮している。

## 第2話：「怪物とライダー」

「魔理沙……あんた結局『ソレ』盗んできたの？」

「盗んだんじゃない、借りただけだぜ」

霊夢と魔理沙は、香霖堂を出て帰り路を飛んでいた。その魔理沙の手には、先程のカイザドライバーの入っているトランクが握られていた。

「別にあんたが持っていて、意味無いんじゃないの……」

『ドドドドドオオオン!!!!!!』

霊夢がツツコミを入れた次の瞬間、二人の真下に位置する林から、謎の爆発音が響いた。

「な、何があつたの!？」

「とりあえず、見てみようぜ!!」

二人は林に着地し、爆発のあつた場所へと走った。

「なんだあれ……」

「白い、鎧……!？」

二人が目指した場所には、風払われた木々と、巨大な斧を握り締め  
ている白い仮面ライダーが、二人に顔を向けていた。  
白い体に黒い縞模様。…まるで、伝説の生物である「白虎」を連想  
させる姿をしている。

「まさか、あいつもあのベルトで変身した奴か!？」

魔理沙はトランクを開け、カイザドライバーとカイザフォンを取り  
出した。カイザドライバーを腰に装着し、カイザフォンに変身コー  
ドを入力する。

「魔理沙、あんた一体何するつもり!？」

「決まってるだろ。こいつの実践テストだ!」

コードを入力したカイザフォンをカイザドライバーに装着し、魔理  
沙も仮面ライダーカイザへと変身した。

それと同時に白い仮面ライダーも、大斧と虎爪を持ち、魔理沙へと  
突撃してきた。

「その勝負、受けて立つぜ!」

魔理沙も専用武器・カイザブレイガンをつらから取り出した。

先制は、白い仮面ライダー。魔理沙に向かって大斧を勢い良く降り  
卸すが、カイザブレイガンで受け止められた。

「くうっっ…手にジンジンくるぜ」

次に魔理沙の攻撃。カイザブレイガンの銃口を、白い仮面ライダーの腹へと向けた。

「弾幕は、パワーだぜ!!」

魔理沙はカイザブレイガンのトリガーを引いた。銃口からは無数の弾が発射され、白い仮面ライダーを吹き飛ばした。

「この連射力とパワー…気に入ったぜ!!」

魔理沙がカイザの力に感激していたのも束の間。白い仮面ライダーは平然と立ち上がり、魔理沙の元へ詰め寄ってきた。

「な、何だよ…。」

「そのベルト…、そう、あんたも『ライダー』なのね

白い仮面ライダーが魔理沙に話しかけてきた。…聞き覚えのある声だ。

次に白い仮面ライダーは、自分のベルトを外し、変身を解除した。次の瞬間、魔理沙の目にはとても意外な人物の姿が映っていた。

「えっ!?!あ…ええっ!?!」

「さ、咲夜!?!…ちよ、お前が!?!」



-----

同じ頃、竹林。

「ギユワオ!!!ギャヤ!ギャワア!」

2人の少女とモスアンデッドが、竹林で格闘していた。しかし相手はアンデッド。素手で戦って勝てる相手ではない。

「ちつ…慧音、やっぱアレ行くか!?!」

「そうだな。これ以上は時間の無駄だ…!!!」

そう言うと藤原妹紅はオーディンのバックル、上白沢慧音はファイズフォンを取り出した。

「安心しろ…直ぐに片づけてやらあ!!」

「悪いが、これも私達の勤めだ。許せ」

二人がそれぞれの変身ツールをベルトと合体させると、二人はそのまま変身し、モスアンデッドへ突っ込んでいった。

「食らえ!!」

まずは妹紅が、ゴルトバイザーでモスアンデッドを殴打する。

「ギ、ギギギ…」

妹紅の連続攻撃に、さすがのモスアンデッドもよろける。その一瞬

を、二人は見逃さなかった。

「妹紅！巻き込まれなくなったら退いてくれ！！」

妹紅が振り向くと、そこにはファイズの必殺技・クリムゾンスマッシュを放とうとしている慧音がいた。

妹紅は慧音の視界から退くと、慧音は高くジャンプし、赤い光をまとった右足をモスアンデッドへ向けた。

「行くぞ…！！」

そのまま慧音は空中蹴りの体制に入り、右足を敵に突き刺すようにして落下する。足先の光が槍状となり、その光がドリルのように回転、モスアンデッドの腹部を削る。

…そして、慧音の右足はモスアンデッドの腹部を貫いた。

「ギャワアアアアアアア！！」

断末魔を上げるモスアンデッドの体に

「」のマークが刻まれ、その後爆発が起きた。

「ふう…。」

「力仕事はきついな。目眩がするよ」

二人は変身を解き、夕風で汗に塗れた顔を冷やした。

「ここ最近、怪物が頻繁に現れるようになったな。慧音、どう思うっ？」

「アンデッド、オルフェノク、イマジン、ワーム、グロンギ……。今まで目撃した怪生物は、今のところ五種族だ。他の怪生物については、他のライダーが対応しているだろう」

「じゃあ、私達はここ竹林の警備を存分に専念すればいいわけか」

.....  
.....第4の仮面ライダー 藤原妹紅

仮面ライダーオーティン 変身確認

第5の仮面ライダー 上白沢慧音

仮面ライダーファイズ 変身確認

.....  
.....

## 第2話：「怪物とライダー」（後書き）

今回登場した仮面ライダー

仮面ライダータイガ

登場作品 仮面ライダー龍騎

吸血鬼の住まう紅魔館のメイド長でレミリアの従者、十六夜咲夜が変身する白虎をモデルとした仮面ライダー。虎爪と斧が武器で、「アドベントカード」という特殊なカードを用いて戦うことができる。

仮面ライダーオーディン

登場作品 仮面ライダー龍騎

藤原妹紅が変身する、フェニックスをモデルとした仮面ライダー。原作においては最強最後のライダーという設定で登場した。この作品においても、エクストラボスに相応しい戦いを展開する。

仮面ライダーファイズ

登場作品 仮面ライダーファイズ

寺子屋の教師・上白沢慧音の変身する仮面ライダー。カイザと同じくスマートブレイン製の変身ベルト『ファイズギア』により変身す

る。この作品では、いち早く必殺技を披露した。

#### 登場予定ライダー一覧

（注意 ネットバレ含む可能性大及びアンケートで変更になる可能性大）

リグル／仮面ライダーガタック

四季映姫／仮面ライダーゾルダ

フランドール／仮面ライダーキバ

河城にとり／仮面ライダーベルデ

紅美鈴／仮面ライダー龍騎

魂魄妖夢／仮面ライダー剣

### 第3話：「戦神と疑似」

魔理沙「カイザと咲夜」タイガの戦いから数時間。周囲はすでに静まり返り、辺りもすっかり暗くなっていた。

「ともかくここで話すのもアレだから、館でゆっくりと説明してあげるわ」

「ああ、それがいいぜ。こんな場所じゃ落ち着かないぜ」

今、この幻想郷で起きている怪物騒動、仮面ライダー騒動についての事情を詳しく知るために魔理沙、霊夢の二人は咲夜の勧めで紅魔館に行くことにした。

…その時。

「何、もう帰るの?」

三人の背後から、少女の声が響いた。それに反応した三人は本能で背後に目をやった。

「誰だ!？」

最初に叫んだのは魔理沙。暗くてよく解らないが、くっきりと人影が見えている。

「こんな暗くなるまでこの林に居着くなんて、余程の命知らずみたいね」

「…？お前は…」

少女は魔理沙達に近付いてくる。そして少女は、もう体全体が魔理沙に見えるところまで近づいた。

緑色の髪、長い触覚、甲虫の羽を連想させる黒いマント。彼女の正体は虫の妖怪の代表格・リグル・ナイトバグだ。

「何だお前か。お前みたいな奴が私達に何の用だ？」

「同じ『ライダー』同士、そちらの実力を見てみたくなったの」

「…お前が？ライダーだって？」

「まあ、説明するより実際見た方が早いね」

リグルが空に手をかざすと、闇夜の空に突然青い閃光が走り、その閃光の正体……、変身コア・ガタツクゼクターはリグルの手のひらに着地した。

「お前、まさか本当に…！？」

「ほら、早くあんたも変身の準備をしなさい。生身では私に勝てないよ」

驚いている魔理沙に、リグルは挑発するかのようにならざるに戦意を高めさせる。

勿論、魔理沙の事だ。この挑戦を受けないはずもない。

「そこまで言うんだったら、思う存分相手してやるぜ！」

魔理沙もカイザフォンを取り出し、変身コードを打つ。

《9、1、3、ENTER…STANDING BY》

それに応じ、リグルもベルトにガタックゼクターをセットする。

「勿論手加減はしないぜ？」

「こつちこそ。今までの1ボス感覚で私を相手したら、命の保証はないよ」

「1ボスのくせに言ってくるぜ！！」

「戦神の力を甘く見ない事ね。変身！！」

《COMPLETE》

《HEN-SHIN》

二種類の電子音声が響き、カイザドライバーとガタックゼクターは、二人の体を仮面ライダーへと変身させる。

「さて、速攻で終わらしてやる!!」

魔理沙はカイザブレイガンを抜き、ガタツクへと銃口を向け、発砲した。

「そう来るかと思ったよ!」

それとほぼ同時に、リグルもマスクドフォーム形態の限定武器・ガタツクバルカンをカイザに向け発射した。

二人から放たれた弾丸はお互いのボディを直撃。魔理沙は毎分5000発放たれるイオン弾の牙を喰らい、その衝撃で飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「いたた…、やってくれるぜ」

魔理沙は立ち上がり、ガタツクマスクドフォームを見る。しかしガタツクには、先程魔理沙の放ったフォトンブラッド弾がまるで効いていなかったかのよう、装甲には傷一つ付いていなかった。

「思ったより、こいつ堅いな。」

魔理沙はカイザフォンにコード「106」を入力、カイザブレイガンを連射モードへ切り替える。

「これだけ撃ち込めば、少しはダメージを受けるはずだぜ!!」

魔理沙はカイザブレイガンのトリガーを引いた。銃口からは無数の弾丸が打ち出され、その弾全てをガタツクマスクドフォームに浴びせる。

『ドガガガガガガガガガッ!!』

フォトンブラッド弾は次々とガタツクマスクドフォームに命中、装甲を確実に削り取っていた。

「勝てる！」

魔理沙が勝利を確信した次の瞬間、突然ガタツクマスクドフォームの装甲が弾け飛んだ。

「うわっ!?!」

装甲の破片は魔理沙に命中、そのまま魔理沙は地面に倒れ込んだ。

「自爆…? いや、違う!?!」

魔理沙が急いで顔を上げると、そこには装甲を脱ぎ捨てたガタツクがいた。

《CHANGE STAG-BEETLE》

ガタツクから電子音声が響く。そして、いつの間にかガタツクの両腕には青い双剣が握られていた。

「このままじゃ、魔理沙がまずいわね」

二人の戦いを見ていた咲夜は、再び腰にベルトを巻き、ベルトに夕

イガのカードケースをセットした。

「…変身!!」

咲夜は再び仮面ライダータイガへ変身すると、二人の元へ走る。そして左腕に装備している虎爪「デストクロー」で、勢いよくガタックを殴り飛ばした。

「なっ!!!?」

タイガの奇襲、デストクローの衝撃で吹き飛ばされるガタック。

「霊夢、魔理沙をお願い」

「わかったわ。でも咲夜、あんたはどうするのよ」

「少なくとも、あの仮面ライダーを倒さない限り無事には帰れないわよ?」

そんな二人の会話の中でも、ガタックは未だに戦意を失ってはいなかった。魔理沙は恐らくさっきの攻撃で怪我を負っているはず。しかもタイガ1人ではライダーの性能上、太刀打ちするのは難しい。

「弱ったわね…。」

-----

その頃、人里の寺子屋。そこには対談をしている二人の人影があった。

「ミラーワールド？」

聞きなれない名前の世界・言葉に、慧音は首を傾げた。

「はい。調べてみたんですが、近日この幻想郷に現れた『ライダー』達のみが行き来することができると言われていて、鏡の中の世界です」

慧音と対談しているのは、天才的な頭脳と記憶力を有する事で名が知られている天才少女・稗田阿求。

「ふむ。…それで、私に頼み事と言うのは？」

慧音の反応に、阿求は少し目を輝かせて言った。

「私の執筆している『幻想郷縁起』に、その世界のことを載せたいんです。」

「成る程。それで…私がその『ミラーワールド』へ行つて、そこから詳しい情報を持って帰れ、と？」

「いえ、少し違います」

阿求は懐から一本の『ベルト』を取り出し、自らの腰に巻いた。

「私の発見したこのベルトは、ライダーではない人間もミラーワールドへ行けるようになることを想定して作られた、疑似ライダーベルトの試作品です。つまり私が言いたいのは…。」

阿求は一枚のカードケースを手に、それをベルトにセットした。

その直後、慧音の目の前で、阿求の姿はコオロギを連想させる黒いライダーへと変身した。

「私と共同で、数分だけでもいいですので調査を頼みたいんです」

- - - - -

第6の仮面ライダー リグル・ナイトバグ

仮面ライダーガタック 変身確認

疑似ライダー 稗田阿求

オルタナティブ・ゼロ 変身確認

### 第3話：「戦神と疑似」（後書き）

今回登場したライダー

仮面ライダーガタック

登場作品 仮面ライダーカブト

妖怪昆虫リグル・ナイトバグが変身する、青いクワガタをモチーフとした仮面ライダー。カブトと同じく自我を持った昆虫コア『ガタックゼクター』により変身することができる。ちなみにマスクドフォームの火力は原作中最高クラス。

オルタナティブ・ゼロ

登場作品 仮面ライダー龍騎

ミラーワールドの調査へ向かう稗田阿求が変身する、コオロギがモデルの疑似ライダー『オルタナティブ』の試作型。厳密には仮面ライダーでは無いが、その強さは本物でオリジナルのライダーに匹敵する戦闘力を持つ。

**第4話：「呪われしライダー」（前書き）**

次の新キャラ登場は、5月4日位になりそうです。

#### 第4話：「呪われしライダー」

ガタツクは再び咲夜へと向かい、ゆっくりと詰め寄ってきた。

「あんたもライダーだったのね。なら好都合よ…二人纏めて叩き潰せるんだからね!!」

ガタツクは双剣・ガタツクダブルカリバーを構え直し、その殺気を帯びた煌めく刃を咲夜へ向ける。

「まだやるというのなら…!!」

咲夜は相手の双剣に対抗すべく、今度は両腕にデストクローを構え、ガタツクと対峙する。ジリジリと近付いてくるガタツクに気圧されながらも、覚悟を決め突撃した。

「正面からなんて、面白いことしてくるわね。」

しかし、ガタツクもタイガの突撃を恐れることなく自らもタイガに突っ込んでいった。

「ライダーの性能上、勝算は低い。でも…、これで決めてみせる!!」

「いい加減、あんたはどうあがいても所詮は人間だという事を思い知れ!!」

二人の仮面ライダーはぶつかり合い、デストクローとガタツクダブルカリバーの二つの刃は火花を散らしながら鏝迫り合いを始めた。

しかし、力の差は歴然だ。手数が多く、連続攻撃には特化しているタイガだが、パワーでは明らかにガタツクが上回る。現在、パワーが有無を言わせるこの戦況では、圧倒的にタイガが不利なのである。タイガは必死に踏ん張るも、ガタツクの誇る圧倒的なパワーと脚力によりズルズルと足を引きずられる。

「うっ……いたた、負けちゃったか……」

気を失っていた魔理沙が、やっと目を覚ました。体を起こし、ゴシゴシと脛を搔いた。その手には、未だにカイザフォンが握られていた。

どうやら自分はガタツクのキャストオフに巻き込まれて気を失い、気付いたら横になって眠っていたらしい。

「魔理沙、気が付いた？」

霊夢は魔理沙が目を開けたのを確認すると、安心したと言わんばかりの大きなため息を付いた。

「……あれ？咲夜はどうしんだ？」

魔理沙が霊夢に問いかけると、霊夢は奮戦しているタイガとガタツクの方へ視線を向けた。

それに反応し、魔理沙も霊夢と同じ方向に目と顔を向けた。

- - - - -

2人の視線の先には、不利な状況をものともせずガタツクと対峙し、闘っているタイガの姿があった。

既にデスクローには無数のヒビが入っており、今にも撃ち砕かれそうな位にまでボロボロになっていた。……しかし、そんな状況であつても、タイガは未だに引こうとしない。

「咲夜ッ！！！！」

魔理沙は叫び、立ち上がる。そしてカイザフォンに変身コードを入力した。

「魔理沙、幾ら何でも危険すぎるわ！！」

「だけど、咲夜一人に任せられる相手でも無いだろ！！」

魔理沙はカイザフォンをカイザギアにセットし、ガタツクに向かって走り出した……その時だった。

『ドカンッ!』

「うわっ!」

「きゃっ!？」

魔理沙の後ろから、いきなり謎の緑色の影が突如現れ、魔理沙を追い抜かすとそのままタイガとガタツクの2人を、長い杖で攻撃した。攻撃を受けた二人はそのまま地面に横転する。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「また新しい仮面ライダーかよ…。」

…2人を襲ったその影の正体は、緑色の仮面ライダーだった。

その仮面ライダーは腕に長い杖のような武器・醒杖『レンゲルラウザー』を構え、体全体には黄金の装甲が装着されている。その胴体には、トランプのマークの一つである「クラブ」を連想させるマークが彫られていた。

「…。」

その仮面ライダーは、倒れた二人を暫く見つめていた。しかし魔理沙の気配・反応にも気付いてはいるようだが、興味の1つも表さず、攻撃してくる気配もない。

「おい、あんたは誰だ？どっちの味方なんだ？」

「…。」

しかし、緑色の仮面ライダー＝仮面ライダーレンゲルは魔理沙の問いかけには応えずに、魔理沙に背を向け走り出した。そして、レンゲルの姿は林の中へ消えていった…。

「何だったんだ？あいつ…。」

カイザドライバーを外し、魔理沙と霊夢は倒れているタイガの元へ駆けつけた。

「おい咲夜、大丈夫か？」

「う…、闘いは…、どうなったの…。」

「あのクワガタ野郎なら、どっかの仮面ライダーさんがぶっ飛ばしてったよ。」

魔理沙が指を指す。その方向には変身が解け、目を回して気絶していたリゲルがいた。

「そう…。なら、良かった…。」

タイガはホッと息をつくとベルトにセットされていたカードケースを外して変身を解除し、咲夜の姿へと戻った。

「これで屋敷に戻れるわね。」

「そのようね。でもまた新手が現れないといいのだけれど」

「冗談でも、それは止めてくれ。今度またライダーが出てきたら今度こそ終わりだぜ」

このライダー騒動を調べるため、そしてこれ以上の戦いを避ける為に、3人は今度こそ、紅魔館を目指して飛び立った。

- - - - -

その頃、ミラーワールド内部。

「ふむふむ。この世界の外観や建築物は、鏡に映しているかのよう  
に現実の世界のものとは左右対称になっている様ですね。」

オルタナティブ・ゼロこと阿求、仮面ライダーファイズこと慧音の2人が、異世界「ミラーワールド」の調査をしていた。

「しかしこの世界には、妖怪はおろか人間の姿すら見当たりません  
ね。」

「そうだな……。住居があるだけで、人間達の気配は全く感じられな



## 第4話：「呪われしライダー」（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーレンゲル

登場作品 仮面ライダー剣

ガタツクとタイガの両者を襲撃した謎の仮面ライダー。スーツカラーは緑で、装甲の色は黄金。変身者は現在不明。高い攻撃力を持つ専用武器・醒杖『レンゲルラウザー』を持ち、ライダー自身の基礎戦闘力も高い。ベルトに邪悪な意志が宿っている、謎のカードを用いて戦う、吹雪を武器にする能力があるとの噂もある。現在、謎が多いライダーの1人でもある。

## 第5話「地獄姉妹」(前書き)

新キャラ&ライダー、テストに3人だけ出しました。ドレイク、ラ  
イアの変身者は5月2日まで募集中です。

## 第5話「地獄姉妹」

リグルの変身するガタツクとの激闘も終え、魔理沙一行はボロボロになった体を休めるべく、そしてベルトについての詳しい情報を手に入れるべく、紅魔館を目指した。

それと同時に、ミラーワールド内部。そこには阿求と慧音以外にも、3つの人影があった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「準備は出来てる？稔子」

「もちろんです、お姉様」

秋を司る八百万の神・秋稔子と秋静葉が、1人の人物と相對していた。

「なるほど。どうしても私達に味方しないと云うのなら、余分な『ライダー』はここで処分した方がいい、という事ね」

秋姉妹と相對しているのは、「小さなスイートポイズン」の異名を持つことで知られる妖怪、メデイスン・メランコリー。稔子と静葉

は腰にベルトを巻いているが、メディソンはライダーを名乗っているにも関わらず、ベルトらしき物を所有していない。

「さて…どちらがこの『世界』を制するライダーにふさわしいかしら」

(この世界は本来、神も生命もあつてはならない世界。あなたもそれが何なのかは解っているはずなのに…)

- - - - -

先に動き出したのはメディソン。彼女は背中に掲げていた紫色の洋剣を取り出し、刃を秋姉妹へと向けた。

それと同時に、メディソンの足元から小型のサソリメカが現れ、彼女の手元に飛び込んだ。

「…変身!」

メディソンは先程のサソリメカを洋剣にセットし、スイッチを入れる。

《HEN・SHIN》

電子音声と共に、メディソンの体が装甲で覆われていき、瞬く間に仮面ライダーへと変身した。体中に謎めいたチューブが張り巡らされている、何とも異質なライダーだ。

「キャストオフ!」

《CAST・OFF》

変身後、更にメディスンがサソリメカのスイッチを入れると、先程展開されたばかりの装甲が弾け飛んだ。

《CHANGE・SCORPION》

装甲の中から現れたのは、紫色の仮面ライダー・「仮面ライダーサソード」だった。∴そう、彼女はサソードセクターに選ばれた、マスクライダーだったのだ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「∴行くよ、稔子！」

「任せて、お姉様！」

次に秋姉妹。2人がベルトのスイッチを入れると、どこからか2匹のバッタメカが現れ、2人の元へ駆けつけてきた。

「変身!!」

「へ、変身!!」

2人はそれをキャッチし、掛け声をあげた後、バッタメカをベルトへセットした。

《HEN・SHIN》

音声が鳴ると同時に2人のベルトが光り、装甲が展開される。

《CHANGE・PUNCHHOPPER》

《CHANGE・KICKHOPPER》

変身完了の音声と共に、稔子は仮面ライダーパンチホッパー、静葉は仮面ライダーキックホッパーへと変身した。

「成る程。バツタのライダーか…。そんなヤワなライダーで私に勝てると思わないですよ！」

「悪いけど、私達も負ける気はない！」

メディスンがサソードヤイバーを握り締め、静葉と稔子に襲い掛かる。そしてそのままサソードヤイバーを振り降ろすが、2人はホッパライダー特有の高いジャンプ力を生かしたハイジャンプで、サソードヤイバーによる斬撃をかわす。

「さあ、ここからが本番よ！」

その一瞬だけだったが、稔子は仮面の下でクスリと笑った。

「見せてあげるわ…私達『地獄姉妹』の恐ろしさを！！」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

第7の仮面ライダー メディスン・M  
仮面ライダーサソード 変身確認

第8の仮面ライダー 秋稔子  
仮面ライダーパンチホッパー 変身確認

第9の仮面ライダー 秋静葉  
仮面ライダーキックホッパー 変身確認

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

その頃、魔理沙一行は無事紅魔館へ辿り着き、話をしながら広間へ繋がる廊下を歩いていた。

「なあ咲夜、お前このベルトについて詳しく知っているのか？」

「いえ、私は詳しくは知らないけど、それについてはお嬢様とパチユリー様が調べてるわ」

「へえ…。で、あんた達が調べたライダーは、どれ位いるの？」

「詳しくは解らない。紅魔館なら私含めてお嬢様、妹様、パチユリー様が既にライダーになってるわ」

「ちよつ、中国除いてほぼ全員!？」

謎の力の塊・ライダーベルト。その中の3つが、ここ紅魔館にあるという事を知った事には、霊夢と魔理沙も驚いた。

「ちなみに一番最初に変身したのはパチュリー様。私は聞いただけだから、何に変身したのかはよく解らないけど…。」

魔理沙と咲夜、ライダー同士の会話が続く中、三人で唯一の非ライダーである霊夢も退屈していたのか、2人の会話につっこんだ。

「ふ〜ん、私はライダーじゃないから解らないけど、魔理沙はどう思うの？」

「まだ私もそこまでライダーには興味ないんだが、いるというなら見てみたいもんだぜ」

魔理沙は仮面ライダーとなつてまだ1日も経っていない。魔理沙にとって仮面ライダーは、现阶段では未知なる存在。魔理沙の所有するカイザの力も完全に制御・操れているわけでもない。

だからといって、興味本位でカイザに変身した身だ。これから戦い続けるのかも解らない。もしかしたら、今日限りでカイザギアを手放してしまうかもしれないのだ。

「さて、2人とも着いたわ」

咲夜がそう言うと、3人の目の前には巨大なドアが聳え立っていた。ドアの奥からは、何やら本や資料らしき物をペラペラとめくられている音が聞こえてくる。

…そして今、そのドアは咲夜によって開かれた。

## 第5話「地獄姉妹」（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーサソード

登場作品 仮面ライダーカブト

毒を操る妖怪人形・メディスン・メランコリーが変身する仮面ライダー。カブト、ガタツクと同じくゼクトの開発した昆虫コア「サソードゼクター」により変身する。

仮面ライダーパンチホッパー

登場作品 仮面ライダーカブト

地獄姉妹こと秋姉妹の妹、秋静葉が変身する仮面ライダー。カーキ色をしており、カラーリングと必殺技以外キックホッパーと同じ。バツタ型昆虫コア「ホッパーゼクター」により変身する。

仮面ライダーキックホッパー

登場作品 仮面ライダーカブト

地獄姉妹こと秋姉妹の姉、秋稔子が変身する仮面ライダー。色はグリーンで、カラーリングと必殺技以外はパンチホッパーと同じ。バ

ツタ型昆虫コア「ホッパーゼクター」により変身する。

**第6話「紫の毒蛇と天のライダー」**（龍騎シナリオメイン）（前書き）

大分前に完成していましたが、最終チェックが終わったので載せる  
ことができました！

## 第6話「紫の毒蛇と天のライダー」（龍騎シナリオメイン）

ギイイイイイイ...

三人の身長の数倍以上ある巨大な扉が、咲夜の手によって開かれた。

「さあ、入って」

扉を開いた後、咲夜は霊夢と魔理沙の二人を扉の中へ招き入れる。

「邪魔するぜ」

「上がるわよ」

二人は咲夜に導かれるままに、扉の向こうの広い部屋に辿り着いた。

そこにはレミリア、フラン、パチュリーの紅魔館に住んでいる三人に加え、地霊殿の主・古明地さとりと、妖怪の山に住まう神・八坂神奈子、不死の体を持つ月の姫である蓬莱山輝夜という極めて珍しい組み合わせの客人がいた。

六人は鏡が建てられた大きなテーブルを中心に、椅子に座って何やら鏡の中を覗いている。

「あいつら、何してんの？」

「や、さあ...?」

霊夢が咲夜に問うも、咲夜も事情を知らないらしい。ただ解るのは、テーブルの上に並べられた六つのベルト、そして椅子に座っている者の数も六人。

…すなわち、ここに居る六人は全員仮面ライダーである、ということである。

咲夜は鏡を見つめているレミリアに小さな声で呼びかけた。

「お嬢様、ライダーを連れて来ました」

「ありがとうございます。こっちに呼んで頂戴。」

咲夜はレミリアに一礼すると、魔理沙と霊夢を手招きで呼び掛ける。

「咲夜、呼んだか？」

「ええ。お嬢様が何やら二人に話したいことがあるらしいから」

そう言うと咲夜は、二本の椅子を用意し、魔理沙と霊夢に座るよう、スツと手を椅子に向けた。

「よっこらせ、じゃあ言葉に甘えさせてもらっぜ」

二人は椅子に腰をかけ、少しの間空気を警戒し、黙り込んでいた。…その沈黙を打ち砕いた少女の声。

「あら魔理沙、貴女もライダーだったの？」

紅魔館の主・レミリアが魔理沙の腰に巻かれているベルトを見て、彼女がライダーである事を確信する。

「ああ、そうだぜ。」

魔理沙は軽く返答するとベルトを外し、テーブルの上に置いた。

「と言っても、キャリアはほんの数十時間だけだけだな」

「へえ、なら私と同じだな。ベルトとかいうのも私によく似てるし」

魔理沙に話しかけたのは神奈子。彼女の手前には、不思議なオーラを纏っている純白のベルトが置かれている。

「んでもって魔理沙。お前は『パラレルワールド』てのに興味はあるかい？」

「は？何言って…」

そう言うと神奈子は、テーブルに立てられている鏡を指差した。その指先に沿って、魔理沙は鏡の中へと視線を向けた。

「え？な…なんだこれ!？」

魔理沙は鏡を見て驚愕した。

その鏡の中には、交戦しているホッパーライダーとサソードの姿があった。しかし、鏡だというのに背景がこの部屋ではなく、開けた平原となっている。

「さて…そろそろ誰か『行く』？」

レミリアの声明。それに魔理沙が反応する。

「おい、『行く』ってどういう事なんだ？」

魔理沙の問いかけに、レミリアは目を少し輝かせて説明した。

「今、『ミラーワールド』という鏡の中の世界で、ライダー同士を闘わせる『ライダーバトル』というのが流行ってるの。要するに今は、その真つ最中で所ね」

「ライダー同士の闘いか。なら私は遠慮するぜ。さっきクワガタ野郎と闘ったばかりだから疲れてんだ」

「あら、それは残念ね」

魔理沙が今回のバトルを拒否したので、レミリアは少し残念そうにため息をついた。

時は進んでいく。沈黙している空気の中、一人、名乗りを上げた者が現れた。

「なんか暴れたくなってきた。私が行く」

名乗りを上げたのは神奈子。椅子から立ち、テーブルに置かれたベルトを掴み、腰に装着した。

「さあ、私の相手は誰だ？」

神奈子はやる気満々だ。その声を聞いた瞬間、パチュリーが椅子から立ちあがった。

「闘つての経験も必要みたいね。私が行くわ」

パチュリーもそう言うと、テーブルの上のベルトを取り出した。

「神と魔女の闘いか。…面白そうね、やってみなさい」

レミリアが試合了承の合図を出す。二人はそれを聞くと、神奈子は白い携帯電話型変身ツールを取り出し、パチュリーはベルトを腰に巻いた。

《3、1、5…『STANDING BY』》

「変身！」

神奈子は掛け声をあげると、変身ツールをベルトにセットした。

《COMPLETE》

電子音声と共に、神奈子の体を青いフォトンストリームが走る。

次の瞬間神奈子の体を青白い光が覆い、その光の中から白い仮面ライダーが現れた。

次にパチュリーもベルトを腰に巻き、懐から紫色のデッキケースを取り出した。

そのデッキケースをベルトにセットして、パチュリーも紫色の仮面ライダーに変身した。色は紫で、蛇のようなデザインをしている。

「よし…。」

二人のライダーは変身を確認すると、二人は鏡と向き合い、鏡の世界へ入っていった。

「ルールは簡単。相手のベルトを外す、又は破壊することで相手の変身を解くか、相手が倒れるまで、殴るだの蹴るだのすれば勝ちよ。」

「成る程。要するに好き放題暴れて、どっちかがくたばるまで闘い続ければいいんだな」

「そついう事になるわね」

レミリアは魔理沙と霊夢に簡単なルールを説明する。

「鏡の世界には既に三人。そして今、新たに二人のライダーがミラーワールドへ向かった。鉢合わせなんかしたら、乱闘は免れないわね」

レミリアは微笑し、鏡の中をチラリと見つめた。

第10の仮面ライダー 八坂神奈子

仮面ライダーサイガ 変身確認

第11の仮面ライダー パチュリー・N

仮面ライダー王蛇 変身確認

次回、ホッパーライダー&サソード戦完結！そして新たにサイガV  
S王蛇がの闘いが始まる！そして…「カーナリー強い」奴も登場予  
定！

## 第6話「紫の毒蛇と天のライダー」(龍騎シナリオメイン)(後書き)

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーサイガ

登場作品 劇場版 仮面ライダー555

妖怪の山に住む神様・八坂神奈子が「帝王のベルト」の一つである「天のベルト」により変身する仮面ライダー。

左右非対象のデザインで、飛行能力を持つ。トンファーのような武器を用いる。出力、戦闘力はファイズ・カイザの倍近くあるという噂。原作では優れたオルフェノク以外変身できなかったが、「神様」という立場上変身できた。

57

仮面ライダー王蛇

登場作品 仮面ライダー龍騎

変身者はパチュリー・ノーレッジ。紫色の蛇を連想させるデザインで、杖状の召喚機「ベノバイザー」を持つ。変身者とは正反対に、蛇のようなデザインの狂暴なミラーモンスター「ベノスネイカー」と契約している。戦闘力も凄まじい。  
あれ？喘息は大丈夫なのか？

第7話「新世代と侑斗探して幻想入り」(前編)(前書き)

久しぶりの更新です。

## 第7話「新世代と侑斗探して幻想入り」（前編）

その頃、ミラーワールド内部。

現在、交戦しているのはサソードとホッパーライダーの三人。ライダーがミラーワールドの中で活動できる時間は大胆に予測して約9分。それまでに決着を付けなければ、勝負はお預けとなる。

「せやあああつー!!」

メディスンの変身するサソードが、専用武器サソードヤイバーを握り締め、ホッパーライダーに変身している秋姉妹に突撃した。

「お姉様、突っ込んでくるわ!」

「解ったわ。これで決める!」

静葉の変身するライダー・キックホッパーは、稔子の言葉を聞き受けると同時に、ホッパーゼクターの後ろ足「タイフーン」に手を欠け、上に引いた。

「ライダージャンプ!」

《RIDER - JUMP》

タイフーンを引くと、キックホッパーの右足にエネルギーが巡り、突撃してきたサソードの刃をハイパージャンプで回避する。

「くそっ、またかわされたか!」

二度も攻撃が外れたことに舌打ちするメディスン。そして彼女は、逃がしたキックホップパーを見逃し、待機していた稔子「パンチホップパーへと狙いを変えた…その時だった。」

「なんだか賑やかだね。私も混ぜておくれよ！」

突然、三人とは別の声が、ミラーワールド内に響く。三人が声のする方向へ顔を向けると、そこには八坂神奈子の変身する白い仮面ライダー「仮面ライダーサイガが専用武器・トンファーエッジを構え、三人にツカツカと近付いてきた。」

「お姉様、あれは…？」

「仮面ライダーサイガ…恐らく神奈子様の様ね。」

静葉と稔子、メディスンの三人は、新たなライダーの登場に臨戦態勢を取った。しかし、乱入者は1人だけではなかった…。

四人の背後から、また新たな足音が聞こえてきた。その足音の正体は、パチュリーが変身している仮面ライダー王蛇だった。

「何…、私を含めて五人もいるの？」

パチュリー「王蛇は軽く溜め息をつき、手に持つ召獣機「ベノバイザー」を構え、ベルトにセットされているカードケースから、一枚のカードを引き抜いた。」

「この短い時間の中で、四人も相手しなければいけないのかしら？」  
王蛇は面倒臭そうに呟くと、先程のアドベントカードをベノバイザーへセットした。

《SWORD VENT》

ベノバイザーがアドベントカードを読み込むと、突然王蛇の右腕付近の空間に剣が現れ、王蛇はそれを手に取り、四人に向かって構えた。

「面白いじゃない…!!」

まず先に動いたのはサソード。王蛇に狙いを定め、ヤイバーにセットされているサソードゼクターのスイッチを入れた。

「ライダースラッシュー!!」

《RIDER - SLASH》

サソードが叫ぶとヤイバーから電子音が発せられ、タキオン粒子がヤイバーに収束される。

「いきなりで悪いけど、これで終わりよ!」

サソードはそのままヤイバーを握りしめ、王蛇へ向かって突撃した。

「接近戦は好きじゃないのに…」

対する王蛇も先程ソードベントで呼び出した剣を構え、防御の体制

を取る。

『ガキイイーン!』

サソード渾身のライダースラッシュを、剣で防いだ王蛇。反動で二歩ほど後ずさりをした後、再び体制を立て直す。

「いきなり必殺技で来るものなの? なんなら、こちらも必殺技を使わせてもらおうわ」

王蛇はそう告げると、カードケースから新たに一枚カードを引き、ベノバイザーに装填する。

《FINAL EVENT》

電子音声が発せられると共に、王蛇の背後から王蛇と契約している巨大なヘビ型モンスター「ベノスネイカー」が、地面を削るような轟音と共に現れた。

「ミラーモンスター…!!」

サソードはベノスネイカーの姿を見て、驚愕の声を上げる。

「私のライダーは、こんな戦い方もできるのよ…」

そう言うと、王蛇はサソードに向かって走り出す。そしてその背後からベノスネイカーが王蛇の後ろを追うように地を這いながら走り出した。

「こいつ…!!」

サソードは防御態勢を取り、相手の攻撃に備えようとした…しかし、突如王蛇がジャンプし、サソードの視界から姿を消した。

「くっ…、今日はよく飛び回る奴を相手にするな…!!」

サソードはジャンプした王蛇に視線を向けた…が、既にサソードの視界の先には、ベノスネイカーの吐くブレスの勢いに乗りながら連続キックを繰り返しながら迫り来る王蛇の姿があった。

サソードは王蛇のベノクラッシュをヤイバーで防ぐも、そのキックの重さに耐えきれずに、ついにはヤイバーを落としてしまった。

「くっ!」

その隙を見逃すほど、王蛇は甘くない。

再び王蛇は勢いをつけてサソードを蹴り続け、当たりに散乱している鏡の破片へと蹴り飛ばした。

そして、サソードは鏡の破片に吸い込まれるかのように、幻想郷へと戻っていった。

一方、キックホッパーVSサイガ…

「何だ何だ、まるで手応えが無いな」

サイガは二人のライダーを相手しているのにも関わらず、余裕な態度を見せている。まるで疲れを見せていなかった。

「流石に神奈子様は強い…でもっ!」

《RIDER - JUMP》

静葉は再びライダージャンプで上昇し、ライダーキックを放とうとしたが…

「空中戦か…、面白い！」

サイガは背部に装備されているフライングアタッカーで、一気にキックホッパーの倍のスピードで上昇した。キックホッパーの丁度数十メートル坂の真上に到達すると、右足を構えながら、キックホッパーに向かって急降下した。

「終わりだ、静葉！」

サイガはフライングアタッカーの出力を生かしたキック技「コバルトスマッシュ」を発動させる。更にその技を、急降下際の衝撃と合わせ、威力を倍増させる。

『ズドオオオオオオンッ！』

サイガのコバルトスマッシュがキックホッパーを直撃し、巨大な衝撃が轟音を生み、空気を震撼させた。

大きすぎるダメージが原因で、静葉は声を出す間もなく、先程サロードが吸い込まれた鏡の破片めがけて落下していった。

仮面ライダーサロード

仮面ライダーキックホッパー

## ライダーバトル脱落

一方、現実世界・紅魔館内。

「どうやら二人、脱落した様ね」

紅魔館の主、レミリアがベルトを掴みながら呟いた。

「お嬢様、お次はお嬢様が参られるのですか？それなら、今からキバット2世様を呼んで参りますが…」

「それなら心配要らないわ。私は今日は『ランス』で出るから。フランにも『グレイブ』のベルトを渡してあるからキバット達には悪いけど、今回は出番はないと伝えてきて頂戴」

「はい、畏まりました…」

レミリアの言葉を聞き届けると、咲夜は席を外し、退室した。

「それにしても、見る限りライダーバトルてのは、本当に何でもアリなんだな。怪物を呼び出したりもできるとか。」

ライダーバトルを観戦していた魔理沙は、カチャカチャとカイザフオンをいじりながらぶつぶつと呟いた。

「何か…こつという熱いの見ると、興味本意で参加してみたくなるんだよね…」

「疲れて戦いたく無いって言ったばかりじゃないの」

そんな魔理沙に、暇な霊夢はツツコミを入れる。

そんな暇そうな二人に、好奇心を潜めた視線を向けている人物が一人。

「どうしたの、もしかして参加したいとか考えてるの？なら、歓迎はしてあげるけど」

2人に声をかけたのは輝夜。その手には携帯電話型変身ツール「デルタフォン」が握られていた。

「私は別に、二人がかりで掛かってきても問題はないけど？」

「私は別にいいけど、霊夢はベルトを持ってないぜ？」

「持ってなくて悪かったわね…」

ベルトを所有していない霊夢に対し、今度はレミリアが話しかけてきた。

「ベルトが無いなら、一つくらいなら貸してあげられるけど？」

「マジか！？お前ベルトいくつ持つてるんだよ！」

とりあえず、これで霊夢も参加できるといふ事にはなった。レミリアも懐から一つベルトを取り出し、霊夢に投げ渡した。霊夢もそれを受け止めた。

「参加するなら、これを使いなさい。ただし、終わったら返してね」

「何…、もう参加するって決められちゃってるわけ？」

「そうみたいだな。ま、とりあえず頑張ろうぜ」

「あーもー、面倒くさい…」

霊夢は大きいため息をつきながら、ベルトを腰に翳す。それを見た輝夜と魔理沙の二人も、腰にベルトを装着する。

「レミリア…、これ、どうすれば変身できるの？」

「ラウズトレイという、既にカードが入れられた透明なトレイがあるわ。それをそのバツクルの中へ押し込むことで、ベルトの帯が出てくるわ」

霊夢はレミリアの言われたとおりに、ラウズトレイを装填した。トレイを装填した事により、バツクルからカード状のベルトが現れ、霊夢の腰に巻き付いた。

「成る程、こう使うのね。思ったより簡単じゃない」

「変身は、バツクル部分ミスリルゲートを開けばエレメントが貴女の前に放出される。それを通過すれば変身できるわよ」

「成る程…説明、ありがとう」

三人は準備を終え、鏡の前に立った。

「さて…、二対一でも手加減は無しだぜ？」

「言つとくけど、私は初めてだから勝つつもりも負けるつもりも無いから。」

「まあいいでしょう。さて、今回の対決場所は、何処へ繋がってるんでしょうね。」

三人は変身ツールを手に掛け、魔理沙と輝夜はそれぞれの変身コードを打ち込んだ。

『9・1・3…《STANDING BY》』

「変身…」《STANDING BY》

それぞれの変身コードを打ち終えた後、三人は掛け声と共に、各ツールをベルトに装着する。

『変身!』

《COMPLETE》

《COMPLETE》

《OPEN・UP》

魔理沙の体を黄色の、輝夜の体を青白いフォトンストリームが走り、霊夢は前方に展開されたオリハルコンエレメントが自動的に体を通り過ぎた事により変身した。

「さあ、第三幕の始まりよ」

輝夜は余裕めいた口調で、二人よりも先に鏡の世界へと入っていった。

「何か策があるみたいだな、どうする？」

「あなたに任せるわ。私はまず戦い方を覚えたいから」

「そうか。なら私は思い切り戦わせてもらっせ」

そう言うと二人は、輝夜の後を追うようにして、鏡の中へと入っていった……。

場所は離れて、人間の里……

そこには、先日妹紅と慧音が倒したはずのモスアンデッド、文が倒したはずのトリロバイトアンデッドが雄叫びを上げながら里を襲撃していた。

「ギヤアアアア……グルルル……」

「くっ、何なんだこいつらは……!」

「新種の妖怪か!？」

突然の出来事に、住民の殆どはパニックに陥っていた。現在、慧音と阿求、妹紅が不在な為、戦力としてはライダーが残っておらず、絶望的に思われた。

…しかし今、三人のライダーを乗せた時の列車の一つが、アンデッドを討つべくこの人間の里に向かっていた…！！

ゼロライナー内部…

「やはり、あれはアンデッドの様ですね。」

竜宮の使い・永江衣玖がゼロライナーの中から、二対のアンデッドの存在を感じ取っていた。

「アンデッドですか！？ならば私達の出番ですよ、幽々子様！」

「よゝむゝ、そんな事はいいから、何か食べるもの無いの？さっきからお腹の中がピンチなだけど〜」

「こんな状況でも食い意地を貼るんですか！？といつかさっきデネブ様の料理食べたばかりですよね！？」

衣玖の他には、白髪 of 庭師・魂魄妖夢と亡霊嬢・西行寺幽々子の姿があった。

「妖夢様、幽々子様。そろそろ着きますので準備を宜しく御願います。」

「御意！〜！」

「解ったわ〜」

「ギギイイイイ…」

「く、くそ！！何だよこいつらは！！」

「勝ち目ねえよ、早く逃げようぜ！！」

逃げ惑う人々を嘲笑うかのように、アンデッドは周囲の建築物を破壊しながら、人間達に襲い掛かる。

…その時、突如アンデッドの正面の空間が開き、中から緑色の列車の様な乗り物が現れ、その乗り物はその場で停車した。

後編に続く…

## 第7話「新世代と侑斗探して幻想入り」（前編）（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーラルク

登場作品 仮面ライダー剣 MISSING ACE

博麗神社の巫女・博麗霊夢がレミリアから渡されたベルトにより、一時的に変身した仮面ライダー。メインカラーは赤。主な武器は醒銃ラルクラウザーで、装備された特殊なカードでアンデッドを封印する事ができる。

仮面ライダーデルタ

登場作品 仮面ライダー555

蓬萊山輝夜が、ライダーバトル用に持ち込み、変身した仮面ライダー。ファイズやカイザより出力は高いが、特化した部分もないために、汎用性も高い。しかし、輝夜にはもう一つ、変身できるライダーがいる様だが…

名前のみ登場のライダー

仮面ライダーキバ

仮面ライダーダークキバ

仮面ライダーグレイブ

仮面ライダーランス

## 第8話「新世代と侑斗探して幻想入り」（中編）（前書き）

侑斗とありますが、タイトルに反し電王組は今回は出てきませんが、次回に電王キャラが登場します。

今回は王蛇VSサイガの決着です。

追記ですが、この作品で王蛇が劇中では使用していないガードベントを使用していますが、公式設定ではあるらしいので取り入れました。

## 第8話「新世代と侑斗探して幻想入り」（中編）

場所は戻り、ミラーワールド内部。

「さて、残り三人か」

「これで少しは楽になれるわ…」

キックホッパーとサソードを始末した神奈子「サイガと、パチユリ  
ー」王蛇は、再び武器を構え、睨み合う。その光景を見ていた稔子  
「パンチホッパーも、撃破された姉の敵を討つべく、闘争心を高め  
ていた。しかし…」

パンチホッパーの体は既に、粒子化が始まっていた。ミラーワール  
ド内での活動に限界がきたのだ。

「くっ、こんな肝心な時に時間切れだなんて…!!」

稔子は無念さを露わにした声で嘆き、パンチホッパーの力が完全に  
消滅する前に、先程の鏡の破片の中へと身を投げ、幻想郷へと戻っ  
ていった。

一方、別のミラーワールド…

「ここがミラーワールドか。不気味な所だぜ…。」

「看板の文字から建物の構造。何もかもが反転してるわね」

そこには、輝夜を追うためにミラーワールドへ訪れた魔理沙Ⅱカイザと、霊夢Ⅱラルクが辺りを散策していた…その時。

突如カイザの背後から銃声が鳴り響き、放たれたとされる銃弾はカイザのヘルメットを掠めた。それに反応して二人は背後へ振り向いた。

「お前達…、ここで何をしている？」

二人が振り向いた先にいたのは、仮面ライダーファイズだった。手にはファイズフォンの変形した銃、フォンブラスターが握られており、長い時間を有したのか、少しずつ体が粒子化し始めていた。

「お前、その声…。まさか、慧音か!？」

「そういうお前の声にも聞き覚えがある。確か名前は、霧雨魔理沙だったな」

ファイズの正体はワーハクタク・上白沢慧音。互いの正体が判明したとき、二人はホッと溜息を付いた。

「そつだ慧音。お前さつき白いライダーを見かけなかったか？ 私達の対戦相手なんだが…」

魔理沙は慧音に、白い仮面ライダーが此処の付近で見かけなかったかを聞いた。

魔理沙達がここへ行き着いたとなれば、輝夜も必ずこの近くにいるはずだ。

「見かけていたとしたら、既に捕まえている。……ん？待て……。今お前『対戦相手』と言ったな。それは一体どういう意味なんだ？」

「話せば長くなる。こんな所で話すのも時間の無駄だ。戦いが終わったら教えてやるぜ」

「そつか。なら……今はその言葉を信じよう」

慧音は魔理沙の言葉を聞き入れると、握っていたフォンブラスターをファイズフォンへ変形させ、ベルトへ戻した。

「ところで慧音、何でお前がこんな所にいるんだ？」

次に魔理沙が問う。いくら慧音でも、こんな奇怪な所に理由なしに来るはずがないからだ。

「それは、私が説明します。」

慧音のすぐ後ろから新たに聞く声が聞こえた。その声の正体は、人里の幼き天才として話題になっている少女・稗田阿求の変身するライダー、オルタナティブ・ゼロだった。ゼロの体もファイズ同様粒子化が進行しており、これ以上長くは滞在できない状態となってしまうていた。

「弱りましたね……。これでは事情を説明している間に力が消滅してしまいます。また後で人里に来てください。その時に説明させていただきます」

阿求はそういうと二人に頭を下げ、建物の窓ガラスの前に立った。

「慧音さん、これ以上の滞在は危険です。そろそろ戻りましょう」

「そうだな……、いや阿求殿、少し待っててください」

慧音は阿求を待たせると、フェイスフォンを取り出し、コードを入力しだした。

《5、8、2、1、ENTER》

「魔理沙」

「何だ？どうかしたのか？」

「私達にはもう時間がない。だが手を貸すことくらいはできると思ってたな。今、サポートをこちらへ呼んだから、使ってやってくれ。きっとそちらの役に立つだろう」

すると突然、近くの窓ガラスからバイクのような乗り物が飛び出し、慧音のすぐ隣に停車した。

「こいつだ。私の代わりっていうは何なんだが、戦いには十分適應できる」

すると今度はその乗り物が、魔理沙の目の前で人型に変形した。

「では、そちらは頼んだぞ」

「あ…ちよっ」

そう言い残すと、慧音と阿求は幻想郷へと戻っていった。

「魔理沙…どうすんのよコレ」

「慧音の話が真実なら、コイツを頼りにしてみようぜ。あいつがジヨークを言うとは思えないしな」

魔理沙がそのサポートメカ『オートバジン』を見つめると、オートバジンが動き出した。

「お、変形してもちゃんと動けるようだな」

すると今度は、オートバジンは霊夢と魔理沙に頭を下げだし、挨拶のような行動を取り出した。

「へー、なかなか行儀がいいロボットだな。どっかの河童の発明品とは格が違うぜ」

…すると今度は、魔理沙達の目の前から、ザクザクと足音を立てながら近づいてくる黒い人影が見えた。夜明けの群青色に染まったつつすらとした空間の中に、オレンジ色の目を持ったライダーが徐々に近付いてくる。

「待ちくたびれてたぜ…、輝夜！」

現れたのは、仮面ライダーデルタこと、蓬萊山輝夜。不気味に光る目が、二人の精神に威圧感を植え付ける。

「ふふ…。では、始めましょうか。」

デルタは腰に装着されたデルタムーバーを引き抜き、構えた。

「一気に突っ込んで終わらせる！ 霊夢、お前はそのロボットと一緒に、私の援護を頼む！」

「できる範囲でやってみるわ。感謝しなさいよ！」

「……………」

魔理沙もカイザブレイガンを腰から抜き、デルタに銃口を向ける。それを見た霊夢も醒銃ラルクラウザーを構え、オートバジンもバスターホイールを構えた。

「3対1…。いいでしょう、不足はないわ…かかってきなさい！」

先に動き出したのはデルタ。デルタムーバーに音声コード『FIRE』を入力し、ブラスターモードを起動させた。

「よし、二人とも。そろそろ行くぜ！」

カイザの掛け声と共に、ラルクとオートバジンも飛び道具でデルタに応戦する。

突撃していくカイザの後ろから、ラルクラウザーとバスターホイールから放たれた弾丸がデルタに向かって襲い掛かった。しかし、この程度の弾幕は、普段の弾幕ごっこで見慣れている為回避は簡単だ。それどころかデルタもカイザに向かって突撃した。

「さあ、貴女の力を見せてみなさい！」

「言われなくても、イヤというほど見せつけてやるぜ！」

ライダーバトル第三幕、開戦の瞬間だった。

一方、サイガVS王蛇。

「既にあんたは切り札を使っている。チマチマした技よりデカイ技を叩き込まなきゃ、天のベルトの力を得た私は倒せないよ」

「どうかしら？この闘いは、ライダー自身の腕にも勝敗が左右されるわよ。それに、私は初めからアドベントカードだけに頼ろうとも思っではないもの」

常にソードベントとファイナルベントを使用したため、戦力的には大きく傾いていることをサイガから告げられるが、未だに王蛇は余裕の態度を見せていた。

「そうかい。なら…、あんたの腕とやらを拝見させてもらおうとするか！..!」

「面白いじゃない。先に言うけど私の毒はとても強いわよ。試しに一回噛まれて味わうがいいわ！」

サイガはトンファーエッジで王蛇に攻撃を仕掛けた。王蛇もそれに対抗し、ベノバイザーでトンファーエッジを切り払った。

「ごり押しなんて…、私も甘く見られたものね…!」

次に王蛇が、バランスを崩したサイガに向かい、後ろ回し蹴りを叩き込む。キックはサイガの腹部に命中し、その衝撃でサイガは数メートル吹き飛ばされた。

「くそ…魔女の分際でっ!!」

サイガはとっさに立ち上がり、フライングアタッカーをブースターライフルモードへ変形させた。そして照準を王蛇にむけ、フォトンブラッド弾を発射した。

「飛び道具…。なら、これよ」

《GUARDVENT》

王蛇はデッキからガードベントのカードを抜き、ベノバイザーに装填した。すると王蛇の右腕付近に盾が現れ、王蛇はそのまま盾を構え、フォトンブラッド弾を全て防いだ。

「チッ!」

またしても攻撃を防がれ、サイガは舌打ちをした。サイガ自身、いくらキックホッパー相手に圧勝したとはいえ、連戦では集中力を保つのは難しい。

「戦いというのはね、戦術の多さと、知能が高い者が制すのよ。力は技に平伏す。最初に言っただけよ。私の毒は強い、と。」

「何を…言ってる!」

サイガは王蛇の言葉の理解ができずにいた。

「私の毒は、既に貴女の集中力と冷静さを蝕んでいるわ。この二つが欠けてしまえば、勝つための戦略は生まれず後は暴れる力しか残らない。そして私は私の技で、貴女の力を打ち崩す」

再び王蛇はベノバイザーを構え、サイガに突撃した。

「なら…、私はありったけの力であなたの技に対抗してやるわ!」

《EXCEED CHARGE》

迫ってくる王蛇に対し、サイガはサイガフォンを開き、ENTERキーを押した。サイガの体中に流れるフォトンエネルギーはトンフアーエッジに収束されていき、徐々に光を増していく。そしてトンフアーエッジを構え直し、迎撃体制を取る…。

「行くぞ……ッ!」

「来なさい。天の神!」

サイガのトンフアーエッジは、王蛇の頭を捉えていた。

「終わりだ!」

サイガは勝利を予感し、そのまま王蛇の頭を殴り抜けようとした…が。

王蛇は既にその動きを察知しており、回避行動に出ていた。勿論、予測さえしてしまえば、攻撃を回避してしまうのは容易い事だ。攻撃を回避したことにより、サイガは勢いを余ってバランスを崩した。

王蛇はその瞬間を待っていた。

「これで本当の決着よ！」

王蛇は大きくベノバイザーを構え、サイガのベルトを目掛けて振り下ろした。

「ぐ……あ、あッ!!！」

ガギン!という金属音が辺りに鳴り響いた。ベノバイザーはサイガの腰に命中し、その反動で、破壊とまでは行かなかったがサイガドライバーはサイガの腰から外れた。

「私の…勝ちね。」

そのままサイガは膝を付き、暫く動かなかった。そして、フォトンストリームがスーツから抜け、サイガ自身は変身が解除された。

強い光が放たれたと同時にサイガは完全に神奈子へと戻っていた。神奈子は外れたサイガドライバーを持ち、それをただ、じっと見つめていた。

「まさか…、全力を出したにもかかわらず、この私が負けるなんて…。」

一方の王蛇も、落胆している神奈子をじっと見ていた。そして、そんな神奈子を後に、王蛇自身は鏡の破片の中へと入り、幻想郷へ戻った。

仮面ライダーサイガ

ライダーバトル敗退

第9話「新世代と侑斗探して幻想入り」（後編）（前書き）

今回はゼロノス登場につき、後半が少しギャグ路線を走っています。

なお、今回カリスが登場しますが、キャラ崩壊を起こしている確立が非常に高いです。注意して下さい。

## 第9話「新世代と侑斗探して幻想入り」（後編）

一方、アンデッドの襲撃を受けている人間の里では、ゼロライナーを通して新たなライダーが駆けつけた。

「アンデッドを封印できるのは、私達にしかできません。衣玖様。貴女は私達の援護をお願いします。」

「早くご飯食べないと、飢えて死んじゃうわ。」

「…だから、さっき食べたばかりですよね…。」

まず、ゼロライナーに乗っていた内の2人がゼロライナーから降り、辺りを荒らしているアンデッドに向き合った。一人は魂魄妖夢、もう一人は西行寺幽々子。

「準備は出来てますね？幽々子様」

「いつでもいいわよ。」

2人は再びアンデッドと向き合い、妖夢は懐からブレイバツクルを取り出し、スペードのAをラウズライダーに装填する。そして伸張されたシャツフルアップが装着され、妖夢の腰に固定された。

「変身ッ！」

妖夢は変身の掛け声と共に、ブレイバツクルのターンアップハンドルを引いた。

《TURNUP》

ハンドルを引いたことにより、電子音声とともにバツクルのリーダー部分が回転する。そしてリーダー部分からオリハルコンエレメントが妖夢の前面に放出された。

「幽々子様、先に行かせてもらいます！」

妖夢はそのままエレメント目掛けて走り出し、エレメントを通過する。そしてエレメントを通過したことにより、妖夢は仮面ライダーブレイドへと姿を変え、手にしていた楼観剣も、ブレイドの専用武器、醒剣ブレイドラウザーへと変化した。

「いきなり突っ込んでいくなんて、元気で羨ましいわ〜。」

それを見ていた幽々子の腰に、カリスラウザーが浮き出るようにして現れた。

幽々子も懐から一枚、ハートのAのラウズカードを取り出し、カリスラウザーのスリットにスラッシュした。

《CHANGE》

カリスラウザーから電子音声が鳴り、妖夢はブレイドに続き、幽々子も仮面ライダーカリスへ変身。専用武器、醒弓カリスアローを構え、そのまま妖夢の支援に向かった。

「この剣に、斬れぬものなどあんまりない……！」

ブレイドは楼観剣が変化したブレイラウザーを構え、モスアンデッドへ狙いを定め、斬りかかった。

「ギギ…！」

ブレイラウザーの斬撃が、次々にモスアンデッドへ命中していく。

「あまり長引かせていると、幽々子様に申し訳ない。これで決めてみせる…！」

ブレイドはブレイラウザーのラウズトレイを展開し、トレイからスレードの2と6を抜き、ブレイラウザーのスリットにスキャンした。

《THUNDER》 《SLASH》

《LIGHTNING SLASH》

ラウズカードを連続スキャンした際に、ブレイラウザーから電子音声が響き、ラウズコンボ技「ライトニングスラッシュ」を発動させた。

ブレイラウザーの刀身に電撃が走り、ブレイドはそのまま電撃を纏ったブレイラウザーでモスアンデッドを斬りつけた。

「ギユアアアアッ…！」

ライトニングスラッシュはモスアンデッドの腹部を直撃。命中した際の反動で、モスアンデッドは吹き飛んだ。

一方、トリロバイトアンデッドVSカリス。

「グルルルル……」

「そんな警戒しなくても、直ぐに終わるわよ。」

トリロバイトアンデッドはカリスに突撃。左腕のカギツメと右腕の盾でカリスを攻撃する。しかしカリスは平然とカリスアローでそれを受け止めた。

「あらあら、元気じゃない。」

次にカリスが反撃に出た。アンデッドを押し退けると再びカリスアローを構え、カリスアローから打ち出される光の弾「ホークトルネード」をアンデッド目掛けて打ち出した。

ホークトルネードはトリロバイトアンデッドを直撃し、アンデッドもそのまま地面に倒れ込んだ。

二体のアンデッドはブレイドとカリスの圧倒的な戦力差の前に、為す術もなく地面にひれ伏せた。

「下級アンデッドが相手じゃあ、こんな程度ですかね。全く、またつまらない者を斬ってしまいました」

「そういう事言わないの。それにまだ、封印が終わって無いわよ。」

「あ…、そ、そうでしたっ！！」

2人はカードケースから一枚ずつ、カードを取り出した。そして2人はそのカードをアンデッドに向かって投げた。それぞれのカードは2体のアンデッドの胸部に突き刺さると、カードがアンデッドの体を吸い込むかのように、アンデッドはカードの中へと封印された。

「これで完璧、ですね」

妖夢がホッと溜息をつくとき、今度は幽々子が、新たな敵の気配を察知した。

「どうやら、まだ終わってはいないみたいよ」

幽々子は安心しきっていた妖夢に忠告する。すると今度は、緑色のずんぐりとした怪人の群れが、2人に近づいてきた。

90

ゼロライナー内部。

「あれは、アンデッドではない…。これは、ワーム!?!」

ゼロライナーの中で待機していた永江衣玖は、新たな敵の登場に動揺した。

「さすがにあの2人では、あれだけの数を相手するには少々難しい。なら…」

衣玖はゼロライナーから降り、妖夢と幽々子の元へ駆け付けた。

「妖夢様、幽々子様。貴女達だけでは苦戦を用いられる事は确实です。今回は私も戦闘に参加します」

衣玖は2人に告げると、手にしていたベルトを腰に巻いた。そして、ポケットに入っていたカードを取り出し、カードの緑色の面を表に、ベルトへ装填した。

《Alttille-form》

ベルトから電子音声が鳴り、衣玖の体がスーツで覆われ、更にその上から装甲が装着され、衣玖は仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォームに変身した。

「お願いします、デネブ様！」

アルタイルフォーム変身後、衣玖はゼロライナーに向かって叫んだ。

「了解！！侑：いや、衣玖！」

衣玖の声を聞き届け、ゼロライナーから一人の人影が降りてきた。黒く長いコートのような服に身を包み、黄金のマスクのようなものを付けた感じの顔。そして服装や体格に似合わないエプロン。…そう、彼（？）こそが、桜井侑斗の契約イマジン、デネブイマジンだ。

「では…行きますよ。」

衣玖は先程装填したカードを抜くと、今度は裏側の黄色い面を表にして、ベルトに装填した。

《Vega-form》

新たな電子音声と共に、デネブが衣玖と合体、そして衣玖は仮面ライダーゼロノス・ベガフォームへ強化変身した。

「最初に言っておく。胸の顔は飾りだっ！」

ゼロノスは意味の分からない台詞とともに、ゼロガツシャーを構えた。

「私の見る限り、30匹以上は居ますよ……」

そんなゼロノスはさておき、妖夢は敵ワームの数を分析した。

「30匹……。面倒ね〜。」

幽々子も大きく溜息を付き、カリスアローを構えた。

「何かとさわがしいので来てみたら……これは凄いことになってますね!〜!」

「こんな数じゃ、落ち着いて買い物もできやしないわ」

「そうですね……って、何で貴女達が此処にいるんですかッ!?!?!」

妖夢の隣には、いつの間にかいたのかワームに向かってカメラを構えた射命丸文と、買い物袋を下げた八雲藍が立っていた。

「貴女達、今どどういう状況か解ってるんですか!?!」

妖夢は文と藍につつこんだ。

「いや、買い物帰りに何かと騒がしかったので、此处に来てみただけだが…」

「まさか人里で、こんな特ダネ級のネタがあれば、記者魂に火が付くってもんですよ!!」

妖夢はそんな2人に呆れて、ブレイラウザーの刃先を2人に向けた。

「そんな下らない理由なら、帰ってください!!」

文と藍は、一瞬妖夢の背後に鬼神の影のような者を感じ取り、一瞬にして背筋が凍り付いた。

「わわわ解りました!何なら私達も協力しますので、その剣をしまつて下さい!!」

妖夢は文の言葉に首を傾げた。

「協力?それってどういう…」

すると今度は、突然二匹の昆虫型変身コアが空から現れ、一機は文の手に、もう一機は藍の右腕に装着されたブレスレットに止まった。

「妖夢さん、そのままの意味ですよ…。変身!!」

《HENSHIN》

文はカブトゼクターを腰のベルトにセットし、仮面ライダーカブト・

マスクドフォームへ変身した。

「私も続こう、変身!！」

《HENSHIN》

《CHANGE・BEETLE》

次に藍も、先程プレスレットに止まった銀色のカブティックゼクターを回転させ、スイッチを入れた。それにより、藍も銀色のライダー、仮面ライダーヘラク스에変身した。

「貴女達も、ライダーだったんですか…。」

妖夢は2人の変身したライダーを見て、啞然としていた。

「これで5人です。三人で闘うことよりは楽だと思えますが？」

「勿論、手抜きは一切しない。安心して欲しい」

妖夢、幽々子、衣玖、デネブの四人は、予想外すらしていなかったライダーの出現に、緊張が解された。ゼクトルーパーやライオトルーパーならまだしも、カブトとヘラクスは上級クラスの戦闘力を持つ強力なライダーだ。たとえ二名でも、その戦闘力はゼクトルーパー100人近くに匹敵できる。

「これだけライダーがいれば勝てますね、幽々子様！」

「そうね〜。後は妖夢がつまらないミスさえしなければの話だけど

」。

確かに、人数は多い方が確実に勝率が上がる。しかも、ここにいる5人のライダーは、どれも強者ばかりだ。そう簡単に負けるはずがない。……そう。敵のワームが持つ、ある「特殊能力」を除けば…。

## 第9話「新世代と侑斗探して幻想入り」（後編）（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーブレイド

登場作品 仮面ライダー剣

白玉楼の庭師、魂魄妖夢が変身する、ヘラクレスオオカブトの能力を備えた仮面ライダー。専用武器である醒剣ブレイラウザーは、この世に存在する固形物質全てを斬り裂くことができ、斬れないものはあんまりどころか、まずない。

仮面ライダーカリス

登場作品 仮面ライダー剣

白玉楼の主である西行寺幽々子の変身する、ヒョウモンカマキリの能力を備えた強力な仮面ライダー。潜在能力が非常に高く、ブレイドやギャレン、レンゲルとも違う機構で変身する。専用武器は醒弓カリスアロー。

仮面ライダーゼロノス アルティルフォーム

登場作品 仮面ライダー電王

突如姿を消した桜井侑斗に変わって、デネブから渡されたベルトに

より永江衣玖が変身するゼロノスの第一形態。ゼロガツシャーによる近接戦闘が得意。メインカラーは緑。

仮面ライダーゼロノス ベガフォーム

登場作品 仮面ライダー電王

アルティルフォームとデネブイマジンが合体した姿で、ゼロノスの第二形態。アルティルフォームに比べて俊敏性が少し劣るものの、パワーが飛躍的に上昇している。デネブ曰わく「胸の顔は飾り」らしい。

仮面ライダーヘラクレス

登場作品

仮面ライダーカブト GOD SPEED LOVE

隙間妖怪・八雲紫の式神である八雲藍が変身する銀色の仮面ライダー。マスクドライダーの中でも、かなり高性能の部類に入るライダーであり、必殺技の「ライダービート」の威力も非常に高い。銀色のカブティックゼクターにより変身し、モデルはヘラクレスオオカブト。

## 第10話「影の蜂と高速世界」

「はあ、はあ、はあ……!!」

ここは霧の湖。普段は霧の立ち込める静かな妖精達の住処だが、今回はどこか違っていた。

「何で彼奴等、しつこくあたいを追っかけてくるの!？」

「私に聞かないでよチルノちゃん!」

「でも、あからさまにフレンドリーな関係を知りたい訳じゃなく、私達の命を狙ってるね」

「そーなのかー」

霧の湖では、二匹のワームに追いかけて回されている四人の少女がいた。氷の妖精チルノ、その友人の大妖精、宵闇の妖怪ルーミア、妖怪昆虫にしてガタツクゼクターの適格者、リグル。

「ギチキチギチ…」

追いかけているワームは緑色。すなわちサナギ体である。だがしかし、ワームの場合はいつ脱皮して、成虫体となり襲いかかってくるかは解らない。その為に、可能であればサナギ体のまま叩いておく必要がある。

「逃げてたら罅が開かない!いくよ大ちゃん!」

「分かりました!!」

このまま退いていたら時間の無駄だと判断した二人は、いきなり立ち止まり、素早くワームに向き合った。そしてリグルはベルトを、大妖精は銃のグリップを取り出した。それに呼応してか、空からクワガタ型のゼクターと、トンボ型のゼクターが現れた。

「ここは私達が食い止める! チルノちゃんとルーミアちゃんは、その際に安全な場所へ!」

「分かった。感謝するわりグル、大ちゃん!!」

「分かったのだー!」

二人から逃げるよう告げられたチルノとルーミアは、やむを得ずその言葉に従い、二人を背に走り出した。

「さあ、いくよ!!」

「はい!! いつでも大丈夫です!」

リグルは空中を舞っていたガタツクゼクターを右手でキャッチし、ベルトに装着した。

《HENSHIN》

電子音声が鳴り、青い装甲がリグルの体を覆っていく。そして装甲が完全にリグルを覆うと、リグルはゼクターホーンに触れた。

《CAST - OFF》

《CHANGE - STAGBEE TLE》

装甲が外れ身軽になった事により、リグルは仮面ライダーガタックライダーフォームへと変身。

それに続き、トンボ型変身コア・ドレイクゼクターも大妖精のグリップと合体した。

「…変身!」

《HENSHIN》

大妖精の体を、先程のガタックゼクターのように装甲で覆われていく。そして、装甲が自分の体を完全に覆ったことを確認すると、大妖精はドレイクゼクターの尻尾の先端部を引いた。

「キャストオフ」

《CAST - OFF》

《CHANGE - DRAGONFLY》

ドレイクマスキドフォームの装甲が強く弾け飛び、ガタックに続き大妖精も仮面ライダードレイクに変身。二人はワームに向かって身構え、臨戦態勢を取った。

「リグルちゃん、直ぐに終わらせよう」

「大ちゃん、初めからそのつもりだよ」

ドレイクはドレイクゼクター、ガタツクはガタツクダブルカリバーを構え、敵ワームを補足した。

「ギチキチギチ…ギチキチギチ…」

二体のワームは二匹のライダーに向かって走り出し、襲いかかった。

「そっちから突っ込んでくれるなんて、有り難いわ！」

ガタツクはガタツクダブルカリバーを互いに合体させ、ダブルカリバーは双剣から銃型となる。

「ライダーカッティング！！」

《RIDER - CUTTING》

ガタツクは必殺技・ライダーカッティングを発動。タキオン粒子が体内を巡り、ダブルカリバーへと集束されていく。そしてその刃を、突っ込んできたワームへと向けた。

「ギギギギツ！？」

ガタツクはそのまま突撃してきたワームをダブルカリバーで挟み込み、ギリギリと締め上げた。

「はあああああっ！！」

ダブルカリバーからは、タキオン粒子がスパーク現象を発しているかのような、稲妻を連想させる激しい光が発せられていた。そしてそのまま挟み込まれていたワームはガタツクの力とタキオン粒子に

耐えきれず両断され、爆発した。

「一匹撃破！大ちゃん、そっちは頼んだよ！」

一方のドレイクも、遠距離攻撃により確実にワームの体力を減らしていた。

「一気に仕掛けるつもりね！」

リグルの声を聞き届け、ドレイクはドレイクゼクターの銃口を再びワームへ向けた。そしてドレイクゼクターの羽を起こして羽同士を合わせ、下に引くようにして羽を倒した。

「ライダーシューティング！」

《RIDER - SHOOTING》

ドレイクも必殺技・ライダーシューティングを発動。ドレイクゼクターがタキオン粒子を収束し、銃口に青い光がバチバチと唸りを上げながら輝きだした。

次の瞬間ドレイクはトリガーを引き、ドレイクゼクターの銃口から高密度のタキオン粒子が発射され、ワームに命中した。

ワームは地面へ膝を付き、タキオン粒子の威力に為す術もなくそのまま爆散した。

「呆気ないわね、ワームも。」

「…此方が強すぎるだけなんじゃないですか？」

ガタツクとドレイクはワームを倒し、変身を解除した。

「あれ？そういえばチルノちゃんとルーミアちゃんは、何処まで行ったんでしょか……」

「多分近くにいるはずだよ。さて、私達はあの二人を捜そうか」

ワームとの戦闘を終え、リグルと大妖精はチルノとルーミアの捜索に乗り出した。

一方、遠く離れた妖怪の山にもワームが出現していた。

「ギグググツ……!!」

「くっ……、文先輩は一体何処へ!?!」

侵入してきたサナギワーム達と、弾幕攻撃と刀で応戦している白狼天狗の少女、犬走椛は嘆いた。

あれだけ弾幕を叩き込んでも、あれだけ刀で切りかかっても、ワームの体には傷一つ付いていない。……やはり、ワーム達に対抗するにはあの力しかあるまい。

椛は一時敵から離れ、左腕を突き出すようにして構え、空へ視線を向けた。

すると今度は空から八チ型変身コア・ザビーゼクターが飛来し、椛はそれを右手でキャッチした。そしてザビーゼクターを左腕に取り付けられていたザビーブレスに装着した。

「変身」

《HENSHIN》

椀の体を装甲が包み込むように展開され、椀は仮面ライダーザビーに変身した。

「よし……！」

ザビーは再びワームの群れに突撃し、まずは群の中の一匹に狙いを定め、パンチで勢いよく殴った。

「ギチキチギチ……！」

ワームはザビーのパンチに怯み、一步後ろへと下がった。

「どうやら効いてるみたい……なら！」

攻撃が効いていることを確信すると、ザビーはゼクターの羽を上げ、ゼクターを180度回転させた。

《CAST-OFF》

電子音声と共に、ザビーの体から装甲が勢いよく弾け飛び、装甲の破片はワーム達に命中した。

《CHANGE-WASP》

装甲を廃棄した事により、身軽なライダーフォームへと変わったザビー。

「どうやら、強い衝撃を持つ攻撃には弱いみたいね……。なら！」

いくら弾幕を叩き込んでも、いくら刀で斬ってもまるで効いていなかったワーム。しかし先程のマスクドフォームの放ったパンチについては斬撃でも射撃でもなく衝撃重視の物理攻撃であるため、ワームは強い物理衝撃に弱いと考えることができる。

「一匹一匹は面倒ね。纏めて倒すしかないか…クロックアップ!」

《CLOCK・UP》

纏めてワームを倒すため、ザビーは高速移動能力・クロックアップを起動させた。その瞬間、ザビーの見渡す世界の時間が著しく遅くなり、ワーム達の動きも極端に遅くなっていた。…いや、正確にはザビー自身のスピードが数百倍にも跳ね上がった事により、周りの時間がザビーに追い付けず、このようなスロー現象を引き起こしたのだ。

「ライダーステイング!」

《RIDER・STING》

ザビーはザビーゼクターの背部スイッチを押し、最強必殺技・ライダーステイングを発動させた。タキオン粒子が左腕に集束され、稲妻の如く光が左腕を包み込む。

そしてザビーはワームの群れに突っ込み、ライダーステイングを放った。

まずは一匹のワームに狙いを定め、ライダーステイングをワームの腹部めがけて叩き込んだ。続けて他のワームもこの方法と同様に、一匹一匹、確実に全てのワームに命中させていった。そして…

《CLOCK・OVER》

ゼクターから時間操作の限界を知らせる電子音声が鳴り、ザビーは通常時間の世界へと戻った。

それと同時に、ライダーステイングを受けたワームは全員爆発し、辺りはまた静けさを取り戻した。ワームの全滅を確認すると、ザビーは変身を解除し、椀の姿へ戻った。

「山が危険だったと言うのに、文先輩は一体何処に……」

変身を解除した椀は、文の所在を確認すべく『千里を見渡す程度の能力』を使った。

「…人間の里…？…ワームと交戦中……！？こうしちゃられない！」

椀は能力でワームの姿とカブトに変身した文を確認すると、焦ったような表情で山を下り、人間の里へと向かった。

## 第10話「影の蜂と高速世界」(後書き)

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダードレイク

登場作品 仮面ライダーカブト

チルノの大親友である大妖精が変身するトンボをモチーフとしたマスコドライダー。ドレイクゼクターというトンボ型変身コアを、ドレイクグリップと呼ばれる銃のグリップ部分のようなパーツと合体させる事により変身する。必殺技は高濃縮タキオン粒子弾を発射する「ライダーシューティング」。

仮面ライダーザビー

登場作品 仮面ライダーカブト

妖怪の山の哨戒白狼天狗・犬走椋の変身する蜂をモチーフとした仮面ライダー。ハチ型変身コア「ザビーゼクター」を左腕に装着する「ザビープレス」にセットする事により変身する。必殺技はタキオン粒子を左腕のザビーゼクターに集中させ、敵を貫く「ライダーシューティング」。

## 第11話「世界の破壊者・デイケイド」(前書き)

今回は会話シーンが主なので、戦闘描写は比較的薄目です。

## 第11話「世界の破壊者・ディケイド」

ここは光写真館。幻想郷とは離れた、外の世界に存在する奇妙な写真館だ。

すると突然、空間に不気味な切れ目が入り、その中から見たこともない造形の日傘を片手に、奇妙な服を身に纏った金髪の女性が現れた。

「ここが、光写真館…。」

その女性。八雲紫は写真館を見渡した。そして彼女は周囲を確認した後、写真館へと入っていった。

カランカラン…

ドアが開き、紫は写真館の中へ足を踏み入れた。

「おお、いらつしやい」

まず最初に紫に声をかけたのは、光写真館の店主である、光栄次郎。そして今度はその紫が、栄次郎に質問をした。

「何でも、通りすがりの仮面ライダー…と名乗っている人物がいると聞いて、訪れてみました。」

「ほお…、士君に用があるのかい」

「そういう事になりますわ。」

紫は日傘を傘置きに刺すと、写真館の中を歩き始めた。

「その士という人物は、今何処にいるのかしら？」

「うん、さっきユウスケ君達と一緒に買い物へ行ってしまってたね。暫くすると戻ってくる筈だから、少し店の中でのんびりとしているといいよ」

「じゃあ、そうさせていただくわ」

紫は栄次郎の言葉に従い、店内の椅子に腰を掛けた。

数時間後…

「士…何でお前ばかりそんな軽そうなの荷物を持つてるんだ！」

「それは、ユウスケ君がジャンケンで最初に負けたからじゃないですか？」

「ナツミカンの言うとおりだ。残念だったなユウスケ」

光写真館に門矢士、小野寺ユウスケ、光夏海の三人が何やら買い物袋を大量に掲げながら戻ってきた。

「買い物、ご苦労だったね。…それと士君にお客様が来てるよ」

「俺に…？」

栄次郎は土を店内で待たせている紫の元へ案内した。

「貴方が仮面ライダーディケイド……、門矢士ね。噂は聞いているわ」

紫は椅子から立ち上がり、ゆっくりと土に近付いた。

「おい土、この人お前の知り合いか？」

ユウスケは荷物を下ろし、土に問いかけた。

「いや、俺は知らない。ただ一つだけ言えることは……」

「ああ、俺も感じる……。」

ユウスケと土は、紫から放たれている強い「気」を察知していた。二人はそのまま女性に向かって身構えた。

「あらあら、随分と用心深いのね」

そんな二人を見て、紫は扇子を手に取り、クスクスと笑い出した。

「お前、何が目的だ？」

土が紫に問う。すると紫はゆっくりと扇子を持った右腕を上げ、答えた。

「……今に解るわ。」

紫は扇子で空間を斬るようにして、右腕で軽く扇子を振った。する

と扇子が振られた個所の空間が割れ、その中から黄金のカブティックゼクターが勢い良く現れ紫が右腕に着けているカブティックブレスに止まった。

「変身」

《HENSHIN》

紫の声に反応して、カブティックゼクターは紫の体を包み込むようにアーマーを展開した。

《CHANGE - BEETLE》

変身完了の電子音声が鳴り、紫は黄金の仮面ライダー、仮面ライダーコーカサスに変身した。

「付いてきなさい。貴方の力を少し試させてもらっわ」

コーカサスはそう言い残すと、写真館からゆっくりと外に出た。

「士…どうするっ？」

「…運動には丁度良いかもな」

そう言うと、士もコーカサスの後を追うように写真館から出た。

…そして、写真館から少し離れた場所にある廃工場に、コーカサスはいた。

「来ると思ってたわ。」

コーカサスは何も構えていない状態・自然体の体制で士の正面に立った。

「…お前、俺の何が狙いだ？」

士も変身ベルト・ディケイドライバーを取り出し、腰に装着した。

「だから言ったでしょう。その内に分かるって」

「答える気は無いようだな…なら力づくで吐かせてやる。変身!!」

士は一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーに装填。そしてディケイドライバーのバツクルを回転させた。

《KAMEN - RIDE DECADE!!》

電子音声と共に、士は仮面ライダーディケイドに変身。コーカサスに向かって走り出した。

「はあっ!!」

ディケイドの先制攻撃。連続パンチをコーカサスに向けて放った。パンチはコーカサスに命中するが、微量のダメージしか与えられていなかった。

「くそっ、なかなか堅いな…。」

ディケイドは体制を立て直す。しかし次の瞬間ディケイドの眼前に

映っていたのは、コーカサスの拳だった。

「ぐわあああっ!!！」

コーカサスの放ったパンチはデイケイドの顔面に命中した。反動でデイケイドは地面に叩きつけられた。

「この程度かしら? 『世界の破壊者』 というのも……」

コーカサスはカブティックゼクターに触れ、スイッチを入れた。

《CLOCK - UP》

やっこの思いで立ち上がったデイケイドだが、いきなり視界からコーカサスの姿が消えた。

「クロックアップか……。なら!!！」

デイケイドはライドブッカーからカードを取り出し、ベルトにセットした。

「カブトムシには、カブトムシだ!!！」

《KAMEN - RIDE KABUTO!!》

デイケイドは仮面ライダーカブトへ姿を変え、続けてカードを一枚、デイケイドライバーにセットした。

《ATTACK - RIDE CLOCK - UP!!》

「行くぜ…！」

Dカブトもクロックアップを使い、高速の世界へ入り、コーカサスと応戦した。

「はあっ！！おりゃあっ！！！」

「くっ、はああっ！！！」

二人の拳が激しくぶつかり合い、強い打撃音が周囲の空気を飲み込んだ。

そして、高速移動システムの限界が近付き…

《CLOCK - OVER》

《CLOCK - OVER》

二人のクロックアップは停止し、通常時間に戻った。しかし未だに二人のぶつかり合いは続いていた。

「パワー不足か…。これならどうだ！」

《KAMEN - RIDE HIBIKI!》

再びライドブッカーからカードを抜き、ベルトにセットした。すると今度はカブトから響鬼へと姿を変えた。

「はああっ！！！」

D響鬼の放ったパンチは、今まで繰り返し出てきたパンチの威力とは

比較にならない程の威力だった。

「ぐ…ッ!」

D響鬼のパンチはコーカサスの鳩尾に命中し、あのコーカサスが三歩ほど後ずさりをした。地べたに膝を付きそうになったが、左腕で腹部を押さえ、自らの体に渴を打ち、何とか踏みとどまった。

「なかなかやるわね…。」

「伊達に九つの世界を救ったライダーじゃないからな。」

コーカサスは再び拳を構えようとするも、先程のパンチが強すぎたのか、まともに構えられる状態ではなかった。

「…成る程ね。貴方の実力は十分私達の世界でも通用できるわ…。」

コーカサスがそう言うのと右腕からカプティクゼクターが離れ、アーマーが剥がれ落ち、変身が解除されコーカサスは紫へと戻った。

「お前の世界…?という事だ」

土もデイケイドライバーにセットされかカードを抜くことで変身を解除し、紫へ問いかけた。

「ここでは話し辛いわ。まずは写真館に戻るとしましょう」

「……。」

紫から詳しい話を聞くために、土は紫と共に光写真館へと戻った。

数時間後、光写真館：

「ライダー…バトル？」

「ええ。今私の世界で流行している遊びの一つよ」

「仮面ライダー同士で闘うことが…、遊びだつて!？」

紫の一言に驚きを隠せない士とユウスケ。

「私が個々に来たのは、この世界のライダー…、ディケイドの力を試す為。そして貴方達を、私の世界へと招待する為…」

紫の言葉を、少しばかり納得した士。

「成る程。だいたい解つた…。」

「だいたいつて…、何がだよ」

士の一言に動揺するユウスケ。

「どうやら俺達には、まだ旅をするべき世界があるらしいな…」

士はそう言つと、写真館の背景ロールを下ろした。すると、そこには新たな絵が描かれていた。

闇夜を裂く黄色のクロスラインと、それを囲む黄色い流星群。

「土、この世界は……」

「……カイザの世界か……？」

「でも……、カイザはファイズの世界のライダーだろ？その世界が何で……」

ユウスケと土達は動揺していた。サブライダーの世界なんて、今まで見たことも聞いたことも無いからだ。だがしかし、ルールが下ろされてしまった以上、この世界では土達が成すべき事があるはずだ。そして、この世界での役割は一体……。

## 第11話「世界の破壊者・ディケイド」（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーディケイド

登場作品 仮面ライダーディケイド

通りすがりの仮面ライダーを自称する青年・門矢士が変身する仮面ライダー。特殊なカードにより変身する。また、他の仮面ライダーに変身できる特殊能力も持つ。

仮面ライダーコーカサス

登場作品

仮面ライダーカブト GOD SPEED LOVE

隙間妖怪・八雲紫の変身する黄金の仮面ライダー。士が幻想郷でのライダーバトル参加者にふさわしいかを見極めるため、変身して戦いを挑んだ。なお今回はあくまで士のテストが目的だったので、ハイパーゼクターを装着していなかった。

## 第12話「幻想世界と不完全な力」

現在、人間の里では5人のライダーが、押し寄せてくるワームの群れと戦闘をしている。

「ギツ、ギツ、ギチギチ…」

「はああっ、はっ、やああっ!!」

妖夢の変身する仮面ライダーブレイドは、ブレイラウザーを手にワームの群と対峙する。

「数が多くても、戦力差ならこちらが有利。決めてみせる!!」

ブレイドはブレイラウザーを振るい、ワーム達を叩き斬っていく。次々にワームはブレイラウザーの刃の餌食となり、断末魔をあげながら爆発していく。

ブレイドを援護する他のライダーもブレイドと同様に、ワームに対する迎撃行動を開始した。

「しかし、数が多すぎるな。少し勢いを上げるか…!」

仮面ライダーヘラク스에 변신している八雲藍はゼクトクナイガン・アックスモードを構え、数10匹で構成されているワームの群れを相手に突撃した。

「うああああッ!!」

「ギチッ!!ギチギチイッ…!!」

ゼクトクナイガンの刃はワームの体を深く斬り裂き、ワームは爆散した。

「よし、勢いを落とさなければ…確実にいける!」

ヘラクスはゼクトクナイガンを構え直し、次から次へと迫るワームを一匹ずつ斬り裂いていく。

一方のカリス、ゼロノス、カプトも自らの持つ専用武器、カリスアローとゼロガツシャー、カプトクナイガンを巧に使いながらワームの群れを掃討する。

「はあああッ……はっ!」

ゼロノスベガフォームの振るうゼロガツシャーの威力もすさまじい。次から次へと沸いてくるワームの群れをいとも簡単になぎ払っていく。

《よし衣玖、この勝ち方なら問題ない。》

「…ただ普通に剣を振ってるだけにしか見えませんか…」

一方、士達は紫に導かれるかのように、「カイザの世界」へ無事到着した。

「ここがカイザの世界か…。」

士達はカイザの世界にやってきたということを確認すると、写真館から出た。しかし、その場所は…

「つ、士！ちよつと外を見てみる！」

ユウスケが焦ったような顔で士を呼びかけ、窓を指差した。ユウスケの視線の先には、さまざまの数々のワームと対峙している5人の仮面ライダーがいた。

その光景を目にした士とユウスケは、ワームと闘っているライダー達の救援に向かうための準備をした。

「夏海ちゃん、栄次郎さん！写真館の中から出ないで隠れてて！」

「解りました！」

ユウスケが二人に向かって叫ぶと、夏海と栄次郎は写真館の奥へと非難した。

「よし、士。俺達もいこう！」

「よし。この世界のライダーの実力を見せてもらおうとするか。」

二人はそう言い残すと、写真館から飛び出していった。

「ギチギチイッ…ギチギチイッ…」

5人のライダーはワーム達を確実に圧倒していた。しかし次々とワームが人里に攻め行ってきたので、数は増すばかりだ。

「まだ…、まだ終わっては…ッ！」

「…お腹すいたわ。」

ブレイドとカリスの二人は、長期戦が続いていたために、他の3人と違ってかなり疲労が溜まっていた。いくら二人が人外の存在だとしても、ライダーシステム長時間着用の負担は大きいのだ。

「ギチギチギチギチ…」

ワーム達はこれを待っていたと言わんばかりに、次々と疲れの生じたブレイドとカリスに襲い掛かった。

「くっ、しまっ…。」

ワーム達がブレイドを飲み込もうとした…その時。

「ギギギッ!？」

「え…?。」

士とユウスケの乗る二台のバイクが突如現れ、ブレイドに群がるワーム達を蹴散らした。バイクはその場で止まり、二人はバイクから降りワームの群れと向き合った。

「ユウスケ、行くぞ！」

「よ、よし！」

士はディケイドライバーを取り出し、腰に装置した。それに合わせてユウスケもアークルを呼び出した。

『変身！』

《KAMEN - RIDE DECADE!》

変身の掛け声と共に、士はカメンライドカードをディケイドライバーにセットし、仮面ライダーディケイドに変身。ユウスケも変身ポーズを取り、仮面ライダークウガに変身した。

「また、新しいライダーが来ましたね…。」

「でも少しはましじゃない。これで私たちも暫く休めそうだし。」

ディケイドとクウガが加勢した事により、長時間奮戦していたブレイドとカリスは一時後退した。それに変わって、今度はディケイドとクウガがワーム達と向き合い走り出した。

「サナギ体なら、これで十分だな！」

《ATTACK - RIDE SLASH!!》

ディケイドは一枚のアタックライドカードを使用した。ライドブッカーは剣状に姿を変え、一つの武器になった。

「うおおっ!!！」

「ギツ!!!?」

デイクイドは助走で勢いをつけ、そのままワームに斬り掛かった。ライドブツカーの刃はワームを切り裂き、同時にワームは爆発した。

一方、ユウスケの変身するクウガもワーム達と奮闘していた。

「はああっ!!はっ!!」

「ギツ、グキユ…」

パンチとキックで、少しずつワームの体力を削っていくが、これでは時間も掛かり、埒があかない。

「くっ、超変身!!」

ユウスケが叫ぶと再びアークルが輝きだし、発光部分が紫色になる。するとクウガは標準であるマイティフォームから、大地を司る紫のクウガ、タイタンフォームへとフォームチェンジした。

「うおおおおっ!!!!」

クウガは大剣を手に、ワーム目掛けて振り下ろした。ワームはそのまま一刀両断にされ、爆発した。

ワームを撃破するとクウガは、他のライダーの援護へと向かった。

一方、ヘラクースとカブト…。

カブトはマスクドフォームのパンチで、ヘラクスはゼクトクナイガンの刃でワーム達と応戦していた。

「やっぱり、パンチやキックだけじゃあまり大きなダメージは期待できませんね」

「なら、一気にいくとしようか？」

「そうですね。……キャストオフ！」

《CAST - OFF》

カブトはベルトのゼクターホーンを引き、マスクドフォームの装甲を放棄した。

《CHANGE - BEETLE》

キャストオフした事により、カブトはライダーフォームとなった。そして戦闘をしていたヘラクスと並び…

「クロックアップ!!」

《CLOCK - UP》

《CLOCK - UP》

ヘラクスとカブトはクロックアップを使い、超高速の世界へ入っていった。

そのまま両者は武器を手に、次から次へとワーム達に攻撃を加えて

いった。時間の許せる限り、ありつただけの数のワームを相手にありつただけの攻撃を叩き込む。

「纏めて行くぞ。ライダービート！」

「そうですね。行きますか！」

《RIDER - BEAT》

《ONE、TWO、THREE…》

ヘラクスはカブティックゼクターを回転させ、必殺技ライダービートを発動させた。ゼクトクナイガンを構えている右腕にパワーが収束される。

一方のカブトは自らワーム達の大群生の中心へと強行突入。そこでカブトゼクターのスイッチを入れ、体制を整え足を構えた。

「はあああああつー！！」

ヘラクスはライダービートを発動させた右腕で、ゼクトクナイガンを振り回しながらワームを切り刻んでいき、群の中を突き進んでいく。ワームとゼクトクナイガンからは凄まじい数の火花が眩しいまでに散り、戦況の激しさを物語っている。そしてヘラクスは群の中を突っ切り、背後のワーム達を睨んだ。

そして群れの中に突入したカブトも必殺技の準備が完了した。

「ライダーキックー！！」

《RIDER - KICK》

カブトはゼクターホーンを再び引くと、右足にタキオン粒子が集中していく。そしてそのままワーム達を纏めて倒すかのように、タキオン粒子を纏った右足で後ろ回し蹴りを放った。群れを形成していたワーム達はカブトを中心に纏めて蹴り飛ばされ、ゆっくりと宙に舞った。

そして…

《CLOCK - OVER》

《CLOCK - OVER》

二人のクロックアップの機能が停止し、それと同時に先程攻撃した計数十匹、その全てのワームが爆発。群の大半を失ったため、ワーム達の数も一気に減少した。しかしその原因は勿論、二人にしか確信できていない。残りのライダーは突然目の前でワームが大量に爆発したと見えてしまったので、殆どのライダーが同様してしまっていた。…しかし、クロックアップを持たないライダーでも、この現象の正体を把握しているライダーが一人いた。

「仮面ライダーカブト…。成る程、クロックアップを使ったな…。」

仮面ライダーディケイド。彼は『カブトの世界』において、クロックアップをこの目に焼き付けており、自身もそれを使用していたからこそ、同様される事もなく集中して戦い続けられた。

「残りも少なくなってきたな。手っ取り早く終わらせるぞ！」

「ああ！」

場所は離れて、ミラーワールド。

輝夜⇨デルタと対峙しているのは、魔理沙の変身するカイザ、霊夢の変身するラルク、そして慧音の呼び出したオートバジン。

「くそつ、なかなか当たらない！」

「魔理沙、あんたもよく狙いなさいよ！」

「キュウイイイン……」

三人はデルタに向かい集中放火を浴びせたが、まるで弾が当たらなかった。

「この程度の段幕は、妹紅との殺し合いで何百回も経験してるわ。こんなの、目を瞑っても避けられる……!!！」

デルタは弾幕をかわしながらデルタムーバーを構え、三人に向かって発砲した。

「ぐツ!?!」

「魔理沙!?!」

デルタムーバーから放たれたフォトンブラッド弾はカイザの持つカイザブレイガンに命中、その反動でカイザはカイザブレイガンを落としてしまった。

「くそ…油断した!」

カイザは再びカイザブレイガンを掴もうとするも、デルタの攻撃がそれを妨害した。

「武器なんて、もう構えさせない……!!」

デルタは次々とカイザの周囲に発砲し、カイザブレイガンには近づけまいとデルタムーバーのトリガーを引いた。…妹紅との一騎打ちの闘いが身に染みすぎていた為か、他のライダーが目に入らず、デルタの意識はほぼ完全にカイザ一人に集中していた。…それをラルクは見逃さなかった。

「今なら…、当たる！」

ラルクはラルクラウザーを構え、照準をデルタが構えているデルタムーバーへと合わせた。

「そこッ！」

照準を合わせ、デルタムーバーをロックするとラルクはラルクラウザーのトリガーを引いた。

「つあッ!?!」

弾丸はデルタムーバーに直撃。そのままデルタムーバーはデルタの手元から飛ばされた。

「魔理沙、早く武器を……！」

ラルクはそのままデルタへと照準を合わせ、次々と発砲した。

「つつ…味な真似をしてくれるじゃない!!」

ラルクが放った弾丸はデルタに次々と命中し、少しずつデルタの耐久力を削っていった。しかしデルタムーバーはデルタのすぐ近くに位置していたため、簡単に拾われてしまった。

「少し遊びが過ぎたわね、博麗の巫女!!」

デルタはデルタムーバーを構え直し、すかさず銃口をラルクに向けた!

「残念だったわね!!」

「しまっ……」

デルタがラルクに向かって、トリガーを引こうとしたとき…

「まだ…私はくたばってないぜ!!」

カイザはカイザブレイガンを拾い上げ、銃口をデルタギアに向けた。

「く…!!」

「輝夜、やっぱりお前は強いぜ。だけど今回は私の勝ちだぜ!!」

カイザはカイザブレイガンのトリガーを引いた。フォトンブラッド弾はデルタギアに命中、デルタギアは火花を散らしながらスパークした。

「……。」

デルタからフォトンストリームが抜け、強い光を発しながら変身が解かれた。

輝夜は壊れたデルタギアを外し、カイザ達に向かって信じられない言葉を口から発した。

「やっぱりこのライダーは使いにくいわ。でも、やっとこれで本気の闘いができるのだから」

「…何を行ってるんだ？ベルトが壊れたところを見るかぎり、お前はもう変身出来ないはずだぜ」

カイザ達は輝夜の言葉が理解できなかった。確かにデルタは撃破した。しかし、まだ輝夜は闘う気だった…。

「…いいでしょう。なら見せてやるわ…！」

輝夜がそう言うと、輝夜の腰に一つのベルトが浮き出るようになり現れた。

「変身…！…！」

すると輝夜の声に反応したかのようにベルトが光り出し、ライダーの像が輝夜の体と重なるようにして、輝夜は緑色の仮面ライダーに変身した。

「あああああッ…！」

その姿は、今まで見てきた仮面ライダーとは違い、生物的な容姿を

持っていた。輝夜は完全に変身すると、まるで獰猛な動物のような雄叫びをあげた。その姿を見たカイザとラルクは、ぞっとした空気の流れを感じ取った。

「…とんでもない奴が出てきたな、霊夢…。」

「今までは茶番で、これから本番って訳ね…！」

二人は再び気持ちを落ち着かせ、緊張を解しながら武器を構え、異型のライダーへと狙いを定めた。

「さあ…ここから本当の勝負よ！」

手にしていたデルタギアを放り投げると、異型のライダーは、二人に向かって襲い掛かった…！！

## 第12話「幻想世界と不完全な力」（後書き）

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダークウガ

登場作品 仮面ライダークウガ

士と共に旅をする青年・小野寺ユウスケが変身する仮面ライダー。4つのフォームを持ち、多彩な戦況に対応できる汎用性を持つ。また、自然の力を武器にしたりするなどの能力も持つ。

仮面ライダーギルス

登場作品 仮面ライダーアギト

蓬萊山輝夜が本来変身するライダーで、生物的な容姿を持つ。その正体は『アギトの力』が不完全な状態で覚醒してしまった『不完全なアギト』。格闘戦法主体のスタイルで強力な再生能力を持ち、手足が引きちぎられても再生する。

### 第13話「みよんどウル」(前書き)

タイトルの通り、今回は少しギャグ路線を走っています。

### 第13話「みよんどウル」

ワームの数は残り少ない。後退していたブレイドとカリスは再び戦線に復帰し、ワームの排除に当たった。

「…何時までも休ませて頂くわけにもいきませんね。」

「見るからに後少しだから、もうそろそろご飯にもありつけるわね。」

二人はブレイラウザーとカリスアローを構え、デイケイド達の元へ向かった。先程まで数十、数百近い数のワームが周囲を埋め尽くしていたが、デイケイド達の活躍で、もう数えられるほどの数にまで減っていた。

「先行します、幽々子様！」

ブレイドがカリスを追い抜き、眼前のワームに斬り掛かった。それを後ろから見ていたカリスはカリスアローを構えた。

「その虫、じっとしていなさいよ。」

ワームに狙いを定め、ラウズカードをカリスアローにスキャンした。そして発射可能段階に入り、カリスはトリガーを引いた。

「グギギギッ！?!?!？」

カリスの放ったホークトルネードはワームの体を突き破り、貫通した。これによりワームは爆発。しかし…

「わだぁッ!？」

ホークトルネードの威力が強すぎたのか、貫通した矢はそのまま威力が減衰される事なくワームの付近にいたブレイドの腹部アーマーに直撃。貫通はしなかったものの、その衝撃でブレイドはゴロゴロと地面をのたうち回った。

「い、いたた…。」

「…あら…。」

ブレイドは腹部を押さえ込みながら痛みを訴えていたが、元凶であるカリスはただその光景を見ている事しかできなかった。

「幽々子様…、ナズエミデルンデイス!？」

ブレイドは矢が放たれた方向に視線を向き、視線の先にいたカリスを睨んだ。よほど衝撃が強かったのか、それとも焦りなのか、ブレイドの滑舌が非常に悪く聞こえてくる。

「よ、避けない妖夢が悪いんでしょ〜?」

「オンドウルルラギッタンデイスカ…!？」

最早日本語には聞こえない、ブレイドの発する言葉。…これこそ、滑舌の悪さが頂点に達したときに発することのできる言語。その名も「オンドウル語」である。

「妖夢〜、一発当たっちゃったくらいで情けないわよ〜。本当、頼

りになんないわね。」

「ワダジノガラダハボドボド…ウウエツ!？」

「ギチギチ…!」

起き上がったブレイドに、ワームが不意打ちの如く飛びかかった。ワームの右腕チョップをまともに受け、再びブレイドは地面に転がった。

「全く…、本当に世話が焼けるわね。」

カリスはブレイドに再び群がるワームの群れを、カリスアローによる遠距離攻撃で一匹ずつ、確実に倒していった。

「もう、妖夢だったら…。」

ブレイドは戦闘不能に陥ってしまったが、他のライダーは勢いを保ち、的確にワームを倒している。最早勝敗も決まったかに見えた…、その時だった。

「ギ、ギ……………」

突如、一匹のワームに異変が起きた。ピキピキとワームの背中が割れ始め、サナギ体ワームの体から、成虫体ワームが姿を現したのだ。

「ゲルルル……………」

成虫体「サブストワームはサナギ体の殻を完成に脱ぎ捨てると、クロックアップを使いブレイドとカリスに襲い掛かった。

「アウア!?!」

「うっ!?!?!」

突然吹き飛ばされたブレイドとカリスは、何が起こったのかも解らないまま地面に体を強く打ち付けられた。

「いったあゝ…何が起こったのよ、も……」

「もう…、真面目に無理かもしれませんが…」

「グルルルル…!!」

サブストワームは再び、地面に倒れ込んでいるブレイドとカリスに狙いを定め、再びクロックアップで攻撃しようとした…が、

「させるかあっ!」

「ギアッ!?!」

クウガタイタンフォームが、背後からサブストワームを勢い良く斬りつけた。一刀両断とまではいかないが、サブストワームは反動で勢い良く吹っ飛び、横転した。

「土、今だっ!?!」

「ああ、任せろ!」

クウガが叫ぶと、クウガの背後からディケイドが飛び出し、走りな

がらライドブッカーから一枚のカードを抜き、デイケイドライダーに装填した。

《FINAL - ATTACK RIDE D・D・D・DECADE  
!》

デイケイドライダーがカードを読み取ると、デイケイドの正面にエネルギーで生成された、デイケイドのマークを施した壁が何枚も展開された。エネルギーの壁は目標であるサブストワームの正面にまで生成されると、デイケイドはジャンプした。

「うおおおおっ!!」

デイケイドは空中で必殺キックの体制を取り、その体制のまま勢い良くマークに突っ込み、マークを次々と通過した。マークを通過することに、デイケイドの足の輝きが増していく。そして全てのマークを通過したときには、デイケイドの正面に立っていたのはサブストワームだった。

「グエエエツ!!」

勢いを増したキックは、見事サブストワームに直撃。サブストワームは踏ん張るもその威力に耐えきれず、仁王立ちのような体制で爆散した。

「や、やった!!」

それをデイケイドの後ろから見ていたクウガは一安心した。気が付けば残りのワームも、奮闘していた他のライダーが全て撃破していた。

…当初は凄まじい数のワームがこの里を埋め尽くしていたが、ライダー達の活躍により、ワームは一匹残らず全て始末されていた。幸い、ライダー達が迅速に、かつ的確にワームを撃破したため、里の被害はごく軽微で済んでいる。

「やっと終わったな…。」

「流石に、あの数はしんどいよな…。」

デイケイドとクウガは変身を解き、長時間に及ぶ戦いで疲れた体を休めるために写真館に戻ろうとした、その時。

「ま、待って下さい…！」

バイクに跨った士とユウスケの元に、変身を解除したブレイド、魂魄妖夢が駆け寄ってきた。先程の戦いで猛攻を受けていたために、半霊も少し萎んでおり、足取りも少しよろめいていた。

ユウスケはそんな妖夢を放っておけなくなったのか、すかさずバイクから降りた。

「君…、大丈夫か？」

「…何とか大丈夫です…。」

妖夢はゆっくりと民家の段差に腰をかけると、再び口を開いた。

「…助けていただき、誠に感謝しています。お陰様で此方も助かりました。」

「俺達なんかで役に立ったなら、嬉しいよ。」

今時の少女では珍しい、感謝の意の込もった、丁寧な言葉使いだっ  
た。ユウスケも内心では少し吃驚していたが、いつものようにニッ  
コリとした笑顔で応えた。

「申し遅れました。私は現在、西行寺家に使えている庭師の魂魄妖  
夢と申します。出来れば貴方の名を知っておきたいのですが…。」

「俺は小野寺ユウスケ。ユウスケでいいよ。」

「…ユウスケ様、本当に有り難うございました。」

妖夢は段差から立ち上がり、ペコリと頭をユウスケに下げると後ろ  
を振り向き、他のライダーの元へと歩き出した…が。

やはり歩き方がフラフラしており、今にも倒れそうな足取りだった。  
そして…

ばたっ。

「…えっ!?!?…うっ…うっそお!?!?」

ユウスケは慌てた口振りで、遂にパタリと倒れてしまった妖夢に急  
いで駆け寄った。

「おい士!担架!急いで担架持ってきてくれ!」

「お、俺に言うなっ！」

焦っているユウスケに、今回は珍しく土が突っ込んだ。さすがに土もバイクから降り、二人はその場であたふたしていた。その時、一人の女性がふわふわとした動きで三人の元へやって来た。

「ほんとにもう…。この子は無茶をしすぎるから…。」

「な…、えっ!?!」

ユウスケはその女性の足元を見て絶句した。何と女性の足が、ぷかぷかと地面から浮いていたのだ。

「あら、そんなに驚くような事なの〜?」

「そそそそりゃ誰でも驚くって!!」

女性「幽々子はパニックを起こしているユウスケを見て、クスクスと笑った。

「話は戻るけど、どうやら疲れすぎて倒れちゃったみたいね〜。ほら、この子まだ若いくせに無理しちゃうから…」

(いや、あんたが言えるギリなのか…?)

土とユウスケは幽々子へ突っ込みたくなかったが、何が起こるか予測がでなかつたために断念した。

「あ、それなら俺達の店で休んでいきませんか?それなら妖夢ちゃ

んも暫く休ませられますし…」

「あら、いいの〜?」

「おいおいユウスケ、本当に連れていく気か?」

ユウスケの言葉に食いついた幽々子だが、士は少し面倒臭そうに答えた。そんな士を、いつの間にもいたのか何やら翼の生えた黒髪の少女がカメラでパシャパシャと撮影していた。

「貴方が紫さんの言っていた『外界のライダー』、仮面ライダーイケイドこと門矢士さんですね?初めまして!私は『文々。新聞』という新聞を書いている、射命丸文と言います!」

「新聞記者…つまりは、俺を取材したいのか?」

「はい!九つの世界を救ったという話に、とても興味があるのです!是非、その事について取材させて欲しいのです!」

既に手には文花帳とペンを構え、期待のこもった目を輝かせて士を見つめる文。

「いいだろう…。お前、俺の店に来い。九つの世界を救った俺について、たっぷり取材させてやる!」

「ああああありがとございますッ!」

ピョンピョン飛び跳ねながら、歓喜のあまりはしゃぐ文を背に、士はユウスケにこう告げる。

「お客様は大歓迎だ。さあ、早く戻るとしようぜ。」

「…あ、ああ…」

いきなり態度を変えた土に同様するユウスケだったが、まあいつもの事なので、深く考えないことにした。

↳数時間後、光写真館↳

「只今戻りました。」

「おかえり〜…、おっ、今日は何だか賑やかなお客さんたちが来るねえ。」

「あら〜、今日は何だか沢山お客さんが来たわねー。」

早速土達を迎えたのは、栄次郎とキバーラの二人。いつものように明るく振る舞っている二人だが、一人、何やらどんよりとした空気を放っている人物がいた。

「土君、何やら女の人が沢山来てますが…?」

どんよりとした空気の正体は夏海。彼女はジロ〜ツとした目つきで土を睨んだ。

「勘違いするな夏ミカン。こいつらは一応この世界のライダーだ。ほら、ちゃんとベルトだって付けてるだろ」

「あ…、本当だ」

すぐに誤解は晴れ、夏海が放っていた空気も薄れてきた。

「今日はこんなにお客さんがいると、久々に腕がうなる！みんな、今からご飯を作るから、暫く間ってなさい」

栄次郎は士らに告げると、食材を配置し、キッチンに立った。そして栄次郎の隣で、その飯を誰よりも待ち望んでいた亡霊が一人。

「ご飯 ご飯」

（写真館・テーブル）

「龍騎の世界がなかなかユニークだったんだよな。ライダー同士が闘って、勝った方が裁判を下せる世界だった。しかし俺は負けなかった！」

「ふむふむ。所謂弱肉強食みたいな世界なんですね…。」

「幾多の敵を倒し、遂に黒幕のアンデッドが変身するライダーと激しくぶつかり合った！死闘の末、俺は仮面ライダーアビスを討ち倒し、龍騎の世界かを救い、世界に平和をもたらしたのさ…。」

「アンデッドの変身するライダーですか…。なかなか面白い話ですね。」

文の取材を受けている士は、龍騎の世界で自分の成した事を力説していた。

一方のユウスケはというと、先程倒れた妖夢をソファで寝かせていた。

「まさか、こんなに小さな子がブレイドに変身してたなんて、誰も想っても見なかったよな…。」

ユウスケはポケットから、妖夢が倒れた際に拾ったブレイバツクルとラウズカードを取り出し、妖夢の手元へ置いた。

「ゆっくり休んで、いい夢見ろよ。」

### 第13話「みよんどウル」(後書き)

突然ですが今回、アンケート第2回を開きたいと思います。締め切りは7/20日までとさせていただきます。投票方法は感想又は評価の欄で、最後に付け加えていただければOKです。

今回のお題は「いち早く登場して欲しいキャラ」です。一位に選ばれたキャラを、速攻で出してみようという企画です。

キャラ候補は、下記の一覧から選んで下さい。多数上げてもOKです。

#### 候補キャラクター

海道 スネークオルフェノク 直也

ホーソオルフェノク

木場 勇次

タランチュラアンデッド

嶋 昇

ビークックアンデッド

伊坂

スコルビオフォーム

神代 剣

モモタロス(仮面ライダー電王SF)

ウラタロス(仮面ライダー電王RF)

キンタロス(仮面ライダー電王AF)

リュウタロス(仮面ライダー電王GF)

ジーク(仮面ライダー電王WF)

第14話「決着、鏡世界」(前書き)

今度こそギルスVSカイザの結末です。

## 第14話「決着、鏡世界」

カイザはデルタドライバーを破壊し、デルタの変身を強制解除させた。しかし、ベルトを失った輝夜は突如ギルスに変身、再びカイザ達に襲いかかった。

「こいつは、そう簡単に勝たせてはくれないみたいだな！」

「時間的にも余裕がない…。本気で行くわよ、二人とも！」

「ウイイイイン…!!！」

三人は再び弾幕で応戦するも、ギルスの動きはデルタの時よりも滑らかで、すり抜けられるように回避されてしまった。

「暢気に遊んでる時間は、もう無いのよ……!!！」

ギルスはカイザに向かって、左腕を構えながら突撃した。

「や、やべ…！」

カイザは防御体制を取ろうとしたが、時は既に遅かった。ギルスの放った拳はカイザの腹部に直撃し、衝撃で吹っ飛ばされたカイザは建物に体を強く打ち付けられ、建物の壁を貫通。そのまま建物の影の中へと姿を消した。

「魔理沙ッ!？」

吹き飛ばされたカイザを見ていたラルクは、ラルクラウザーを構え、

ギルスギルスの足止めに向かった。

「今の私に近付いてくるなんて、命知らずにも限度があるつてもよ！」

ギルスも腕に内蔵されている刃・ギルスクロウを伸ばし、ラルクラウザーの弓部・ヒーティングエッジの斬激に備え、構えの体制に入った。

「げほッ、がはッ……」

薄暗い建築物の中で、やっとの思いで立ち上がったカイザ。建物の中はホコリが充満しており、腹部に走った衝撃と組み合わせり、カイザ自身の呼吸を妨害していた。

「はあ、はあ……。くそっ、もう時間がないつてのに、面倒なことになっただぜ……」

カイザはゆっくりと先程空いた大穴へ向かって歩き出した。そして視線の先に落ちていたカイザブレイガンを拾い上げ、ベルトの専用ホルダーに収納する。すると、カイザはベルトに装着されていた一つのツールに目を止めた。

「…そういや、まだこいつを使っていなかったな。一か八かでこいつに賭けてみるか…!!」

カイザはそのツールをベルトから外して手に取り、出口目掛けて走り出した。

「はああっ!!！」

「はっ、せやつ!!！」

ギルスのギルスクロウとラルクのヒーティングエッジは火花を散らしながらぶつかり合い、互いに一步も譲らない激しい接近戦を繰り広げていた。

「やっぱり、蓬萊人はタフね…！」

「それも、取り柄の一つだから。」

ラルクの言葉を鼻で笑いながら返すギルス。そして二人は一時後ろへ引き、互いの姿を睨む。

「あんたは見た感じパンチやキックが強そうだけど、これならどう対処するの?」

接近戦はやや不得意だが、銃撃戦には余裕を見せるラルク。そしてカードケースから一枚のラウズカードを取り出し、ギルスに見せる。そしてそのままカードをラルクラウザーにスキャンした。

「さあ、ここから存分に反撃させてもらうわね!!！」

ラウザーのトリガーを引くと、銃口から赤い矢状のエネルギー弾が無数に打ち出された。何が来るのか全く予想出来ていなかったギルスは、突然の弾幕に油断し、すかさず回避行動を取ろうとしたが、

直後に数発命中してしまった。

「しま…ッ!？」

命中時のダメージを誤魔化しきれず、ギルスはバランスを崩し、横転してしまった。

「さて…、時間も少ない事だし、そろそろ頼んだわよ!」

ラルクは先程の建築物に向かい、呼び掛けるように叫ぶと、その視線の先から走りながら此方へ向かってくる黒い影…、仮面ライダーカイザがいた。

「霊夢、折角のチャンスを私に譲っていいのか? まあ、初めから最後は私が決めようと思ってたんけどな。」

カイザはラルクの横に並び、先程手にしたツール「カイザポインター」にカイザフォンから引き抜いたミッションメモリーをセットした。

《RE A D Y》

カイザポインターはミッションメモリーを認識し、戦闘システムを起動させ双眼鏡モードからキックモードへ変形。そしてポインターを右足のホルスターに装着する。

「魔理沙、あんた初めて使うくせに使い方解るの?」

「神奈子とパチュリーが闘ってる時に、説明書を読んで覚えてたぜ!」

カイザは次にベルトにセットされたカイザフォンを開き、ENTE

Rキーを押した。

《EXCEED CHARGE》

フォトンストリームを通じ、カイザギアからカイザポインターにエネルギーが送り込まれ、右足のラインが普段よりも強い光を放った。

「くっ…、私もまだ負けるわけにはっ！」

ギルスも地べたから立ち上がり、再びカイザに突撃。しかし今度のカイザはそれをちゃんと予測していた。

「これで終わりにする…！」

ギルスは突撃しながらジャンプし脚を大きく上げ、踵に生えている突起を伸ばし、そのまま踵落としの如く突起をカイザ目掛けて振り下ろした…が。

カイザはそれを後退して回避。勢い余ったギルスのギルスヒールクローは地面に突き刺さり、ギルス自身の身動きが取れなくなった。

「しまった…!!！」

「隙がでかすぎるぜ、輝夜！」

次にカイザがジャンプし、空中で前転する。そして右足のカイザポインターから黄色い円錐状のエネルギーポインターがギルスに向かって発射された。

「何…、これ…」

ギルスはヒールクロウを地面から抜き立ち上がるが、目の前に突如表れたエネルギーポインターの存在に背筋を冷やす。目の前で回転している黄色い円錐状の光は、恐怖以外何者でもない。そして…

「いけええええツ!!」

空中からカイザは両脚をギルスに向けて伸ばし、勢い良く降下した。すると先程のエネルギーポインターが高速で回転しながらギルスに突き刺さり、ギルスの胴体を削りだした。

「ぐツ!!!!」

いくら蓬萊人とはいえ、この攻撃によるダメージは強大だ。ギルスは激痛による悲鳴を一瞬口からこぼしたが、すぐにそれは治まった。エネルギーポインターとカイザは一瞬にしてギルスの胴体を貫き、エネルギーポインターは消滅しカイザは地面に着地した。するとギルスの体に黄色い「X」の文字が浮かび上がり、それと同時にギルスの体はバタリと地面に倒れ込んだ。

「…やったか……?」

「らしいわね。」

二人はピクリとも動かないギルスを見る。するとギルスの変身が解かれ、ギルスは完全に蓬萊山輝夜の姿に戻った。それを見たカイザとラルクは、本当の勝利を遂に確信した。

「あ…、ヤバい!体が!」

「魔理沙、早く戻らないとまずいんじゃない!?」

二人は自分の体を見ると、粒子化がかなり進行していた。

「おいロボット、輝夜を頼んだぜ！」

「キュウイーン…」

カイザが待機していたオートバジンに話しかけると、オートバジンはゆっくりと動き出し、輝夜とデルタドライバーを掲げた。

「よし…、じゃあ戻るぜ！」

三人は建築物に貼られていた鏡の前に立ち、一人一人その中へと飛び込んだ。

その頃、紅魔館。

「まさか輝夜がアギトの力を持ってたなんて予想外だったわね…。」

鏡を見ていたレミリアは、先程の闘いを分析していた。すると…

「うおっ!?!」

「きゃっ!」

「ガシユウン！」

レミリアの目の前の鏡からカイザ、ラルク、オートバジンが表れた。

「おかえり。なかなかいい闘いだっ たわよ」

「ああ…、それは良かったぜ。こっちはヘトヘトだけどな」

カイザとラルクはベルトを外し、変身を解除した。

「これで、残るは私とフラン、そして…」

レミリアの視線の先には、十六夜咲夜と古明地さとりが座っていた。

「…私が、お嬢様のお相手をするなんて思っても見ませんでした」

そう言うと咲夜は苦笑し、ポケットからベントホルダーを取り出した。そこへ三人に向かって、レミリアからある提案が出された。

「この際、タッグマッチにしたら面白そうなんじゃないかしら？夜が完全に開けるのも時間の問題だし。」

「お姉様、フランはそれに大賛成だよ！」

レミリアとフランはすっかりその気である。突然の提案に少し動揺していた咲夜だったが、

「お嬢様が申されるのなら…」

「私も早く地霊殿へ戻らなきゃならないから、そちらの方が有り難いわ」

咲夜とさとりもそれに同意。

「決まりね。なら皆、今からベルトを構えなさい」

レミリアの声と共に、彼女とフランはバックルにラウズカードをセツト。さとりはテーブルに置かれていたベルトを装着し、咲夜は消滅したベルトを呼び寄せるために、鏡に向かってベントホルダーを翳した。

「さあ、三人とも。準備は出来てるわね？」

「いつでもいいよ！」

「言われるまでもないわ。」

「お嬢様、いつでもどうぞ」

四人は準備を完了させると鏡の前に立った。そして…

『変身！』

《OPEN・UP》

《OPEN・UP》

四人は一斉に掛け声をかけ、各ベルトの変身システムを起動させた。

新世代ライダーバックルは電子音声を発し、オリハルコンエレメントをレミリアとフランの正面に展開。二人はそれを通過し、レミリアは仮面ライダーランス、フランは仮面ライダーグレイブへと変身。

続けて咲夜とさとりはVバックルにベントホルダーをセツトする事

により、咲夜は仮面ライダータイガに、さとりは仮面ライダーライアに変身した。

「さあ、行くわよ!」

レミアアの変身するランスの声に続き、四人は次々と鏡の中へと入っていった。

（数時間後）

「さて…、私達はこれからどうする?」

「私は早く帰りたい!」

霊夢と魔理沙の2人は部屋をうろろろしていた。今の所この部屋には二人以外には機嫌を取り戻した神奈子と目を覚ました輝夜が四人の闘いを観戦しており、他には先程の戦いで体を動かさすぎたのか、バッテリーとダウンしているパチュリーとそれを看病している小悪魔、サソードゼクターと戯れているメディスン、更には部屋の隅で「どうせ私達なんか!」「汚してやる!太陽なんて」等と危ない言葉を連呼している秋姉妹がいた。

「…うわあ!」

さすがの魔理沙も、その光景には絶句していた。

一方、光写真館。

「響鬼の世界では音撃道の大師匠という素晴らしい職業を頂いたな。

まあそれも俺のセンスがあれば当然のことだったけどな」

「オンゲキドー…詳しくは知らないですが、その大工匠をやったのですか！それは非常に凄いじゃないですか！」

未だ文の取材に調子に乗りながら答える士に、遂に夏海の我慢の糸が切れた。

「士君、何だか楽しそうですね？」

夏海は士の首元を抓った。

「ぷっ！くくく…おひ夏ミカン！はは…そこはプツ…クククッ…やめろって…ヒヒ言っただろお…！」

夏海の笑いのツボが炸裂し、文の目の前で堂々と笑い出す士。

「ごめんなさい、射命丸さん…」

「いえいえ結構ですよ！なかなか面白い話が聞けた上に、ヒーローのこんな知られざる姿もこの目で見ることができましたし！」

少し呆れ口調で謝る夏海だが、文はいたって明るく受け止めた。

「あ、それと夏海さん、士さん。先程聞いた話なんですが、あなた方が九つの世界で撮影した写真を是非見せて欲しいのですが…」

「…写真をか？」

士は懐から写真を撮りだし、クウガ、キバ、龍騎、ブレイド、ファ

イズ、アギト、電王、カブト、響鬼の順番に文の前へ出した。

「どうだ、この素晴らしい…」

「土君？」

「…なんでもない。」

一枚一枚、じっくりとその写真を見る文。その目つきは正にプロの目であった。普通では笑ってしまうような歪んだ写真を、真顔で表情を変えずに見るということは普通ではあり得ない。それを彼女は平然とやってのけていた。

「…ふう。」

全ての写真を見終えた文は、写真を纏めて土へ返した。

「土さん…貴方は本当に凄い人ですね。貴方の撮る写真には深く、様々なモノが交差している『何か』が感じられました。それも不快なものではなく、何か安心できるような…」

「だろう。まあこれが俺の腕前だ。こんな素晴らしい写真を撮れるのは俺くらい…」

「土君？また笑いたいんですか？」

「…だから何でもない。」

## 第14話「決着、鏡世界」(後書き)

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーランス

登場作品 仮面ライダー剣 MISSING ACE

紅魔館の主であるレミア・スカーレットがライダーバトル時に変身した姿。メインカラーはレミアの象徴でもある「紅」ではなく緑。そのためレミアはラルクの方が好みらしいが、ラルクが余りにも使いづらかった為こちらにしたという。主力武器は醒槍ランスラウザー。

仮面ライダーグレイブ

登場作品 仮面ライダー剣 MISSING ACE

レミアの妹であるフランドール・スカーレットがライダーバトル時に変身した姿。メインカラーは金色。専用武器である醒剣グレイブラウザーによる剣術が得意で、仮面ライダーブレイドの後継ライダーに当たる。

仮面ライダーライア

登場作品 仮面ライダー龍騎

地霊殿の主・古明地さとりがミラーモンスターであるエビルダイバ  
ーと契約し、変身した姿。モチーフはエイ。主力武器はスウィング  
ベントをエビルバイザーにセットする事で召還されるエビルウィッ  
プ。

第15話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(前編)(前書き)

今回は手抜き感の残ってしまった感じがしました。申し訳ございませんm( | | )m

なお、アンケートはまだまだ募集しています。詳細は第13話あとがきにて！

## 第15話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(前編)

紅魔館で行われているライダーバトル。残るライダーは、既に4人に絞られていた。その上、空も少しずつ青みを増してきた。完全に夜が明けるのも時間の問題だろう。そうなってしまつては吸血鬼の姉妹はライダーバトルに参加できなくなってしまう。

4人はミラーワールドへ辿り着くと、互いの味方と敵を捜すため、辺りを散策し始めた。

「まずは、さとり様に会わないといけないわね。いきなりお嬢様と出会つたりなんかしたら、まず勝ち目はないから……」

今回のフィールドは、巨大な美術館のような建物。施設の内部はかなりの数の銅像や油絵が展示されており、幾多の部屋に分かれている。

現在、咲夜⇨タイガが散策しているのは施設のエントランスホールである。これほど広い施設の中で、10分にも満たない制限時間の中で相手を見つけたし、倒すには困難を極める。なお未だにタイガは敵味方とは遭遇していない。一刻も早くさとり⇨ライアと合流し、レミア⇨ランスとフランドール⇨グレイブを叩く必要がある。

「ホールには来る気配がない……。気配を頼りに散策するしかないよ  
うね」

タイガはホールを後にすると、展示室へと続く廊下を走つた。廊下を走り出してからすぐ、正面に展示室Aのドアが姿を現した。タイガはドアを開け広い展示室へと足を踏み入れると、周りを警戒しながら奥へと進んでいった。

展示室の中は予想以上に広く、円形となっており天井に配置された巨大な白い照明灯が室内全体を明るく照らしていた。

タイガは銅像から額縁などを隅々まで調べるが、何者かが隠れている様子はなかった。ここも違うか……。タイガがそう確信しかけた、その時。

『カッ…カッ…カッ…』

何者かの足音が、展示室内に少しずつ響き始めた。足音は先程タイガが通ってきた道とは違う場所から聞こえてくるが、音は徐々に強くなってきている。つまりは足音の主は確実にこちらに近付いてきている…と、解釈できる。

「……………！誰かこっちに来る！？」

聞こえてくる足音に緊張感を強めるタイガ。すかさず銅像の後ろへ隠れ、音の聞こえてくる方向に注意を向けた。またもしも敵だったときの場合に備えて、両手に白召斧デストバイザーを構えた。

『ガチャリ…』

ドアノブを掴む音が、タイガが視線を向けていたドアから聞こえた。緊張感の余り体が過敏反応を起こしているのか、無意識にデストバイザーを強く握り締めていた。すると、ゆっくりドアが開かれ足音の正体が展示室に姿を現した。

(…あれは……)

タイガはその姿を目撃した瞬間、体を蝕んでいた緊張感が一気に抜

け落ちた。少しずつこちらに近づいてきた者の正体は、異国の騎士をイメージさせる仮面とマゼンタカラーが目立つ仮面ライダー。…古明地さとの変身する仮面ライダーライアだった。

「…ふう。さとり様でしたか…。」

タイガは安心し一息着くと銅像の陰から立ち上がる。それに気づいたライアもタイガに近付いた。

「此処に誰か居ると思って足を踏み入れてみたら、咲夜さんでしたか。私も一安心しました」

「私も一瞬お嬢様か、妹様かと思ってヒヤヒヤしました。それと…」

「あの二人なら見てませんよ？それに、一人だけで搜索するのは危険ですし、二人で組んでの搜索といった方は時間は多少掛かりますが、そちらの方がリスクは少ないし、このような状況では有利だとこちらでも考えていましたから」

ライアはタイガの考えていた提案を、彼女が話終える前に、先にその考えに対する答と結論を解いてしまった。

さとりは相手の考えを読み取る能力を持っている。つまりはタイガの考えていることも丸解りなのである。

「では、時間もありません。急いで彼女達を捜すとしましょう。方は、貴女の考えている通りで構いません」

「解りました。なら…」

二人は、まだ通っていない扉へ視線を合わせた。二人は同時に扉目

掛けて走り出し、そのままドアを開け通路を走り去っていった。

一方、紅魔館・正面門前。

「うーん……よく寝た……って、もう夜になってる！？それに太陽が少し出てる！」

紅魔館の門番をしている中国人風の服を着た妖怪・紅美鈴は、昼寝からずっと寝過ごしていた様で、目を覚ました彼女はすかさず立ち上がり、自分の過ちである失態にあたふたしていた。

「普段だったら、咲夜さんが起こしてくれる筈なんだけど……。まあ、夜になっちゃったんだし、このまま寝るのもいいか……。」

美鈴は軽い欠伸をすると、再び座り込み夢の中へ旅立とうとした……。その時。

「ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ……」

「……?」

美鈴の真上から、奇妙な鳴き声が響く。幻想郷の妖怪でも、このような鳴き声を発する妖怪はまずいない。これに気づいた美鈴は自らの真上に視線を向けた。その時……

「ぎ、ぎええええっ!?!?!?」

紅魔館内部

美鈴の発した悲鳴は、紅魔館の中にも響き渡った。紅魔館の中にいる人々は、すかさず絶叫の聞こえた方へ顔を向けた。

「な、何だ！？今誰かの叫び声が聞こえたぞ！」

「まさか…、怪人とか！？」

霊夢と魔理沙の二人も、室内からガラス越しに外を確認する。すると

「武術効かない、弾幕効かない！何なのよこいつらー！」

「ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、………」

そこには、数匹のシアゴーストに追いかけて回されながら、広大な庭を喚きながら全力疾走していた美鈴がいた。

「おい、あれ中国だよな？」

「…見事に中国ね。何やってんだか…」

霊夢達は呆れていた。勿論シアゴーストはミラーモンスターの一種であるため、襲われたらいくら妖怪でも命の保証は無い。しかし目の前に広がっている光景では、ただゆっくりと追いかけてくるシアゴーストを相手に、もしかすると百メートルを十秒台で走れるかもしれないスピードで逃げ回る美鈴がいる。そのまま何処かへ逃げればいい話だが、果てしなく庭をグルグルと走り回っているのが美鈴

らしい。

「…流石に助けてあげたら？」

「またコレを使わなきゃいけないのか？私はもう本気で疲れてるんだよ…。」

霊夢の問い掛けに、魔理沙は右手でカイザギアを持ち上げ、めんどくさそうに答えた。そんな中…

「それなら、私が行きます」

そんな彼女達の代わりに名乗りをあげたのは小悪魔。その手には暗い青色のベントホルダーが握られていた。

そのまま小悪魔は、ベントホルダーを片手に紅魔館から飛び出していった…。

「ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、…」

「ひいひいひい…！」

未だにシアゴーストと鬼ごっこのような逃走劇を繰り返している美鈴。するとどこからともなく無数の光弾が現れ、シアゴーストに向かって光弾は一斉に発射された。

「美鈴様、もう大丈夫です！速く館の中に逃げてください！」

「感謝するわーじ、じゃあここは頼んだわよ！」

光弾を放った主は小悪魔。シアゴーストに向かい光弾による弾幕を放ちながら、美鈴の元へと駆けつけた。

美鈴も小悪魔の言葉に従い、紅魔館の中を目指して走り去っていった。

「さあ…、館の中へは一匹たりとも入れませんよ、ミラーモンスターー！」

小悪魔はベントホルダーを、庭の真ん中に置かれていた水やり用のシャワー部分に翳した。その瞬間ステンレスのシャワー部分からVバックルが現れ、小悪魔の腰へと転送、装着された。

「変身！」

掛け声を発し、ベントホルダーをVバックルへセットする。ベントホルダーの中央に描かれている紋章が黄金の光を発し、小悪魔は西洋の騎士を連想させる、ダークブルーの仮面ライダーに変身した。

「ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ、ウヘッ…！！！」

「手加減はしませんよ…！！！」

小悪魔の変身したライダー。仮面ライダーナイトは、迫り来るシアゴーストの群れを相手に一人向かい合った…！！

一方、紅魔館の入り口目掛けて走る美鈴。シアゴーストの群れは完全にナイトへと狙いを絞っていたために、美鈴はシアゴーストに襲われることなく館に辿り着こうとしていた…その時、彼女の運命が大きく左右される瞬間が訪れた。

「ギャツ!？」

走っている最中、何かを踏みつけ滑って転倒してしまう美鈴。すかさず立ち上がり、自分が転けた原因を調べるべく足元を調べた。すると…

「あれ?これってもしかして…」

美鈴は何やら、足元に黒い手のひらサイズの箱が落ちていた事に気付く。箱と言うのには若干薄いサイズだが、美鈴はそれを警戒する事なく拾い上げた。表側には、金色の龍の紋章が縁取られており、中には数枚のカードが納められていた。

「だとしたら、これは咲夜さんや小悪魔の使ってる…!!」

美鈴はそのまま黒い箱を手に取り出した。そして紅魔館の窓ガラスの正面に立つと、窓に箱を翳した。すると先程のナイトと同じ原理でVバックルが現れ、美鈴の腰に転送された。

「やっぱり…!!なら、あいつらにはお仕置が必要ね!」

美鈴は黒い箱にベントホルダーをVバックルにセットした。するとベントホルダーの紋章が光り出し、ガラスから現れた二つの虚像が美鈴と重なる。完全に虚像が美鈴と重なる、突然バックルは目映い光を発し、美鈴を一瞬で真紅の仮面ライダーの姿へ変えた。

「まさか私…本当に変身しちゃった!？」

美鈴は自らの姿を見て、変身したことを改めて確信した。そして先程自分を追いかけて回したシアゴーストに向かって突撃した！

場所は戻ってミラーワールド。

「…未だにお嬢様達は見つからないわね。本当、何処にいるんでしょうか…」

「この世界に来てから、大体4分を切ったわね。あと半分位の時間しか無いわ。急ぎましょう」

タイガとライアは展示室Eを散策していた。しかし、未だにグレイブとランスは姿を現すどころか気配すら表さない。やはり此処には居ないか…。仕方無くタイガとライアは次の部屋を試してみることにした…。そう判断した次の瞬間！

「咲夜さん！！上から何か来ますッ！」

「えっ…？」

ライアはタイガに注意した、その時だった。突如天井が轟音と共に崩れ、2人を下敷きにしてしまおうと言わんばかりの瓦礫が崩れ落ちた。ライアの注意により何とか瓦礫を回避したが、悪夢はこれで終わりではなかった。

立ち込める白く、細かな埃。瓦礫が崩れたときに発生した埃である。その埃の中から一人の影が現れた。

「やっと見つけた…！」

純粹に無邪気な声、体中から発している恐怖の波動、そして握り締  
められた醒剣・グレイブラウザー！。

…影の正体は、フランドールの変身する仮面ライダーグレイブだっ  
た。

第15話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(前編)(後書き)

今回、登場した仮面ライダー

仮面ライダーナイト

登場作品 仮面ライダー龍騎

パチュリーの補佐的な役割をしている小悪魔の変身するライダー。ダークウイングというコウモリ型モンスターと契約しており、契約モンスターと繰り出すファイナルベント「飛翔斬」の威力も高い。

仮面ライダー龍騎

登場作品 仮面ライダー龍騎

シアゴーストの群れに襲われていた紅美鈴が、偶然発見したベントホルダーの力で変身した赤いライダー。契約モンスターはドラグレッダーという龍型のモンスターで、ドラグレッダーの力を借りて放つファイナルベント「ドラゴンライダーキック」は一撃必殺を誇る荒技。

余談だが、このドラグレッダーは幻想郷の最高神である「龍神様」と容姿が酷似しているらしく、何等かの深い関係があると思われる。

第16話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(中編)(前書き)

中編です。

藍様が釣られています。

第16話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(中編)

「ふうん、お姉様は居ないんだ…。でも、見つけちゃったからには…。」

奇襲には失敗したが、グレイブは研ぎ澄まされたグレイブラウザーの剣先をタイガとライアに向けた。

「…ここで妹様なんて、私達もついてないわね。」

「しかし、相手は1人です。戦力を減らすには絶好のチャンスだと思いませんか？」

現在の状況は2対1。明らかにタイガとライアに分がある戦いだ。グレイブ単体を叩くなら今しかない。二人はベントホルダーから一枚のアドベントカードを抜き、召喚機を構えグレイブの攻撃に備える。互いの動きが止まり、空気が静まり返る。暫しこの静まりが続くだろうと、タイガは緊張感を緩め、気を緩めた次の瞬間…！

「私と遊んでくれないとねッ！」

沈黙していた空気の中、突如グレイブは叫びながらグレイブラウザーを構え、この時を待っていたと言わんばかりにタイガに襲い掛かった。

「うっ！！？」

油断していたタイガは、予想すらしていなかった突然の攻撃に対処しきれず、完全に反応を遅らせていた。回避を試みようとしたその時には既に、グレイブラウザーの刃はタイガの頭上を捕らえており、今にも振り下ろそうとしていた……正にその時。

「咲夜さん、油断しすぎですよー!」

《SWINGVENT》

タイガの危険を予知していたライアはアドベントカードをエビルバイザーに装填すると、ライアの主力武器・エビルウィップが召喚される。ライアはエビルウィップを手に取り、グレイブの首に絡みつけ、そのまま壁に叩き付けた。

「きゃあっ!?!」

エビルウィップを受けたグレイブは、攻撃の反動でそのまま床へ倒れ込んだ。そしてタイガも先程手にしたアドベントカードをデストバイザーに装填する。

「申し訳ございませんが妹様、今回は私も全力で戦わせていただきます!」

《STRIKEVENT》

タイガの元に二本のデストクローが召喚され、それを手に取り攻撃の態勢をとる。その直後、ライアとタイガの2人は互いの武器を構え、グレイブに突撃していった……その時。

グレイブのすぐ後ろにある壁から一本、深緑の槍が飛び出し、壁を

貫いた槍先はライアの胸部アーマーに命中した。

「ぐツ!？」

そのままライアは突き飛ばされ、転倒する。そして先程の槍が壁の奥から引き抜かれ、直後に壁は大きく崩れ、壁の向こうから、深緑の仮面ライダーが姿を現した。

…遂に、敵側も2人揃ってしまった。最後に現れたのは、レミリアの変身する仮面ライダーランスだった。

「あゝあ…。お姉様が来ちゃった。お姉様は色々と口うるさいから、私は三人だけで遊びたかったのになあ…。」

一方のグレイブも、ゆっくりと床から立ち上がり、再びグレイブラウザーを構え、目の前にいるタイガ、ライアと対峙した。

「咲夜、そして古明地さと。これで立場は逆転したのも同じね。従者が相手でも、手抜きはしない!」

ランスは醒槍ランスラウザーを握り締め、二人に向かって勢い良く振りかざした!

「それは…、私も同じですツ!」

強い風切り音と共に迫り来るランスラウザーの槍先を、デストクロードで切り払った。再びタイガは体制を立て直し、グレイブ、ランスと対峙した。

一方、ようやく立ち上がったライアも戦意を取り戻し、エビルウィップを片手にタイガと肩を並べた。

「咲夜さん。ここは一つ、私が何とかしてみせます」

「…何か手があるとしても言うのかしら？なら、貴女に賭けてみるのも面白そうですね」

自信気に言い放ったライアの言葉を聞き、タイガは二歩ほど後退する。

「レミリア・スカーレット。少しばかり貴女の力を頂きますよ」

ライアはベントホルダーから新たに一枚のカードを抜き出し、ランスとグレイブに見せた。そしてそのカードをエビルバイザーに装填する。

#### 《COPYVENT》

エビルバイザーがアドベントカードを認識すると、ライアの手元にランスの専用武器であるはずの醒槍ランスラウザーが召喚されたのだ。

「これで、お互いのリーチは互角ですね。」

ライアはコピーしたランスラウザーを両手で握り振り回す。

「成る程、そんな効果があったなんてね。少し驚いたわ。」

ランスもランスラウザーを構え、グレイブラウザーを構えていたグレイブの横に並ぶ。そしてランスはグレイブと視線を合わせると、二人はラウズケースから一枚ずつラウズカードを取り出した。

「いいわねフラン。時間も少ないことだし、これで決めるわよ！」

「おっけー、お姉様！」

二人はラウズカードをグレイブラウザーとランスブラウザーにスキャンする。

《MIGHTY》

《MIGHTY》

スキャンするとラウザーから電子音声が発せられ、グレイブラウザーは黄金の、ランスブラウザーは深緑の光を纏いだした。それを見ていたライアとタイガもベントホルダーに手を掛け、アドベントカードを引き抜く。

「必殺技で来ますか…。なら、私達も必殺技で対抗しましょう」

「そうですね。なら…!!」

《FINALVENT》

《FINALVENT》

二人はアドベントカードを召喚機に装填した。すると突然、白虎型ミラーモンスター・デストワイルダーとエイ型ミラーモンスター・エビルダイバーが展示室の扉を突き破り表れた。

「ミラーモンスターか…。そんなもので私達を止められると思うな

「！」

「お姉様、彼奴等も敵なんだよね？…なら、叩き斬っちゃってもいいよね！」

グレイブとランスはファイナルベントの使用を封じるために、ミラーモンスターを倒すことを最優先に考え、突撃した。

「彼方から突撃してくるなんて面白いですね。ならば私達も行きましょっ」

ライアはジャンプしてエビルダイバーの背に乗り、デストワイルダ―は前足の鋭い爪で空気を切り裂きながら強靱な後足で地面を蹴り、二匹はグレイブとランスに向かって突っ込んだ…！！

一方、紅魔館。

「よし、そこだ中国！そのまま行け！」

「後ろに二匹いるわよ中国！早く！」

庭でシアゴーストと対峙している小悪魔Ⅱナイトと美鈴Ⅱ龍騎の闘いを館の中でのんびりと見物している霊夢達。

「そんなに退屈してるなら、少しは手伝ってよ！」

「ウヘエ…ウヘエッ！」

館内から鏡越しでこちらを見ている霊夢達をバツクに龍騎は、近寄ってくるシアゴーストを片っ端から殴っていく。

一方のナイトは、サーベル型の召喚機・ダークバイザーを駆使しながらシアゴーストを斬り伏せていく。

「ふっ、はっ、そこ!!」

「ウへ!!!!」

斬られたシアゴーストは次々と爆発していき、残るは龍騎にまとわりついている個体のみとなった。

龍騎は未だに蹴りや拳のみで戦っている。

「あゝも〜、幾ら何でもしつこすぎるわ!こうなったら全員纏めて…」

シアゴーストを殴り抜けながら、龍騎は一枚のアドベントカードを引き、左腕に装着されているドラグバイザーにセットした。

《STRIKEVENT》

ドラグバイザーから発せられた電子音声に続き、ドラグクローが龍騎の腕に装着された。

「破ッ!!」

龍騎はドラグクローを装着した腕で、シアゴーストに向かってパンチを放った。

パンチアクションと連動したドラグクローから火球が発射され、火

炎弾を受けたシアゴーストは瞬く間に焼き尽くされ、白い灰となり風に吹き飛ばされていった…。

「これ…、なかなか使いやすい武器ね」

「ウヘエツ、ウヘエツ、ウヘエツ…！！」

仲間を殺され激怒したシアゴーストは、不気味な鳴き声を発しながら龍騎へと襲い掛かった。

「何匹来ても無駄よ！」

龍騎もドラグクローの火球に昇竜突破で迎え撃つ。放たれた火炎は全てのシアゴーストに命中し、炎を纏いながら地面に崩れ落ちた。

…これで、全てのシアゴーストは全滅した。ナイトと龍騎はVバツクルからベントホルダーを引き抜き、変身を解除する。変身を解除した美鈴の元に、小悪魔が駆け寄ってきた。

「美鈴様、そのカードデッキは…」

「さつき庭で見つけたんですよ。まさかと思ってガラスに翳してみたら…。やっぱり咲夜さんや貴女の使ってるものと共通の変身道具だったんですね」

小悪魔の問い掛けに、黒いカードデッキをジロジロと観察しながら答える美鈴。しかし、小悪魔が聞きたかったのは、また違う内容だった。

「…そのカードデッキの紋章、見せていただけませんか？」

「別にいいけど…」

少し真剣な顔つきの小悪魔に、美鈴はカードデッキの表側に存在する龍の紋章を見せた。その瞬間に、小悪魔の表情が一気に変わる。

「……………これは……………!?!」

紋章を見せた途端に、驚きを見せる小悪魔。すると突然小悪魔は、ベントホルダーを持った美鈴の腕を掴む。

「…少し私と、図書館へと来てください。美鈴様に見せたい資料があります」

「え…!?!何をいきなり!?!」

美鈴が返答する間もなく、小悪魔は美鈴を引きずりながら紅魔館の内部に存在するヴワル魔法図書館へと向かった。

一方の光写真館では、栄次郎とデネブの作った料理がテーブルに所狭しと並べられていた。

「さあ、私の胃袋が満たされる時間が遂にやって来たわよ。」

既に幽々子は椅子に座り、箸と皿を手に取り眼前に並ぶ料理を見て目を輝かせている。彼女が手にしている桜模様の入った黒漆の箸は数百年前、幻想郷の妖怪桜としても有名な西行妖の枝から作られた物らしいが、士達にとってはそこまで気になる品でもない。

「しかしまあ、よくこんなにも作ったな。人数分以上はあるんじゃないか？」

「これが土さん達の世界の料理ですか…。なかなか美味しそうですね。」

文と土は互いに愛用しているカメラで、パシャパシャとできたての料理の写真を撮っていた。

一方の藍は、役目を果たした事により買い物袋を手に掛け、店を出る準備をしていた。

「あれ？藍ちゃんは何も食べていけないのかい？」

「私達は、そろそろ戻らせてもらいます。帰りが遅くなると主が色々とうるさいので」

藍は栄次郎に告げると、写真館のドアを引こうとした…。

「…それは残念だね。今デネブ君が《いなり寿司》を懸命に作っている所んだけど…。」

ピクッ。

《いなり寿司》という単語に反応する藍。一瞬九尾と耳がピクピクと動いた。そして藍はそのままゆっくりと玄関先から栄次郎へと視

点を変え、少しずつ栄次郎に近付いた。

「是非…私も個々で夜食を御一緒させていただけないだろうか？」

口調こそは普段の藍と変わりないが、その目は台所で頭にはちまきを巻き、せつせといなり寿司を握っているデネブとニッコリ笑顔で誘惑する栄次郎へと向けられていた。

「大歓迎だよ。人が多い方が美味しい食事になるからね。」

「なら…、お言葉に甘えさせてもらいます」

栄次郎は藍を席へと案内する。席に着いた藍は台所のデネブといなり寿司をたじつと見ていた。一方の夏海は、ユウスケと共に過労でダウンしている妖夢の看病に当たっていた。

「ユウスケ、この子が仮面ライダーだっていう話は本当なんですか？」

「ああ、妖夢ちゃんはこの世界で仮面ライダーブレイドとして戦ってるみたいなんだ。最初は俺も、こんな子がライダーに変身してたなんて信じられなかったけどさ」

「この世界の、ブレイドですか…。」

夏海は妖夢の手元にあったブレイバツクルを見る。…どうやら、ユウスケの話はまんざら冗談でも無いようだ。

ユウスケと夏海が会話している中、妖夢の手がピクリと動いた。

「あ…、ユウスケ、どうやら気がついた様ですよ」

「本当!？」

夏海の言葉に、自然に笑顔がこぼれ出すユウスケ。お互いまだ出会って大きな時間も立っていないというのに、ここまでユウスケが妖夢を心配できるのは、ユウスケの持つ優しい心が全てを物語っていた。

第16話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(中編)(後書き)

現在、アンケートのトップは伊坂です。

何気に人気ありますね伊坂w

以上、さりげなくこの作品に、いずれライアサバイブを出してみたいと思っっているムッコロでした。

第17話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(後編)(前書き)

今回はタッグマッチのみの描写なので、短めです

第17話「紅魔血戦・龍騎士降臨」（後編）

僅かに残された時間の中で、4人の仮面ライダーは雌雄を決するべく互いに必殺技を発動させた。グレイブとランスはランスラウザーとグレイブラウザーを手に、タイガとライアはファイナルベントの効果で契約モンスターを召喚した。

「グルルル……！！」

「…行くわよ、フラン！」

「任せてよお姉様！」

タイガとライアの呼び出した契約モンスター・デストワイルダーとエビルダイバーは、眼前の敵を前に闘争心を掻き立たせていた。一匹は鋭い前足を振るい、もう一匹はムチのようにしなる尾を地面に叩き付ける。

一方のグレイブとランスも、ミラーモンスターの威嚇をもともせず、迎撃体制をとる。その行動が、ミラーモンスターの冷静さを保つ糸を断つ原因となった。

「ガルウアアアアア！！」

集中力を断たれたミラーモンスターは、自我を忘れて二人のライダーに襲い掛かった…！！

「来たわね…。」

ランスはデストワイルダーと向き合い、グレイブはエビルダイバー

と対峙する。

「御嬢様はやはり私に狙いを付けてきた…。なら御嬢様は今、私『のみ』に狙いを定めている可能性が高い…!」

「そうですね、咲夜さん。そちらも上手く『引きつけて』下さいよ…!」

ライアはグレイブ達に聞かれぬよう小声でタイガに確認を取ると、エビルダイバーの挙動を修正しながら目標へと正確に狙いを定め、タイガはデストクローを構え直した。

「…まずは貴女からです」

エビルダイバーはグレイブに向かって猛スピードで突っ込んでいく。標的であるグレイブはグレイブライザーを掲げ、迫り来るエビルダイバーを睨みつける。

そして、エビルダイバーがギリギリな位置にまでグレイブに接近した時だった。

（私の狙いは最初から貴女だったんですよ…『レミア・スカーレット』!）

グレイブがグレイブライザーを降ろうとした瞬間、突如エビルダイバーが上昇、グレイブの視界から姿を眩ました。

すかさずグレイブは頭上に視線を向け警戒するが、既にエビルダイバーの姿はなかった。

「上手く引っかかりましたね!」

エビルダイバーは部屋の天井を駆け巡り、そのままデストワイルダーに気を取られているランスに狙いを定め、急降下した！

一方のデストワイルダーも、エビルダイバーの行動とほぼ同じタイミングで目標をランスからグレイブに切り替えた。

「グルル……ッ！」

「え！？ちょッ……何処へ行くつもり！？」

ランスと接近した直後、強靱な鋼の筋肉を生かしながらデストワイルダーは後ろ足で床を蹴り突け、流れるようにして一気にランスの視界の真横に跳躍する。

「くそっ、まだ逃がさない！」

ランスは先程デストワイルダーが飛び跳ねた方向にランスラウザーを素早く振るった。…しかし手応えはなく、無残にもラウザーを振るった箇所からは、虚しい風霧音だけがランスの耳に突き刺さる。

「…本当にすばしっこいわね。苛々するわ……」

必殺技の効果を不発させ、目標を見失ったランスは、苛立ちのこもった溜め息を吐き捨てながら天井を見上げた。

…すると、猛スピードで此方に突っ込んでくるエビルダイバーの姿がランスの視界に飛び込んできた！！

ランスの気付いたときには、既に手遅れだった。エビルダイバーは

勢いを殺すことなくランスの頭上に落下。反動でランスは声を出す暇もなく跳ね飛ばされ、天井に体を強く打ちつけられ、そのまま地べたに崩れ落ちた。

幸いベルトは破壊されておらず、変身は解けていない。しかしライアのファイナルベントを直撃した事には代わりはない。指一つピクリとも動かず、完全に気を失っていた。

「私の役割は終わりました。後は任せましたよ、咲夜さん。」

「妹様の相手はお任せ下さい。ですが本当に、あの御嬢様を倒してしまうなんて…。やっぱり貴女 능력は図り知れませんか。」

獲物を仕留め損ない、当たりを見回していたグレイブだったが、その時ランスがライアに敗れ去った瞬間が目に飛び込んできた。

「…そんな、お姉様が…」

グレイブは遠くから倒れ込んだグレイブを見つめていた。…しかし、仮面の下に隠れているフランドールの瞳には『慈悲』の意は宿っておらず、姉を倒したタイガとライアに対する『闘争心』と『狂気』の混ざり合わさった、邪悪な感情のこもった瞳をしていた。

（咲夜とさとりを倒せば、わたしが…。わたしがお姉様を…超えたこと…！）

ぶつぶつと何かを呟きながらゆっくりと視線を正面に戻すグレイブ。しかし、もう一匹のミラーモンスター、デストワイルダーがグレイブを目掛けて鋭い爪を備えた屈強な前足を構えながら突撃してきた！

「グルルルウアアアア！」

「えっ…？」

デストワイルダーはグレイブの胴体に狙いを定め、巨大な前足を振るったが、吸血鬼であるグレイブの反射神経のスピードがそれを上回り、グレイブのグレイブラウザーにより攻撃が弾かれてしまった。

「グルル…」

一時デストワイルダーは引き下がり、グレイブはラウズトレイを展開し、新たにマイティのカードを一枚取り出した。

「遅いよ…？今度は私から行くから、ちゃんと見失わないよう……  
ッ！？」

グレイブがマイティのカードをグレイブラウザーにラウズしようとした瞬間、グレイブの背中に激痛が走り、それに動揺してかグレイブラウザーとラウズカードを床に落としてしまった。

「…っ、っッ……？」

グレイブがゆっくりと後ろを振り向くと、そこにはデストクローを背中に突き刺していたタイガの姿があった。

「見失っていたのは、妹様の方でしたね。今は遊戯とは言え『戦い』の最中なのですよ？一瞬の油断が敗北を招きます」

タイガがデストクローをグレイブから引き抜くと同時に、デストワ

イルダーがグレイブ目掛けて走り出した。そのままデストワイルダーは前足をグレイブの胴体突き刺し、そのままグレイブを地面に叩きつけ、走り回りながら引きずり回す。グレイブは背中に大ダメージを負ってしまっていたため、思うように腕や足に力が出ない。最早、この技から逃れる術はない。そんなグレイブをお構いなしに、グレイブを引きずりながらタイガの元へと向かうデストワイルダー。

「安心してください。『殺しはしませんから』…」

タイガはデストクローを構え、此方へ引きずられてきたグレイブへ狙いを定めた。デストワイルダーはグレイブをタイガの元へ放り投げると、タイガはデストクローをグレイブの胴体を目掛けて突き上げた！

その衝撃でグレイブは宙を舞い、そのまま力無く地に落ちた。

威力は軽減されていたが、既にダメージを負っていたグレイブにとっては凄まじいダメージとなった。

激しい激痛と薄れゆく意識の中、グレイブの視界にぼんやりと移ったのは、自身を取り巻く結晶化した空気の欠片だった…

ようやく、これで紅魔館全ての戦いが終わった。夜が明けるのも近い。

戦いに勝ったタイガとライアは、ミラーワールドでね役割を終え、幻想郷へと戻ろうとしていた。

「…少し、やりすぎてしまった感があります。」

「咲夜さん、確かにあの戦法は弾幕やスペルカードで使ったら問題モノですよ…」

恐らくこの戦いで、ランスとグレイブはかなりの怪我やダメージを負ってしまっている。吸血鬼だから治癒速度は人間や他の妖怪よりは早い、消毒等の治療は必要だ。それも全てタイガ「咲夜の仕事に入るのである。その為今回の戦いで勝利できたことは成果に入るのだが、後の仕事も増えてしまうために、タイガにとっては喜ぶところでも喜べない心境なのである。」

「……………はあ……………」

「…どうかしましたか？咲夜さん」

「いえ、何でもありません…」

ライアも余り喜びを感じを見せないタイガを不審に思い、タイガの心と考えていることを能力で探った。

(…なる程。其方も苦勞してるんですね…。私とは比べモノにならない貴女の苦勞人生に私が泣いた…)

…やはり、我が儘な吸血鬼を主に持つ従者の苦勞は凄まじかった。恐らく今まで見てきた人間の中でも、一番の苦勞人なのかもしれない。そんなタイガ「咲夜にライア」さとりは仮面の下から少し尊敬の意を見せた。

「…さて咲夜さん。時間もないことですし、そろそろ戻りましょう。私もそろそろ帰らないと、地霊殿で待たせている妹たちに悪いから…」

「解りました。私もこれから色々忙しくなりそうな予感がしてならないので……………」

二人の体から、粒子化が発生した。恐らくこれ以上ミラーワールドに居ることは出来ない。二人は気絶していたグレイブ、ランスを抱えると油絵が飾られている黄金に光る額縁の前に立ち、そのまま額縁の中へ飛び込んだ。

**第17話「紅魔血戦・龍騎士降臨」(後編)(後書き)**

次回、第零章：紅魔館ミラーワールド編ラスト！

次章から本格的なストーリーを導入します！

## 第18話「新たな戦いの幕開け」（前書き）

序章の終わりにはよくある、なんだか微妙な終わり方でした。

あと、アンケートの結果を発表します！

- 一位：モモタロス
- 二位：伊坂
- 三位：木場勇治
- 四位：嶋登
- 五位：海堂直也
- 六位：神城剣
- 七位：ウラタロス
- 八位：キンタロス
- 九位：リュウタロス
- 十位：ジーク

当初は一位候補と呼ばれるまで人気の高かった伊坂でしたが、後半からギリギリでモモタロスが一票リード！

第1回「早く登場して欲しい現作キャラ」アンケートの一位をつかみ取ったモモタロス。やはり電王の人気はすごいんですね。（個人的には伊坂と坊ちゃんまが一位取るかと思いましたが；^^）

第一位に選ばれたモモ、第二位の伊坂、第三位の木場は近頃登場予定です！

（ベスト3以外のキャラも、ランダムで出すつもりです。）

読者の皆様、投票有り難うございました！

## 第18話「新たな戦いの幕開け」

紅魔館最後の戦いは、仮面ライダーライア・古明地さとりと仮面ライダータイガ・十六夜咲夜の勝利に終わった。二人が幻想郷へと戻って数分後、紅魔館では…

「紅魔館・とある病室…」

「…ツたア！もう少し優しく消毒できないの!？」

「それでも御嬢様、一番刺激の低い薬で一番優しくやってるんです。だから無茶言わないで下さい!」

先程の戦いで体を痛めたレミリアとフランドールの二人を、数匹の妖精メイドと共に治療する咲夜。ミラーワールドから脱出、そのまま咲夜が自らの能力で周囲の時を止め、その間に自らの主であるレミリアの無様な姿をさらすまいと医務室へと直行したのだ。幸い満身創痍のレミリアとフランドールの姿は客人に見られてはいない。

「でも、いくら何でもあの戦い方は無いと思うけど？いきなり他のモンスターの相手をさせるなんて…、いたたた」

「これも戦法の内ですよ、御嬢様」

その頃、紅魔館・大鏡室…

先程のタッグバトルに参加していたさとりと、それをを見ていた7

人は全ての役割を終えたので、紅魔館から出る準備をしていた。

「さて、私達もそろそろ行くつぜ。さつき慧音達が言った話の続きを聞かなくちゃならないからな」

「そういえばさつき、ミラーワールドがどうのここのとか言ってたわね。でも今からじゃなくて、少し休んでからに……」

しかし魔理沙は霊夢の言葉を聞くことはせず、カイザギアをトランクにしまい、さつさと館から出る準備をしていた。

(…相変わらず、好奇心が強いわね…)

大きな溜め息をつき、腕を組んで魔理沙を見つめる霊夢。するとそこへ、今度は輝夜が声を掛けてきた。

「ねえ、少しいいかしら？」

「何よ」

輝夜の問い掛けを、そっけない返事で返す。その手には、中破したデルタギアが下げられていた。

「以前、貴女達が機械に強い河童の知り合いという噂を聞いたから、一つ頼み事があるの」

「別に知り合いな訳じゃないけど……。その話の内容とか言うのはそのベルトを『あいつ』に頼んで直してきて欲しい、って所でしょ」

霊夢は壊れているデルタギアを見て、かなり面倒臭そうに答えた。

「ええ、その通りよ。私は河童の住処も解らないし、こんな理由では屋敷の外に出させてくれないもの」

「ふーん。……で、じゃあ何で今あなたは此処にいるのよ？そう易々と出させてはくれない筈じゃなかったの？」

「あ、それは部屋でこっそりと変身して部屋の鏡を利用してミラーワールド経由で此処まで来たのよ。弾幕もいいけど、最近体を思い切り動かしたりしてないから……。」

「頑張るわね……。」

二人が話を進めている中、魔理沙は人間の里に向かう準備ができたようだ。霊夢は魔理沙に呼ばれ、そろそろ出発する事を告げられた。

「……さて、私達はそろそろ行くわね。そのベルトについては、特別に考えてやってもいいわ」

「そう。じゃあお願いするわ」

輝夜は霊夢にデルタギアを渡し、霊夢もそれを受け取った。

「じゃあ行くござ。彼奴等は待たせると何かづるさい感じがしてならないからな」

「本当はもう少し休みたかったけど、あんたは言い出したら止まらないから仕方ないわ」

魔理沙達が次に目指すは人間の里。阿求と慧音からライダーに関し

ての詳細を聞くために、二人は他のメンバーより先に紅魔館を出た。

その頃、光写真館。

空は少しずつ明るさを取り戻し、士達にとってかなり遅めの夜食も始まろうとしていた。

「…、あ……」

一方で慣れないライダーシステムを酷使し、ワームの猛攻を受け気を失っていた妖夢も目を覚まし、ソファーから体を起こした。妖夢は目をこすり、周囲をキョロキョロと見渡す。

「あ、気がついた？」

「初めまして、妖夢ちゃん」

妖夢の目に、最初に入ってきたのは命の恩人ともいえる青年・小野寺ユウスケと、光写真館の店主・光栄次郎の孫娘・光夏海。

「…ユウスケ様、ここは……？」

「…ああ、ここは……、俺達の家みたいな所かな。」

「…そうなんですか」

ユウスケは夏海と共に、倒れた妖夢をここまで連れてきて、ずっと看病していた事を直に妖夢に話した。

「成る程……。では、夏海様と二人で私の事を……。面目ない……」

「あ…いやいや、そこまでしなくてもいいってば」

申し訳なさそうに深々と二人に頭を下げる妖夢に、ユウスケ達はいたって軽く受け止める。そこに…

「みんな、稲荷寿司が出来たぞ！」

（ああ…、侑斗にも食べさせてあげたかった…）

台所から、デネブが大きな皿を両手で持ち、その皿を土達のテーブルの上に置いた。皿の上には、数十個の稲荷寿司がところせましと積まれていた。

「む…、遂に主食が完成しましたか」

藍が目を輝かせながら、目の前に置かれている稲荷寿司を見つめる。他の人達も凄まじい数の稲荷寿司に仰天の声を上げる。

「今度は稲荷寿司ですか…。それにしても、よくこんなに作れましたね」

「こんなの横綱でも食いきれるかどうか…」

余りにもインパクトのある量だったため、再び文と土はカメラを構えて稲荷寿司の写真を取り出した。

「あ…ユウスケ、妖夢ちゃん。そろそろ食べませんか？夕食と言うより朝食になっちゃったけど…」

「え、私は…遠慮…」

「こんなに沢山人が居るんだ。みんな食べた方が絶対美味いって！」

ユウスケは妖夢の腕をつかみ、夏海と開いている席につこうとした。

「ほら、遠慮する事はないって！みんな俺『達』を待ってたんだから」

「そうですよ。それに私のお祖父ちゃんの作る料理は、絶対妖夢ちゃんも気に入ってくれるはずですよ」

「…そうですか。なら、お言葉に甘えて…」

ユウスケ達は妖夢を誘い込み、開いていた椅子に腰をかけた。開いていた三つの椅子が遂に埋まった。それを見た栄次郎は待ちわびていたかのように両手をパンと合わせた。

「…それでは皆さんも一緒に、いただきます。」

栄次郎の合図と共に、皆が一斉に皿に盛りつけられている料理を食べ始める。余程腹が空いていたのか、幽々子の食べるペースは他を遙かにしのぎ、まだ一分も経っていないというのに食器の中のポトフの量は、既に他の四分の一にまで減っていた。

「この煮込み物、なかなかイケるわね。」

未だに幽々子のペースは落ちることはなく、遂に幽々子のポトフは底を尽きてしまった。しかし、これで彼女の食欲が満たされるわけがない。次に幽々子が目を付けたのは、藍の楽しみである…、そう。

『稲荷寿司』である。

「なかなか油揚げがいい艶を出してるわね。これは期待できそうね」

しかし、既に藍は稲荷寿司の危機を感知していた。幽々子の異次元空間級の胃袋の存在を既に確認している藍は、先程からずっと稲荷寿司を彼女から死守する作戦を練り込んでいた。

（とうとう『私の』稲荷寿司に目を付けたか…。だが、いくら紫様の親友とはいえ、コレを渡すわけにはいかない！）

藍も食べるペースを上げて、数十秒足らずでポトフをほぼ完食。そして次に藍の取った行動は…

（西行寺幽々子に全ての稲荷寿司を食される前に…、ありったけの稲荷寿司を私の手中に収める！）

藍の作戦は、幽々子に食われる前に稲荷寿司を取り、それをポトフの空き食器に次々に装う事で、最小限の自分の食べる稲荷寿司をキープしようというもの。しかし、この時藍は珍しく、一つの誤算をしていた。それは…

（まずは一つ、頂こうか…！！）

それは、藍が一つの稲荷寿司に向かって橋を延ばそうとした瞬間に起きた。

…カチン。

「…!?!?」

藍の狙っていた稲荷寿司は、一瞬にして藍の視界から消滅した。もしや…と思った藍は、すかさず幽々子の方に視線を向けた。すると…

「ん〜、油揚げの甘さと酢飯が上手く噛み合ってるわ〜」

…既にその稲荷寿司は、幽々子の口の中だった。…そう。藍の侵した誤算というのは、「食に対する幽々子の反射神経の飛躍的上昇」。藍はそのことを計算に入れていなかったのだ。

しかし、いくら幽々子といえど何処かに絶対スキが出るはずだ。正面からでは勝算が薄いと判断した藍はその隙を伺い、一瞬で突く作戦に変更した…。

写真真館で稲荷寿司攻防戦が展開されている中、妖怪の山の外れにある、河童達の利用している金属物廃棄場。

普段、ここは河童達の発明や開発などで出来た金属ゴミを棄てるた

めだけの場所であり、めぼしい物など一つも無いために、ゴミの廃棄以外に利用している者はまずいない。…しかし、この時は『何か』が違った。

夜の闇が薄れゆく空、そこに一つ流れ星のような銀色の球体が、空を滑るようにこの金属物廃棄場へと降り立った。

金属ゴミの山の上に着陸した球体は辺りを警戒するように周りを見渡すような行動を取り、周囲に誰もいないことを確認すると…

突如球体が眩い光を発し、辺り一面を凄まじい光が覆った。光が放たれると同時に、周囲の金属ゴミが球体を次々と覆っていき、球体に纏わりついた金属ゴミは粘土のようにウネウネと動き出し、徐々に人の形を象っていく。

金属ゴミは人型と認識できるほどにまで形を変えると、体のあちこちから鋭い棘が金属の皮膚を突き破るかのように生え、伸縮する尻尾も姿を現した。

人型の怪人は周囲を見渡し、不完全な自分を強化することのできる『モノ』を探し始めた。…しかし周囲は産業廃棄物の鉄クズしかない。此処にはめぼしい物はないと判断した怪人は、金属物廃棄を後にした。

怪人が山をさまよい初めて数十分。怪人が思いつきで山に繋がる川に視線を向けると、そこには得体の知れない機械や建築物が川岸に建てられていた。それも一つだけではない…。

怪人はすかさず川岸の分析を始めた。…少なくとも、あの金属物廃棄場よりは優れた『モノ』が手に入りそうだ。そう判断した怪人は、川岸へと向かって移動を開始した…

第零章・紅魔ミラーワールド編

完

## 第18話「新たな戦いの幕開け」（後書き）

今回、登場したボス怪人

ドラス

登場作品 仮面ライダーZ

外界の科学者・望月博士の開発した人造生物「ネオ生命体」が、金属ゴミ等を取り込んで人型に変身した姿。

麻生の変身するZに敗北した事により幻想入りし、更なる自らの強化のため、妖怪の山にある河童の住処を目指す。

レーザー攻撃の照射や伸縮する尻尾による攻撃を得意としている他、高度な分析能力を持ち、相手の弱点を探ったり未知の物体の判別なども可能。

現在、ドラスの弱点そのものは不明だが、この幻想郷のどこかにドラスのエネルギー元である「プール」の存在があるらしいが…

第19話「黄色と黒の閃光」(前書き)

かなり更新が遅れてしまいました…読者の皆様、本当に申し訳ございませんでした。

## 第19話「黄色と黒の閃光」

…夜も明け始めた妖怪の山。

ザビーゼクターの資格者である犬走椛は人里に向かう為に山を降りている最中だった。

「！…あれは……」

椛の視線の先には、3匹のサナギ体ワームが獲物を探っているような動作をしながら、山を登っていた。

すかさず椛は茂みの中に姿を隠し、ワーム達の出方を伺った。

（山にもまだワームが…。まずは奴等を叩かない限り、前には進めそうにない）

そんな椛には気付かずに、ゆっくりと山を登るワーム。鋭い腕を使いながら、草木を風払っていく。

（これ以上進ませたら、流石に大天狗様も許してはくれないでしょうね…。なら、先手を取るまで！）

侵入者によるこれ以上の侵入は許せない。そう判断した椛は空に手を翳し、ザビーゼクターを呼び出した。椛の後ろから木々や草を避けながら、静かにザビーゼクターが椛の右手に着地した。

椛はザビーゼクターをキャッチすると、ゼクターをブレスに装着し、ザビーとなりワーム達に攻撃を仕掛けようとしたその時だった。

『ザッ、ザッ、ザッ……』

椀とワームが通った道とは別の道から、新たに足音が聞こえてきた。椀は道の方へ顔を向けると、そこには新たな人影が、ゆっくりとワーム達に近付いてきた。

「キギギギギギ」

謎の人影は、ジリジリと道を這うワームを真つ赤な瞳でギロリと睨み付けた。

「グギギギイイイイ」

(…！？あれは…)

薄暗い山の中、椀は新たな侵入者の出現を感知した。その侵入者の正体は伸縮自在の尾を持ち、金属で生成された皮膚と甲殻を持った…ネオ生命体・ドラス。

「ギチ…ギチギチッ！」

ワーム達は突如現れたドラスを前に、警戒心と闘争心を一気に掻き立たせ、少しずつドラスに近付き…

「ギギギギイッ…！」

一斉にドラスに向かって走り出す。そして先陣を切るワームが鎌のように変貌している腕をドラス目掛けて振り下ろす。…が。

「ググギギギイ」

「ギチイツ！」

ドラスは先陣のワームを右腕の拳で殴り込む。パンチの直撃を受けたワームは後衛のワーム達を巻き込み、吹っ飛ばされた。

その威力の前に前衛ワームはそのまま地べたに膝を付き、爆発してしまった。しかし後衛のワームはすかさず立ち上がり、再びドラスと向き合う。

「ギチギチ…ッ！」

「ギギギイイ」

すると二匹のワームの背中がピキピキと割れはじめ、サナギ体の中から成虫ワーム・ジオフィリドワームとビエラワームが姿を現した。

「キュルルル…」

「グギギギッ！」

二匹はサナギ体のカラを脱ぎ捨て、成虫体となった今、ワームの並外れた殺意と狂気に満ちた闘争本能を閃かせる。二匹は眼前に存在する『獲物』に狙いを集中させ、誰も追いつけない高速世界の中へと突入した！

二匹は一瞬でドラスの視界から姿を消す。しかしドラスは焦ることなく睨み合いの際に纏めておいた敵成虫ワームのデータを刹那の間の中で解析する。

…しかしその解析速度はワームのクロックアップを越えることは叶わず、高速世界に潜むビエラワームの鋭い触手による一撃を右腕に受けてしまった。

ドラスの右腕は予期せぬ攻撃の前に、いとも簡単に切断されてしまった。切断された右腕はボトリと地面に落ち、ドラスの傷口からも緑色の血液が溢れ出る。

「ガアアアアッ!？」

驚愕と苦痛の声をあげるドラス。しかしワームはクロックアップの世界から抜ける事なく、一方的にドラスへ攻撃を集中させる。

「グギ…、グガガッ」

しかし、対するドラスも並々ならぬ実力を持つ怪物。ドラス特有の優れた分析能力は、ワームの動きや戦法を的確に解析・分析し、弱点や出方をリアルタイムで予測する。…そして残された左腕で何もない空間に拳を繰り出した瞬間、何もなかったドラスの正面に突然ジオフィリドワームが現れた。…そしてドラスの放った拳は、ジオフィリドワームの腹部にめり込んでいた。

「ギ・ギ・ギグエ………」

ジオフィリドワームはドラスにより無理矢理現実世界の時間の中へ引き戻されると、そのままドラスの足元に倒れ込み、うめき声の様な断末魔と共に爆発四散した。

「グギギギギイイイイ」

獲物の内の一匹を仕留めた事により、ドラスは歓喜と興奮のこもった残忍な呟きを発し、再び第二の標的「ビエラワーム」に狙いを絞った。…すると高速世界での活動限界が来たのか、遂にビエラワームは通常世界へ姿を表した。

「ギギギイイイイ…」

自らの右腕を奪った相手を、簡単に見過ごす筈はない。ドラスは自らの傷口に力を込めると、傷口から電流の様なエネルギーが発生し、切り落とされた右腕の傷口と結び付いた。更に力を込めると右腕が地面から宙に浮き、そのままドラスの傷口と右腕が結合した。…そして右腕が完全にドラスの上腕に繋がると、ジリジリと圧力を掛けるようにビエラワームに詰め寄った。

「キュルルル…!？」

『それ』を目の当たりにしたビエラワームは一步、また一步と退く。先程まで殺意と狂気に満ちていたビエラワームの気迫は最早微塵にも感じられない。

「グギギギギイイイイ…」

ドラスは狂気に満ちた咆哮を轟かせると、ドラスの鋭い深紅の眼光がビエラワームを捉えた。先程とは全くもって違うドラスの気迫は、今にもどす黒い殺気の波が目視できそうな程にまで増幅していた。

…そして戦意を極限にまで溜め込んだドラスは一気に戦意を爆発させ、先程の仕返しとも言える勢いでビエラワームに飛びかかった…!

場所は離れ、紅魔館近辺の森林。紅魔館を出た霊夢と魔理沙、そしてオートバジン・ビークルモードは人里を指して坂道を歩いていた。

「…おい、この道坂、幾ら何でもきつくないか？」

「あー…、あんたがこの道にしようって言ったんじゃない。それにこんな森じゃあ…、まともに空も飛ばやしないわ」

「ブロロロロ……」

紅魔館から人間の里へ続く森林地帯を、しんどい思いで登り続ける二人。…その横で平然と坂道を登るオートバジンの姿が目に入る。

「はあ…、機械はいいよなあ。疲れを知らなくてよ。私もお前みたいに万能な乗り物が欲しいぜ」

「…ウイイイン」

魔理沙は疲れた瞳でオートバジンにチラリと視線を向け、溜息をつきながらボソツと呟いた。するといきなりオートバジンはバトルモードへと変形し、魔理沙からカイザドライバーの入ったトランクを奪った。

「…え？あ、オイ！」

いきなりのバジンの行動に、魔理沙は目を丸くした。するとバジンはトランクを開き、中から一枚説明書を取り出し、ページを開く。そしてその開いたページを魔理沙と霊夢に見せた。

「なにになに…可変式高性能サイドカー型サポートバリアブルビークル・『サイドバツシャー』…」

二人はその説明書に書かれた文を読む。…何やら、オートバジン同様に変形機構のあるメカだということが解る。

「…成る程な。要するに疲れてるならコレ使って行けっか。お前メカの癖に割と人情のある奴だな」

「確かに、知識と意志を持って動く機械なんて式神より珍しい気がするしね」

二人は改めてバジンに関心を持つ。そして魔理沙はトランクからカイザフォンを取り出した。

「…そんじゃ、試しに呼んでみるか」

「じゃあ、頼むわ。」

魔理沙はカイザフォンを開き、サイドバツシャーを呼び寄せるコードを打ち込んだ。

《9、8、2、1 ENTER》

説明書に記されていたコードを、カイザフォンに打ち込む。すると…

『プロオオオオオオ…』

魔理沙達の後ろから、何やらエンジン音が聞こえてくる。二人は後

るを振り返ると、かなり早いスピードで此方に近付いてくる黄色と黒のサイドカー……、サイドバツシャーがいた。

「もしかして…、『アレ』の事？」

「多分そうだけ。説明書には『呼んですぐ来る』って書いてあるぜ」  
サイドバツシャーは魔理沙の近くまで来ると、ブレーキを掛け停車した。

魔理沙は運転方法や注意事項までキチンと読むと、早速サイドバツシャーに乗り  
、霊夢もサイドに乗り込んだ。

「確かにこれなら体を使うことも無いみたいだけ」

「乗り心地はともかく…、あんたちゃんと操作できるんでしょうね」

「操作方法はちゃんと覚えただ。後は無事辿り着けるかどうかって  
いう問題だけ……まあ、簡単に言えば運だな」

(…果てしなく不安なんだけど)

初めて乗るサイドバツシャーに、期待を抱く者と不安を抱く者。オートバジンは先程の説明書を器用にトランクへ戻し、今にも走りだそうとする魔理沙にトランクを渡した。

「キュイイーン」

「…おっと、危うくそれを忘れるところだったぜ。サンキュー」

魔理沙はオートバジンからトランクを受け取ると、オートバジンはバトルモードからビークルモードへと変形、人里へ向かって走り出した。

「んじゃ、今度こそ行くぜ」

「安全に頼むわよ」

先行したオートバジンを追うように、魔理沙はサイドバツシャーを使い人里に向かって走り出した。

…魔理沙達がサイドバツシャーに乗り、人里へと向かって数分後。

「夜の鳥い、夜の歌あ、人は暗夜に灯を消せえ」

人里へのルート上で、暢気な夜雀が歌を歌いながらパタパタと小さな羽を使って坂道を登っていた。すると…

「ブロロロロロ！」

「きゃっ!?!」

坂道を猛スピードで登ってきたオートバジンに驚き、夜雀はつい地面に尻餅を打ってしまった。

「も…あれは一体何なのよ」

いきなり訳の分からない物体に少々気を乱したが、夜雀はよっこら

せと立ち上がり、再び歌を歌い出した。すると今度は…

「人は暗夜に…ぐえっ!？」

突如夜雀に高速で迫り来る黄色と黒の物体が直撃、そのまま夜雀は空をキリキリと舞いながらどこかへ吹っ飛んでしまった。

「ブロロロロロ…!!」

「ねえ、今何かぶつかんなかった!？」

「そっぴやどっかで見たことのある奴だった気が…だけど今はそれ所じゃないぜ!」

二人は先程サイドバッシャーで轢いて吹っ飛ばした夜雀に興味を示さず、猛スピードで人里へと向かった。

第20話「大袈裟すぎる食卓ロワイヤル」(前書き)

今回も更新長くなってしまいました…。

あと、今回は会話が主体なので、少し作風が変わっているかもしれないです。

## 第20話「大袈裟すぎる食卓ロワイヤル」

魔理沙達がサイドバツシャーで里を目指している中、光写真館ではまた新たな戦いの幕が開こうとしていた。

好物の稲荷寿司に手を出そうにも、幽々子により二度も妨害された藍は、ただ幽々子の食する稲荷寿司を羨ましそうに見ていた。

「…絶対に『それ』だけは手中に収めてみせる…」

「ならさっさと取ればいいじゃない。早くしないと他に取られるわよ」

「他…?」

幽々子の言葉に、藍は他のメンバーに視線を向け、その様子を見る。そして…

「…お、この味は…悪くないな。」

「すみません土さん、醤油取って頂けないでしょうか?」

「うん、これなかなか美味いな!」

「今が土曜日の夜なら、勢いに任せてこのまま踊ってしまいたいで

すね…」

「み、皆様食べ過ぎには注意して下さい…特に幽々子様！」

「ちょっと、私の分も残しておいて下さいよ！」

…既にほぼ全員が稲荷寿司へと手を付けており、藍の目の前で徐々に稲荷寿司の数は減っていく。

「いいのかしら？このまま好物が食べられなかったという結末を迎えてしまったも」

「元はといえば、其方が私の邪魔紛いな行動を取ったのが原因じゃないですか」

「食事とは常に非情なモノよ。好物を食す為には他を凌駕する手先の速さと手段を問わない覚悟がなければ難しいわ」

「しかし私は力技で押し込むのは主義じゃない。あくまで戦略を構築した上で…」

「食卓という、この何でもアリな世界で知性や戦略なんて役に立つのかどうかも分からないわよ？それは貴女の大好きな方程式に例えたとしても同じこと。肝心なのは頭脳ではなく経験と『勘』よ」

食卓は考えようによってはバトルロワイヤル。幻想郷で一番「食」

を極めたといつても過言ではない幽々子の言葉が藍にグサツと突き刺さった。…しかし、このままでは確実に自分の元に稲荷寿司は来ない。だが、このままでは藍の元に稲荷寿司が回ってくる可能性は低い。そう判断した藍は、一つの強攻策を思い付いた。

「…何でもアリと言うのなら、勿論『こんな事』も可能と見てもいいんですね?」

「そちらに何か良策があるなら、何も言うことはないわ」

藍は幽々子の返答にニヤリと笑うと、右腕の袖を捲る。…そこにはヘラクスの変身ツールであるカブティックプレスと、そこにピタリと止まっている銀色のカブティックゼクターが現れた。

「要するに、取られる前に取ればいいだけの話だ!」

《HENSHIN》

藍はそのままカブティックゼクターのスイッチを入れ、食事をしてる他のメンバーの目の前で仮面ライダーヘラクスに変身した!

一方、淡々と食事を進めている士、ユウスケ、文の三人の会話:

「おい、何であいつ変身したんだ…?」

「そついや士、藍さんはさっきから幽々子さんに妨害されていたっばいから、原因はそれじゃないのか?」

「確かにあいつはずっと稲荷寿司に興味を持ってたみたいだったか

らな。邪魔されちゃあ無理もないか」

「しかし藍さんには私と同じクロックアップがありますよ？このま  
までは私達の分まで取られてしまう危険性があると思いますか…」

「それもそうだね…だけど、生身の俺達じゃあ藍さんは愚か、幽々  
子さんにすら対抗はできそうにもない」

「俺達は関係ないだろ。…それにしても、たががメシ時に変身する  
なんて…」

「だよなあ。そこまでして食べたいなんて、よほど稲荷寿司が好き  
なんだな、藍さんは」

三人は頑張る藍を横目で見ながら、再び食事を再開させた。

一方、ヘラクスと幽々子…

「そんな手を使ってくるなんて、貴女としては珍しいわね」

「私はこの稲荷寿司の為にこの店に止まっていると言っても過言じ  
ゃない」

「だけど、このまま食べられなかったら残った意味がないんじゃない  
い？」

「それはどうかな？」

ヘラクスは余裕めいた態度を幽々子に示し、カプティクゼクター

のクロックアップスイッチを起動させた。

《CLOCK - UP》

ヘラクスがクロックアップを起動させると、辺りの時間の流れが著しく遅くなった。今なら稲荷寿司を皿に盛ることが出来る！

(ここまでして欲張りは流石に見苦しいな。まずは数個頂こう。)

ヘラクスは左手に皿、右腕に箸を取り、スイスイと稲荷寿司を数個、皿に乗せていく。

そしてある程度稲荷寿司を取ると、クロックアップ空間の中でカプティックゼクターをプレスから外し、変身解除と共に現実時間の流れに戻った。

一方、ヘラクスのクロックアップに気が付いていなかった幽々子の目には、いつの間にか変身を解除していた藍と、稲荷寿司が5個ほど乗せられていた藍の皿が写っていた。

「成る程：貴女には、どぞのメイド長みたいな能力があるのね」

「…私達は起動時の電子音声から取って『クロックアップ』と呼んでますが」

「まあよく解らない名前だけれど、簡単に説明してもらえないしら？」

「…単純に考えれば、時間操作のようなモノで自らの時間を速くす

ることで、高速移動が可能になる…みたいな感じですね。」

「うん…全然分からないけど少し分かったわ」

「日本語になってない」

藍がやっと稲荷寿司にありつけた一方、デネブが新たに稲荷寿司を大量に乗せた皿を追加で持ってきた。

「みんなよく食べるな。追加持ってきたぞ」

「デネブ様…、よくまだそんなに材料が残ってましたね」

「衣玖、実はこれでもう油揚げと米が無いんだ。それで最後になる」

「これだけ作ればそうなりますよ。現にこの皿に乗っている稲荷寿司だけでも30個以上…いえ、それ以上ありそうですし」

「今日は沢山人がいるから。ところで衣玖、さっきから取り合いがあったみたいだから、少しだけでも避けるために一つ『案』を思い付いたんだが…」

「…何でしょうか？その案とは…」

「一人一人だと埒が開かないから、二人一組になって稲荷寿司を取ればいいと思う。」

「しかし…流石に大袈裟すぎだと思うのですが…。稲荷寿司にそこまで…」

「ついでに言っておく。この稲荷寿司に使われている米は新潟産のコシヒカリ…そう、ブランド米だ！」

(…ニイガタ？何処ですかそこは…)

…衣玖は幻想郷の出身だ。今の日本の都道府県など知らないことに、デネブは全く気づいていなかった…。

一方、場所は離れて慧音の開く寺子屋では、阿求と慧音がミラーワールドの件について雑談をしていた。

「慧音さん、やはりミラーワールドには幻想郷の生物は確認できませんでしたね。」

「何せ『あちら』はミラーモンスターが支配している上、時間制限付きだからな…、此方側に生息している生物は、やはりあの世界では適応できない…と現段階ではそう考えるしか…」

二人は今、阿求の執筆している「幻想郷縁記」にミラーワールドの事を書き足す為に、ミラーワールドに生息している生物に関する情報を纏めていた。

「阿求殿、一時休憩して一緒に食事を取らないか？執筆ばかりでは体に毒だろう」

「確かに何かと食べた方が頭がよく回りますからね。何か閃くかもしれないですし…。では、お言葉に甘えさせてもらいます」

「分かった。残り物しかなくて申し訳ないが、直ぐに準備する。少

し待っていてくれ」

慧音は立ち上がり、台所へと向かった。

朝日の光が幻想郷を照らし始めた一方で、魔理沙ご一行は無事に坂道を越え、遂に人間の里へと辿り着いた。

『ブロロロロロ！』

「やっと里に付いたぜ。後は寺子屋に行くだけだな。」

「そうね。ところで魔理沙、こんなにスピード出さなくても大丈夫なんじゃないの？」

人里へと辿り着いた今でも、焦る必要などない筈だが、サイドバツシャーの移動速度は落ちるところか徐々に増していく。

「そろそろ着くわ。スピードを落とした方がいいんじゃない？」

「いや…、その事なんだけどな、霊夢…」

霊夢はチラリと魔理沙に視線を向けると、何やらサイドバツシャーのグリップを握る魔理沙の腕が震えており、表情も少し引きつっていた。

「どうしたの？何か表情がおかしいけど…」

「霊夢…、実は、私コレの止め方知らないんだ…」

「え…」

霊夢は魔理沙の答えに、一瞬目を丸くして我が目を疑った。そして視線を魔理沙から再び自分の正面に向けた。すると霊夢の視界に飛び込んできたのは…

…猛スピードで近付いてくる慧音の寺子屋だった。

「ええええええっ!？」

「仕方ないだろ!時間もなかったことだし、後のことはどうにかなると思つてたんだ!」

「あんだ、ベルトの時とは全く真逆な事言ってる気がするんだけど…つて、早く何とかしないと寺子屋にぶつかるわよ!？」

開き直っている魔理沙に突っ込みを入れるも、未だにサイドバツシヤーは止まらず、徐々に寺子屋へ近付いていく。

「こうなったら仕方ない、霊夢!」

「何よ!」

「このまま突っ込むから、お前はしゃがんでろ!」

「突っ込むって…あんだ、本気で…」

「時間がない！そろそろ突っ込むぞ！」

魔理沙はサイドバツシャーを止めることを諦め、そのまま寺子屋に突っ込む事を覚悟した…！

一方、寺子屋では阿求と慧音は、誰も居ない教室で食事の準備をしていた。二人の座る机には、味噌汁と炊きたての白米が置かれていた。

「こんな素っ気ないモノですまないが、まずは軽い腹ごしらえといこう」

「いえ…素っ気ないなんて事はないですよ。日本の食事らしくていいじゃないですか」

二人は会話を一時終わらせ、手を合わせる。そして…

「いただきます…」

安息の支配する寺子屋の中、二人が食事の挨拶をかけようとした…その時に、悲劇は突然起こった。

『バキバキグシャドカバキヤベキベキ！』

「うおらあああああっ…！」

突如慧音と阿求の教室に、黄色と黒のサイドカーが勢い良く突っ込んだ。

「け、慧音さん…!?!」

「な…何だコレは!?!」

サイドバツシャーは教室の壁や周囲の机は勿論、二人の朝食が並べてあった机すらも、非情な事に全て跳ね飛ばした。

『ドルルルルル…』

突然の出来事にポカンとしている二人を余所に、エンジン音は響くもサイドバツシャーは動きを止めた。

「い…いてて…」

サイドバツシャーの運転席から、寺子屋へ突っ込んだ張本人、霧雨魔理沙が立ち上がる。

「生きてるか…? 霊夢」

「ええ…何とかね」

一方で、運転席の隣側の席に乗っていた霊夢も立ち上がった。

「お前達…、来てくれたのには感謝するが、コレは少しやりすぎじゃないか?」

慧音は目を丸くしながら震える口調で、滅茶苦茶になった教室内を

指差した。

勿論、慧音の態度から察するに魔理沙達は只では帰されないだろう。  
…それがたとえ、連戦続きで疲れ果てている彼女達であったとしても。

「あ、あはは…、やっちゃったZ E  
」

第20話「大袈裟すぎる食卓ロワイヤル」(後書き)

「スーパーヒーロータイム風の予告」

萃香

「いいやったああ!! 霊夢!」

天子

「遂に…私達の時代が来た!」

霊夢

「あら、萃香とMじゃない。随分と嬉しそっただけどもどうしたの?」

萃香

「遂に私たち、次回の出演が決まったんだ!いよっ!」

天子

「貴女達主役にも匹敵する活躍を見せてやるわ!」

モモタロス

「そして次回、この俺様も登場するぜ!俺様のカッコイイ変身、見せてやるからよく見とけ!」

天子

「それにしても、何で私の呼び名がMな訳? (間違っちゃあいないけどノノノ)」

霊夢

「え何?違っの?」

萃香

「よく私達にいじめられに来るからじゃないの？」

モモタロス

「…ってオイお前ら、俺の話も聞けってーの！」

**第21話「神社だ！鬼だ！俺、参上！」（前書き）**

注意書き

この作品の電王は、ディケイドの『電王の世界』での変身方法を意識しています。

少しオリジナル要素があります。

では、相変わらずの駄文ですが、宜しくお願いします。

## 第21話「神社だ！鬼だ！俺、参上！」

…霊夢も留守にしている、静かな博麗神社に一人、陽気な小鬼が賽銭箱に腰をかけ、瓢箪の中の酒をグビグビと呑んでいる。

「ぶっはあゝ。……ありや、待つてる間にもう夜が明けちった」

昨日の晩から、霊夢の帰りを待っている小鬼・伊吹萃香はただ酒を呑んでばかりで退屈していた。

「うゝん…『さっきの出来事』みたいな事がありや、少しは楽しめそうなんだけどねえ」

萃香は先程、何か事件があったかのような事を独り言で呟き、暇そうに酒を呑んでいると、何やら下から、神社へ繋がる石段を上ってくる足音が、コッ、コッと聞こえてきた。

「お、やっと帰ってきたか？」

萃香はすかさず立ち上がり、石段へ向かってフラフラとした歩調で歩き始めた。

そして萃香は石段へと辿り着くと、ドサツと腰を下ろし、こちらに向かって登ってくる人物を見下ろした。

〈博麗神社へ続く石段〉

「…あゝ、此処に来るのも何ヶ月ぶりかしら。さて、誰か居るかな…」

桃の飾りの着いた帽子を被り、よいしょ、よいしょと石段を上る青髪の少女が萃香の視線の先にいた。すかさず彼女に声をかける萃香。

「何だ、霊夢かと思ったらあの時の天人じゃん。どした？」

「…あ！あなたはあの時の生意気な小鬼！」

帽子を被った天人くずれの少女・比那名居天子は萃香を少し睨むと、すぐ表情を戻して話しかけてきた。

「まあ…天界から久し振りに降りて来て、この近くを通ったもんだからついでに巫女に顔でも見せようと思っただけよ」

「残念だけど霊夢なら留守だよ。昨日の朝からね」

「昨日の朝からって…、まるまる1日帰ってきてないって事？」

「まあね。だから霊夢の居ない今、私が神社を見張ってるのさ。それに今、こつちの世界じゃあ不気味な怪物が最近わんさか出てきてね。もしそいつらに神社が壊されたりしちゃあ、霊夢も黙っちゃあいないだろうし」

「確かあなたは巫女と仲が良かったわね。でも…普通神社に鬼とかいないでしょ」

「現に此処にいるー」

「私は普通に言ってるのよ。要するにあんたは普通じゃない」

「そこまで言うなんて、酷いねえ…」

萃香は天子との会話に一区切りつけると、再び瓢箪の栓を抜き、ごくごく酒を呑み始めた。

…現在、神社には鬼と天人がいる。

しかし、彼女達は気づいてはいないが、何者かが『もう一人』存在していた。

『ズササササ…』

彼女達が会話してる場所とは離れた場所で、地面から何やら砂のような、上半身だけの怪人のようなモノが浮き出るように現れた。

「…あ？此処は…何処だ？」

謎の怪人は周囲を見回すも、見たこともない景色で自分の知る人物や建物、乗り物すら一つも無いことに気づく。

「良太郎や亀達も見当たらねえ…って事は俺、迷子か!？」

自分がただ一人、こんな得体の知れない場所へと迷い込んでしまったことを確信する。

「…ってこうしちゃいられねえ!」他のヤツら『も捜さねえと…』

謎の怪人は神社を後にし、自分の知る他のメンバーを捜しにいくとした時だった。

『ズズズウウウ…ン!』

突如石段の下で、爆発音のような激しい音と振動が起こり、その衝撃は神社にいる萃香達にも伝わった。

「え!? な…何が!？」

「もしかしたら、『さっきの連中』の生き残りかも…」

萃香と天子は石段の下を見る。すると数匹のサナギ体ワームが、ゆっくりと石段を登って此方に向かって近付いてきた!

「あ…、やっぱりかあ…」

「ちよっ…何なのよ彼奴等!？」

「そっぴや昨日の晩…、つまり数時間前にもこんな奴らが神社を襲ってきたんだ。」

初めて異形の怪物を見て、すかさずスペルカードを取り出した天子を横に、萃香は腰にぶら下げていた変身音叉・音角を取り出した。

「無駄だよ、そいつらにスペルカードは通用しないよ」

「え…こいつら、そっぴや奴らなの!？」

「まあ、彼奴等はスペルカードじゃ倒せないらしいから、こんな怪物が相手の時、私達はこんな力で対抗してるんだ」

「こんな力…って、どんな力なのよ」

「見てればわかるよ。結構スゴいんだよ？コレ」

萃香は音角を鳴らし、音波を発生させた音角を自らの額に当てた。すると突然萃香の周りに炎が発生し、一瞬で炎が萃香の全身を覆った！

「…え、あんた…燃えてる！滅茶苦茶燃えてるじゃん！鎮火！鎮火しなきゃ…」

萃香の全身が炎に包まれた瞬間、天子は取り乱すも不安はすぐ消え去った。

「はああああ…はっ！」

萃香は自らの力で炎を振り払った。…しかし炎から解放された萃香は、紫色をした人型の怪人のような姿：『仮面ライダー響鬼』へと変貌を遂げていた。

「…え…姿が変わった!？」

「さあ、準備完了…っ」と

響鬼は手首を鳴らし、音撃棒・烈火を取り出し両手に持った。

「天子、あんたはそこでのんびりしてな。すぐに終わらせるから  
そう天子に告げると、響鬼は一気に石段を下り、自信気にワームの  
中へと飛び込んだ！」

〈博麗神社へ続く石段〉

…石段の下には道がある。そして、その道を取り巻くかのように茂  
った森林は、響鬼にとって絶好の場所。…しかし、響鬼は石段の上  
でワームを睨んでいた。

「ギチギチギチ」

ワームの数は6匹。しかし、響鬼となった萃香にとって障害と呼ぶ  
には足りなすぎる程度の戦力だ。

「ギチギチギチ！」

「はは、遅いよ…っ」と

ワームは響鬼に飛びかかる。しかし響鬼はそれをいとも簡単に避け、  
狭い足場で素早く体制を立て直す。

「ギチギチギチギチ！」

ガキーン！

「おっと…」

続いて二匹目のワームの攻撃。鎌のような前足を勢い良く響鬼の頭上に降り降ろすも、響鬼は音撃棒・烈火でガードする。

「じゃあ、そろそろ私からも行くかあ！」

次に響鬼の攻撃。一番自分に近い場所にいるワームを、響鬼のパワーを活かし音撃棒で殴りつけ、石段から叩き落とした。

石段をゴロゴロと転がりながら転落していくサナギ体ワーム。

「さあ、次はどいつ？」

響鬼は石段から落ち、のたうち廻っているワームを見下す。…その時、地べたでうめき声をあげながらもかくワームを目掛けて、森林から新たな陰が飛び出した！

「……………！！！！！！」

「ギチギチ……」

突如現れた緑色の謎のライダーは、長い杖のような武器…醒杖レンゲルラウザーを使い一瞬でワームをスタスタに引き裂いた。

…そして、ワームはそのまま力尽き、爆発。

「…何だ？あれも…味方か？」

響鬼は手を休め、暫くそのライダーを見つめていた…その時、ワームを倒した謎のライダー、仮面ライダーレンゲルは爆煙を突き破り、超人的な跳躍力でジャンプ…、一気に響鬼との間合いを詰めた。

「え…おまつ」

「…私が、最強なんだ…!!」

レンゲルは殺意の込もった目で響鬼を睨み付け、そのまま響鬼に向かってレンゲルラウザーを振り翳した!

「…うおっ!?!」

響鬼はしゃがんでレンゲルラウザーを回避。しかしレンゲルは一度かわされた程度では攻撃の手は休めない。

「ふっ、はっ…」

「うあっ…!く、ううっ!」

…突き、斬り、殴打。次々にラウザーを駆使して響鬼を攻撃するも、どれも辛うじてかわされる。

一方、神社から闘いを見ている天子は…

「またなんか出た…。雰囲気から味方じゃあなさそうね」

天子はレンゲルを敵と判断すると、自身の身長の数倍近くもある超巨大な要石を召喚、それを両手で受け止めると、投擲の体制を取る。

「これ位大きければ、足止め位になら…!」

要石を手に、レンゲルのみに狙いを定める。そして…

「そおくりゃあっ!」

…勢い良くレンゲルに向かって要石をブン投げた。

「ぜー、ぜー……………。こんにゃる…」

「う…………。」

レンゲルと響鬼は受けず当たらずの戦いが続いていたため、無駄に気力を使ってしまい、なかなか決着がつかないでいた。

「しぶといなあ、お前……………んっ?」

「…え…」

…太陽の照りつける中、突如巨大な影が二人を覆う。二人は空に視線を向けると、超巨大な要石が落下してきた!

「この攻撃…、天子か!?!」

いち早く反応した響鬼は、すかさず右へローリングして避け、ジャンプして石段を飛び、神社の入り口へ着地。

しかし少し反応が遅れたレンゲルは、鈍い判断力でレンゲルラウザーを構えてしまい、何を血迷ったのか自身の数倍近くはある要石を受け払おうという、余りにも無謀な行動に走ってしまった。

…そんな事も出来るはずが無く、要石がレンゲルラウザーと衝突したと同時に、レンゲルは要石の衝撃に耐えられず、そのまま要石に

押し付けられるように落下していった。

「ぐああああっ!?!?!?」

レンゲルは自身を襲う巨大な衝撃に絶叫をあげながらもがくも、重量の関係で要石が自身とピタリと密着しており離れない。…要石はスピードを上げ、残るワーム達を巻き込みながら地面へ近付いていく。

そして、レンゲルやワームを巻き込んだ要石は地面へと到達し…

『ズドオオオオオンッ!』

「いやゝ、天子。助かった助かった」

「二度も言われると腹がたつわ。まあいいけど」

響鬼は予想外だった天子の支援により、何とかレンゲルとワームを倒した…かに見えたその時!

「うあああああっ!!!」

突如、ワーム共々要石の下敷きになった筈のレンゲルが石段を飛び越え、神社に着地すると二人にレンゲルラウザーの刃を向けながら

走り出した。

…そして、レンゲルは天子を標的に定め、狙いを定めた！

「お前…、お前かああっ！」

レンゲルは怒りに満ちた声と共にラウザーを振るい、天子の体をいとも簡単に突き飛ばした！

「…き、きやあっ！」

「なッ…、天子いつ！」

…ドサッ！

「…きやっ！」

『どわあっ!?!?』

レンゲルの攻撃に、天子は地面に強く尻餅をついた。しかし…

「…あれ？今何か声が…」

…尻餅を突いた際、何者かの声が聞こえた。天子はキョロキョロと辺りを見渡すも、自分の見る範囲ではレンゲルと交戦している響鬼の姿しかない。

「…気のせいかな…」

…誰も居ないため、そう呟いて自分に納得させようとした…が！

『気のせいで済ませんなあ！』

「うわっ！やっぱり何か居る！」

声に驚き天子は自分の足元を見る。すると、自分は何か、蠢く砂の上に腰を下ろしていた事に気付いた。

天子はすかさずその場を離れると、蠢く砂は上半身だけの怪物のような姿に変貌した。

『おい、お前にはいろいろと聞きてえ事が山ほど…おっと、何だか楽しそうな戦いが始まってるとるじゃねえか』

「そんな事言ってる場合じゃ…って、何か萃香だけじゃ不安ね。まずはあの緑色を何とかしなきゃ。何か考え無い？」

『一つだけ手はあるが、その為にはお前にも手伝ってもらっぜ』

「手伝う…って、何を？何をするのか説明してくれないと…」

『ああッ！いいからさっさと行くぞ！俺は早く暴れてえんだ！』

「行くってだから…きゃっ!?!」

怪人は少しイライラした口調で、動揺している天子に突然取り憑いた！

「お前、何で私達ばかり攻撃してくるんだよ！さっきの雑魚とか、倒せる奴ならいくらでもいるだろ！」

「私が最強だつてことを証明させてやる…！」

響鬼は音撃棒でレンゲルラウザーの猛攻を防ぎ、レンゲルはレンゲルラウザーで音撃棒の連続攻撃を防ぐ。

そして二人は互いの武器を交差させ、大きな

「そつちがその気なら、思う存分暴れてやるよ！」

「返り討ちにしてやる…。来い！」

二人は互いの武器を振りかざし、再び激突しようとした時だった！

「なかなか楽しそうじゃねえか、俺も遊ばせてくれ！」

「ん？誰…って」

「お前は…！」

二人は突如轟いた声に、声のした方へ顔を向けた。そこにいたのは…

「て、天子！？だけど…、何か声が違うし目も赤い…」

「…？違う…あいつじゃない」

…そこにいたのは比那名居天子だった。しかし、何か様子がおかしい。その声は少女の声とはかけ離れたモノとなっており、瞳の色も真紅に染まっていた。

「おいお前等、俺の格好いい変身…、見せてやるからよく見とけ！」

天子はそう二人に向かって叫ぶと、一体何処から取り出したのかベルトを手に取り、腰に巻く。更にまた何処から取り出したパスを片手に、ベルトに配置されている赤いスイッチを押した。

「お？まさかあいつ…」

「…………？」

ベルトからは少し独特な変身待機音が鳴り、二人の視線も天子に向けられた。

そして天子はパスを構え、視線を二人の仮面ライダーへと向け…

「変身！」

《SWORD - FORM》

先程手にしたパスをベルトにセタッチさせると同時に、電子音声が鳴り天子の全身を白と黒のスーツが覆った、更にその上に装甲が展開され、赤い電仮面が顔に装着される。…この瞬間、天人くずれ・

比那名居天子は短気な怪人の力で赤と白の仮面ライダー、『仮面ライダー電王・ソードフォーム』に変身する事に成功した！

「…俺、参上！」

## 第21話「神社だ！鬼だ！俺、参上！」（後書き）

今回、登場したライダー

仮面ライダー響鬼

登場作品 仮面ライダー響鬼

幻想郷の鬼・伊吹萃香が変身した姿。非常に強いパワーと身体能力を持ち、ハイスペックな性能を持つ。しかしその力を制御する事は容易ではなく。半端な精神や心を持つ者は変身の際にいろいろと苦労する事が起こるらしい。

武器は音撃棒・烈火と呼ばれ、太鼓のバチを連想させるデザインを持つ。

仮面ライダー電王

登場作品 仮面ライダー電王

短気だけど憎めないイマジン・モモタロスの力により天人くずれの比那名居天子が変身した姿。デンガツシャー・ソードモードによる斬撃や殴る、蹴る、ぶつ叩く戦法が得意。

なお、モモタロスが天子に取り憑いた際には瞳の色や性格、声が変わる事は原作通りだが髪型だけは人間とは違い天人独自の体質の関係で ツンツン頭にはならず、『いぬさくや』の様なアホ毛が一本出る程度になる。

（最も、天子は帽子をつけてるため見ることは難しい）

第22話「太鼓と剣で蜘蛛退治！うにゅのベルトはボロボロだ！」（前書き）

更新が滅茶苦茶遅れてしまいました…。

それに短い駄文です…。

期待には及ばないかもしれませんが、読んで頂ければ幸いです。

第22話「太鼓と剣で蜘蛛退治！うにゅのベルトはボロボロだ！」

モモタロスに取り憑かれた天子が勢い良く電王に変身すると、響鬼と対峙していたレンゲルは響鬼を押しつけ、ラウザーを握り締めながら電王に飛びかかった！

「うあああつ！！！」

「つていきなりかよ！？…こんの野郎！」

すかさず電王はデンガツシャーでレンゲルの攻撃を上手く弾き返す。しかしレンゲルは上手く体制を立て直し、再び電王を攻撃しようとした…が、電王とレンゲルを見ていた響鬼はレンゲルに狙いを定め、音撃棒を構えた。そして音撃棒をレンゲルに向けて振り…

「そう何度も好きにはさせない、つてね！」

振られた音撃棒からは二発の火炎弾が勢い良く発射され、真っ赤に燃え盛る炎の玉はレンゲルに命中。

「ぐっ！」

いきなりの火炎弾に怯んだレンゲル。その隙に響鬼は電王の元に駆けつけ横に並んだ。

「さて、そろそろ全開で行く？神社にまで被害が出たら面倒なことになりそうだし」

「ああ、こっちは準備OKだ。いっとくが俺は、最初からクライマ

ツクスだぜ！」

響鬼は音撃棒を構え直し、電王はデンガツシャーの刃をグツと構える。

…そしてレンゲルも体制を立て直し、ベルトに装置されたカードホルダーからラウズカードを2枚、取り出した。

「…そうだ、全力で来い。私が最強である事を証明させる為に！」

《BITE》 《BLIZZARD》

《BLIZZARD CRASH》

レンゲルはラウズカードをラウザーにスキャン。二枚のカードによるコンボを読み込んだラウザーからは電子音声が成り、ベスタの効果を発揮したことによりレンゲルの両脚を凄まじい冷気が覆う。

「決め技…みたいだね。んじゃ、こつちも決め技で行く？」

「…つたりめーだ！最初から最後までカツコ良くキメてやるぜ！」

響鬼はレンゲルの技に対抗するかのようになり、ベルトに装置されていたバツクルⅡ『音撃鼓・火炎鼓』を取り外し、電王もデンガツシャーとパスを手に、レンゲルを睨みつけた。  
そして…

「はああ！」

レンゲルは電王と響鬼に向かって走り出し、そのまま二人に狙いを絞った状態のままジャンプ。空中で体を捻り回しながら、冷気を纏

う両脚で敵を挟み込もうとする動作を取る。

…その一瞬、既に吹雪を纏った両脚は響鬼を捉えており、そのまま挟み込もうとしていた！

「つて…ちよつ、危なっ!？」

だが響鬼はその場で賺さずしゃがみ、間一髪の所でブリザードクラッシュを回避する。レンゲルは響鬼の頭上を通過し、そのまま地面に着地する。

「チツ…」

攻撃が外れ、ゆっくりと視線を二人に向け舌打ちをするレンゲル。

一方の響鬼は攻撃の手を休め、無防備に近い状態となったレンゲルを逃すことはなく、確実に捉えていた。

「あれは…、本当にヤバかったよ。耳の辺りが少し冷たくなったよ

…。これは少しばかりの「お礼」だよ！」

「…?」

その台詞を吐くと、響鬼はレンゲルとの距離を一気に詰め、先程手にした音撃鼓をレンゲルの胸部アーマーに押し付けた。

「な…!」

「さー、これで人間太鼓のでき上がりっ!…まあ、正直あんたが人間なのかどうかは知らんけど!」

響鬼は押し付けられた音撃鼓の前に立ち、音撃棒を構える。…そし

て、再びレンゲルが攻撃態勢をとる前に響鬼は音撃鼓を両手の音撃棒で一発、強く叩き込んだ！

「…どおすこおおおい！」

…響鬼の気合いの入った掛け声の後に、力強い太鼓の音が神社に流れる静寂を打ち破る。

「ぐあああつ！？」

勿論、音撃鼓による衝撃も半端ではない。響鬼の音撃棒から伝わった強力な波動の前に、レンゲルはまるで風に飛ばされた落ち葉のように、いとも簡単に吹っ飛ばされ、神社に植えられていた木に激突した。

「さて、これで私の番は終わりだね。最後は天子、あんたが好きに料理してやんな」

「気が利くじゃねえか。まあ見てな。俺の幻の必殺技を拝ませてやつからよ」

響鬼に続き、電王もパスを片手に、いつでも必殺技をたたき込める態勢を取る。

一方、余力を振り絞り何とか立ち上がったレンゲルは、再びレンゲルラウザーを手に取り、やみくもにラウザーを振りながら電王めがけて突撃した！

「最強は…私なんだあああ！」

「来やがったな。…行くぜ、俺の必殺技パート1!」

《FULL-CHARGE》

ライダーパスをベルトにセタッチすると、電子音が鳴り、デンガツシャアの刀身が徐々に紅くなっていく。

そしてそのデンガツシャアで、接近してきたレンゲルに先制攻撃を仕掛け、レンゲルラウザーによる攻撃をこちらが受ける前にレンゲルの胴体目掛けて斬り上げた!

「うあああつ!」

レンゲルはデンガツシャアで叩き斬られた瞬間またしても吹き飛び、とうとう石段から落下していった。

「…ふう、これで一応何とかしのげたことになるのかな?」

「来る気配は今んとこねえな。そう考えても間違いはねえみたいだな」

敵の全滅を確認すると、電王はベルトを外し変身を解除した。一方の響鬼は…

「あー…、すぐ戻るから、少しそこで待ってて。直ぐに終わるから!」

響鬼は何か無駄に焦ってるような口調で天子に告げると、急いで神

社の中へ入り、入口を堅く閉ざした。

数分後：

「いやあ、おまたせおまたせ！」

何の予告もなしに、突如神社の扉が勢い良く開かれた。神社の中からは響鬼…ではなく萃香が出てきた。

「…おい、お前何やってたんだ？」

「あー、まあ、いろいろとだね。」

M天子の問いかけに、萃香はただ軽く笑いながら誤魔化していた。  
…口調は普段と変わらなかったが、その目つきは詳細を絶対に話そうとはしていなかった…。

その頃、石段の下にある小さな森林。

「く…、くそ…」

2人のライダーに呆気なく敗退し、ボロボロとなったレンゲルは森林の中に身を隠し、体を休めていた。

…レンゲルはバツクルのゲートを閉じると、オリハルコンエレメントが前方に放出され、自動的にレンゲルの体を通して変身を解除した。

レンゲルの中から現れたのは、焦げ茶色に近い色合いの独特な服に

身を包み、蜘蛛の髪留めが印象的な金髪の少女だった。

「次に出てきたときは絶対に倒してやる……」

レンゲルの正体だった少女「黒谷ヤマメは神社のある方向を見上げ、  
そう言い残すと、太陽の陽射しが差し込むこの森林の中で瞳を閉じ、  
一時的な休息を取った。

同じくその頃、幻想郷の地下に存在する巨大な屋敷・地霊殿では……

「あ……ものすつごく暇だな。」

地霊殿の床、ただ一人ゴロゴロと横になっている人影。よく見ると  
背中からは翼のようなものが生え、右腕には何やら長い六角形の、  
『制御棒』が装着されている。そんな彼女こそ、地霊殿に住む核融  
合の力を操ることができる地獄鴉・霊鳥路空である。

「うーん、こんな時にお隣がいたらなあ……。でも、今お隣は買い物  
に行っちゃってるし……。仕方ないからその辺でもブラブラしてく  
るかな」

余りにも退屈していた空は、少し地霊殿の周りを回ってみる事にし  
た。空は体をよっこらせと起こし、地霊殿の外へと出た。

（地霊殿・庭）

「でも、外に出たのはいいんだけど…何処をフラフラすればいいのかな。あー、あとお昼は何が食べられるかなあ…」

どうでもいい事を考えながら、適当に辺りを見回しながら庭の中をグルグルと回っていた。

…そんな中、空は見たこともない銀色の箱のような四角い物体が庭に落ちていることに気づいた。

「ん？何だろアレ…」

空はすかさずその銀色の物体の元に近付き、その物体を躊躇うことなく手に取り、ジロジロと観察し始めた。

…その物体は無数のひびや巨大な傷が目立ち、かなり損傷していた。更によく観察してみると、その物体の表面には四角い緑色のレリーフの中に、黄金色をした菱形がレリーフの中心に施されていた。

「うーん…見たこともないけど、コレって何の道具かな？」

とりあえず、空はその銀色の物体を手にとるとポケットの中に『それ』をスッポリ入れた。そして、再び庭をブラブラし始めた…。

第22話「太鼓と剣で蜘蛛退治！うにゅのベルトはボロボロだ！」（後書き）

番外編予告…

「ここが地獄の果て、暗闇の果てか…」

「此処で希望なんか持っても仕方ないんだよね、姉貴…」

…地獄の館・地霊殿。そこに今、完全な地獄へと堕ちた姉妹が現れる…。

「貴方達…、何があったのかはだいたい分かりました。ですが此処は私の館です。好き放題に暴れては困るんですよ」

「面白い格好してるね。あんまり見ないよそんな服装…」

地霊殿の姉妹の言葉が、地獄の姉妹に火をつける。

「…今、私達を笑ったな…？」

「姉貴、地獄に住むこと以上の地獄をこいつらに見せてやるっよ…！」

地獄に住まう姉妹VS地獄へ堕ちた姉妹…。

《CHANGE・PUNCHHOPPER》

《CHANGE・KICKHOPPER》

ある意味、この作品至上最も最悪な闘いが今、始まる…！

近日公開予定！

椀

「あゝ、そろそろ私の出番を…」

ドラス

「…。」

第23話「早朝の攻防戦」妖怪の山」(前書き)

お詫び

今回も少し遅れてしまいました…(汗)  
いろいろ忙しかったので評価・感想の返信も全然できませんでしたが、時間を見つけ次第返信していきたいと思えます。

### 第23話「早朝の攻防戦〜妖怪の山〜」

魔理沙達は人里へ到着し、博麗神社では電王と響鬼の闘いが終わった頃。

二匹の怪物が対峙していた妖怪の山では…、

「グギギギイイイ」

…一匹の怪物が、歓喜の咆哮にも似た勝利の雄叫びを轟かせていた。そして勝利を掴んでいたのは怪物の中でも最高クラスの怪物・ネオ生命体「ドラス」だった。

既に対峙していたピエラワームの姿は見当たらない。俊敏な成虫ワームですら、この怪物には歯が立たなかったということか。

一方、『それ』を茂みの中から見ている椀は、ザビーゼクターを手にもいつでも戦闘に参入できるよう準備していた。

（素早い成虫ワームを相手に、あんなに善戦する奴なんて初めて見た…。）

椀は息を殺し、なるべく気配を抑え、ジッとドラスの行動を観察する。

「グギギイ…」

目標を打ち倒したドラスは河童の住む川のある方向へ顔を向け、動きを止めた。

…その視線の先には、如何にも『何か』があるかのように見えたが…

(…? あつち私達の『集落』や『神社』とは正反対の方向の筈…。  
だとしたら、アイツは一体何を考えて…)

上へ攻め入る気配もなく、箇々からでは何も見えない場所を、ただ  
ジツと見つめているドラスの行動を不審に思った椀は、自らも『千  
里先を見通す程度の能力』を使いドラスの視線の先を見つめた。

…しかし、椀の目には見慣れないものや強力な妖力等、それなりに  
興味を引かれる物は写っていないかった。

一体、この怪物は何を考えているのだろうか…。椀が少々理解に苦  
しんでいたその時、ドラスの行動にやっと変化が訪れた。

「ウグギギギギギイ…」

闘争心の隠った独特な発声…、まるで何かの気配を察知したかのよ  
うに、ドラスは一步後ずさると、引くとゆっくりと視線を椀の潜む  
茂みへと向けた。

(まさか…気付かれた!?)

茂みの外から、真つ赤な瞳が此方を睨む。椀はその眼光に気圧され  
かけるが、執念と集中力で凌ぎきろうとした…その時だった。

「ギギギギギギ…!」

「うわっ!?!」

何の予備動作も無しに、突如ドラスの右肩から青色のレーザー光線  
が発射され、その火力により一瞬にして茂みの草木を焼き尽くした。

…だが。

「つつ…、一歩でも反応が遅れてたら丸焦げだった…!!」

いくら急な不意打ちだったとはいえ、警戒心を強めていた椀は白狼天狗の持つ瞬間走力と反射神経を上手く活用し、茂みが燃やし尽くされる前に茂みから脱出する事に成功していた。

レーザー光線をかわし、パキパキと音をたてて燃え盛る草木と炎をバックに椀はドラスの深紅の瞳を睨み、躊躇いもなくゼクターをザビープレスに装着した。

「…そつちが何を考えてるのは解らないけど、やっぱりお前は今倒しておくべき存在みたいね!」

《HENSHIN》

ゼクターをプレスにセットすると、椀の体をアーマースーツが包み込み、椀は仮面ライダーザビーに変身した。

ザビーに変身した椀は、今まで対峙してきた怪物とは桁違いの強さを誇る『化け物』を眼前に軽く深呼吸をし、吸い込んだばかりの新鮮な空気を体中に浸透させ、取り込んだ酸素を気合いに変換するかのようグツと拳を握り締め、接近戦での構えを取った。

一方のドラスも変身した椀を睨み、ザビーの分析を開始。戦闘力や特殊能力等、有力な情報を集め適切な戦略を練り始めた。

「ギギギギギ…」

(相手の戦闘力がどうだろうと関係ない。敵ならば、全力で排除するまで！)

両者とも拳を構え、臨戦態勢を取りそのまま睨み合いへと移行。すると辺りのざわめきが一瞬にして静まり返り、ただ燃え盛る木々の弾ける音だけが両者の聴覚を刺激する。

そして…焼き尽くされた一本の木が大きな音と共に崩れ落ちた…刹那。

両者は木が焼け崩れたのを合図に、ほぼ同じタイミングで足を前へと力強く踏み込み…

「だあああああッ！」

「グギギギギイッ」

両者は気合いの入った叫び声を轟かせ、互いに組み合うように激突した。

「はああ…！ふっ、はっ、そりゃあっ！」

「ギギギ…グギギッ、ギギッ」

ザビーはマスクドフォームのパワーを活かした右腕によるパンチ攻撃や蹴りを駆使してドラスを攻撃。

一方のドラスもザビーの攻撃に対抗すべく、鋼の拳による攻撃でザビーを攻撃する。

「ギギッ、ギギギギギ」

「やっぱり堅い…っつて、きゃっ！？」

蹴り合い殴り合いは暫く続くかと思われていたが、ドラスは隠し武器Ⅱ伸縮自在の尾を使い、尾を槍のように勢い良く突き出すことで自らに隣接し過ぎていたザビーを弾き飛ばし、再び距離を空けた。

尾はザビーの胸部を貫通せんと言わんばかりの威力で命中したが、マスクドフォーム特有の強固な外殻は傷を付けることすら非常に困難な強度を誇る。幸い装甲が数ミリ程度削られた被害で済み、強固な装甲が椀の命を救った。

「何とか生きてる…。でも、今はそんな事を喜んでる場合じゃない  
」！  
」

ザビーは急いで体を起こし、ドラスとの距離を一気に詰めようと拳を構えながらドラス目掛けて突撃した…その時。

「ギギツ…！」

近付いてくるザビーを前に、この時を待っていたかの様にドラスの右肩が光りだした…。

「うつ…！？だけど！」

しかしザビーは屈せず、青白い光を確認した瞬間ドラスの足元目掛けてダイブ。何とか光線を避けると次にそのままローリングでドラスとの距離を零にまで詰め…

「であああっ！」

ザビーは勢い良く立ち上がり、ドラスの首筋を狙って力強い回し蹴りを叩き込む。

「ギギツ！？」

約9トンの破壊力を誇るキックは見事ねらいを定めていた箇所…首筋へと命中。繰り出した足からは強い衝撃が伝わり、ドラスもその威力を前に二歩ほど後ずさりをした。

「やった…あともう少しで！」

ザビーは勝算が見えたと悟り、再び攻撃態勢に移行しようとしたその時、誰も予想していなかったアクシデントがザビーを襲った…。

今度はドラスがザビーに接近。攻撃可能範囲にまで近付くと右腕に力を込め、その一撃をザビーに叩き込む！

「ガギギギツ！」

「く…、やっぱり来た！？」

ザビーは両腕を盾のようにしてドラスの攻撃を何とか防いだ…かと思われた。

…だが、ドラスのパンチ力は尋常ではない。いくらマスクドフォームで防御力が向上しているザビーでも、『衝撃』まで防ぎきることは不可能だった。ザビーはパンチの衝撃に耐えられず、後方へ数メートルも突き飛ばされてしまった。

「ぐっ！？」

ザビーは背中を地面に強く打ちつける。…その反動で、先程左腕をガードに回してしまったことにより止め具が弱くなっていたザビーブレスが遂にザビーの腕から外れてしまった。

「え…？」

変身ツールが外れてしまい、アーマースーツがパラパラと崩れ、椀の体から剥がれ落ちていく。

「ギギツ、ギギギギギ」

一方のドラスはこの『好機』を逃すつもりは無かった。変身が解けたザビー。生身の椀なら、どんな技でも一撃でトドメが刺せるからだ。今までの中でも、特に不気味に輝くドラスの瞳。激しい音をたてて燃え盛る木々、そして変身解除という致命的な条件。

…正に絶体絶命。

「ギギギギギ…」

…ドラスのあの鳴き声が、死神の囁きすら聴こえる。ドラスの振りかざした右腕が、鎌を掲げた死神の腕に見える。

こんな所で自分は無様に死ぬのか…？

…そんな椀にはお構いなくと言わんばかりに右腕を椀目掛けて振り下ろそうとした…その時！

「やらせるかつ、化け物！」

突如、聞き覚えのある声が死の静寂を断ち切り、その直後に大砲を連続発射した様な巨大な6つの轟音が轟く。

「ガアアアツ!？」

轟音が響いた瞬間、椀の目の前でドラスが苦しみ始めた。そしてドラスは先程の威圧感を自ら打ち砕くかのように膝を地面へ付けた。

…よく見たら、ドラスの背中からは夥しい量の煙が吹き出ており、いかにも『何者』かの攻撃を受けたみたいだった。

そしてその『何者』の正体は、ドラスの遙か後ろ…、椀が少し視線を上げた場所にいた。

「へえ、まさかここでもドンパチやってたとはねえ…」

椀の視線の先にいたのは、6つの御柱を積んだ巨大な注連縄を掲げ、堂々と仁王立ちしている神様。

…それは妖怪の山の民なら知らない者はいない、神社ごとこの山に居座った武勇伝をもつ天の神…。八坂神奈子その人だった。

御柱の砲撃により、ドラスが硬直している隙に神奈子は椀の元へ駆けつけた。

「何故、ここにいます?」

「こっちも少しドンパチやってきてね。その帰り路に奮戦してるお前を見かけたんだよ」

「成る程…。ですが今は、アイツなんとかしなければなりませんね」  
「そうだね。…お前と組んでみるのも悪くないかもねえ」

二人が会話を進める中、ゆっくりではあるが、遂にドラスも立ち上がった。

「ギギ…」

「貴女がいれば心強いです。コイツは今此処で倒しましょう」

「こつちもそのつもりさ。そつちも本気で掛かって貰うよ」

二人はドラスと向き合い、杖は拾い上げたザビーブレスを、神奈子はサイガドライバーを装着した。

「ギギギギギイイイ」

「…今度こそは負けない！」

「コイツでさっきのリベンジを果たすのも…悪くないな！」

『3・1・5・ENTER《STANDING BY》』

二人は睨み付けてくるドラスを睨み返すと、ザビーゼクターとサイガフォンを変身ツールへ装填した！

《HENSHIN》

《COMPLETE》

電子音声が鳴り、椀の体をアーマースーツが、神奈子の体を青いフオトンストリームが走り、両者を仮面ライダーザビーと仮面ライダーサイガに変身させた。

「さあ…、こつちも思う存分派手にやらせて貰うとするか！」

「これで此方は二人…、形勢逆転ね！」

先程のオンバシラキャノンによる攻撃でドラスは損傷している。恐らくこれは一回限りのチャンスなのだろう。叩くなら今しかない。二人はこのスキに打ち倒すべく、拳を握り締め突撃した！

**第23話「早朝の攻防戦〜妖怪の山〜」（後書き）**

番外編は、現在もの凄い勢いで制作中です！何か書くのが凄く楽しいですW

公開予定日は10月中旬です。

## 第24話『セカンド・アタック』（前書き）

今回も遅れてしまい、本当にすみませんでした（汗）

今回、後半の流れと会話がかなりグダグダ感があるので、酷い箇所があれば読みやすいよう修正などをおもいます。

## 第24話『セカンド・アタック』

「さあて、今まで見てきた奴とはだいぶ違うみたいだけれども…。ま、実力は戦ってみりゃ解るものさね！」

「さっきは散々痛めつけてくれましたね…」

二人は変身を完了させると、自分達の居住区を襲った倒すべき敵であるドラスを目掛け、拳を握りしめながら走り出す。ドラスに隣接すると、互いにキックとパンチのラッシュを休むことなくドラスに浴びせる。

「うおおっ！おりゃっ！せえりゃあッ！」

「はっ、せいっ、はあぁっ！」

ザビーとサイガの放つ攻撃は、大砲の連続放火の如くドラスに集中する。サイガはパンチと回転蹴り、ザビーもパンチとキックでひたすらドラスを反撃の隙すら与えずに攻撃する。

…しかし、ただ一方的に攻撃を耐え続ける程ドラスは臆病な怪物ではない。ただひたすら攻撃を凌いでいたドラスも、流石に二人による攻撃を受け続けていた為遂に攻撃モードのスイッチが入った。

「ガアアアアッ！」

今まで防御行動を取っていたドラスが突如攻撃意識を剥き出しにした咆哮を轟かせ、先程の椀との戦いの時、茂みを焼き払った時と同様に、右肩に青白い光が収束されていき、眩しく光り始めた。

「これは…！反撃が来ます！」

「オーケー、分かった！」

ザビーがドラスの異変を察すると、サイガにそれが攻撃時にドラスが取る予備動作であることを知らせる。そして二人はドラスの肩の光が増していくことを確認するとこれ以上の攻撃が危険だと判断し、一時攻撃を止め、ドラスの正面から横転して離脱した。

その瞬間、ドラスの右肩から青いレーザーが放たれた。発射されたレーザーは地面に命中すると、青い光線は紅い炎となり、一瞬で二人が立っていた箇所の植物を焼き尽くした。

「うわっとい…さっきの火災みたいのはこれが原因だったのか。当たったらまず真っ黒焦げじゃ済まないね」

「…相変わらず軽いノリですね…。まあ、さっきの火災の正体はアレなんですけど、少しは緊張感を持つてくださいよ」

「…緊張感？神様にやそんなモン必要ないさ。根性とやる気さえありゃ神様はなんでもできるんだよ！」

「そつえば貴女は神様でしたね。余りにもノリが軽かったので、すっかり忘れてましたよ…！」

ドラスの攻撃を回避した二人はその場で立ち上がり、ザビーはドラスを睨みながら両手の拳を握りしめ、サイガはフライングアタッカーの操縦桿を手に掛け、超低空を滑空しながらドラスに接近する。超高速で近付いてくるサイガを前に、ドラスは両腕を閉じ防御の体

制を取る。

「ハッ、そんな真似が通じるかつ！」

サイガは凄まじい煙を巻き上げながら地面スレスレを超高速で飛行するフライングアタッカーのスピードを下げることなく、その出力を生かした渾身の体当たりをドラス目掛けて放つ！

「うっおらあっ！」

「ギッ、ギギギッ…！」

サイガの電光石火は見事ドラスに命中した。ドラスはサイガの攻撃を両手で受け止めるも、やはり高出力であるフライングアタッカーのスピードに乗ったサイガの体当たりの威力は尋常ではない。ドラスは踏ん張ろうと地面を脚で強く踏みしめようとするも、受けた衝撃が強すぎたため脚が地面から離れてしまい、そのままはね飛ばされてしまった。

「ギイイイイ！？」

「おっと、まだ逃がすか！」

サイガも再び操縦桿を握り、今の攻撃でドラスが飛ばされた方向に向かってフライングアタッカーを動かした。

「ギギギッ！」

跳ね飛ばされたドラスは、再び迫り来るブースター音を感知し立ち上がる。賺さず立ち上がると、まず視界に飛び込んできたのは、先

程と同じ様に低空を超音スピードで飛行しながら迫り来るサイガの姿だが、今回は距離が離れていたため近づかれる前にサイガの技やスベックを解析する事が出来る。ドラスはそう判断すると、先程受けたダメージを分析し、そしてサイガのスピードと衝撃時の物理ダメージ等を短い時間の中で纏め、この状況の中、最適な防御行動を選択する。

「ギガガガガッ…」

ザビーに続き、サイガの分析も完了させる。そして予測した攻撃に備え、それに合った適切な防御行動をとる。  
…後は、相手の攻撃を防ぐのみ。

「懲りないね、また受け止めるつもりかい！」

サイガもドラスの正面を取ることに成功し、今度は右足をドラスの胸部めがけて突き出し、一気にフライングアタッカーの出力を最大にする。そして簡易型コバルトスマッシュとも言えるキックをドラスの胸部に勢い良く叩き込んだ…

「グギギギギイ…」

「…なっ!？」

…が、先程の攻撃を分析されてしまい対処方を編み出されてしまったためか、フライングアタッカーの出力を利用したキックはドラスに直撃するも、大したダメージは与えられずに受け止められてしまった。

「…冗談だろう！？さつきは効いてたのに…こんな簡単に！」

「グギギイツ…」

ドラスはサイガを受け止めると、強靱な腕力で硬直しているサイガの胴体を掴み、ドラスの予想以上の防御力の高さを目の当たりにして唾然と立ち尽くしていたザビーの方へと軽々と放り投げた。

「ガアアアアッ！！！」

「どはあぁっ！？？」

「きゃッ?!！」

放り投げられたサイガはザビーに命中。反動でそのまま二人は地面にドサツと崩れ落ちた…

が、いくらドラスが強力だとはいえ、流石にこの程度でめげる二人ではなかった。まるで自分達が眼中に無いと主張しているようなドラスの行動に、遂に一応は『神』である神奈子ことサイガの堪忍袋が切れ…

「くっそ、あんの野郎ッ！」

サイガはフライングアタッカーの操縦桿を引き抜き、倒れ込んでいるザビーには興味を示さずに飛び起きる。そしてミッションメモリーを操縦桿トンファアエッジに装填。更にはサイガフォンを開き、ENTERキーに手を掛けた。

「いつまでも神様を舐めるんじゃないよ！」

《EXCEED CHARGE》

キーを押し、チャージ開始の電子音が鳴るとトンファーエッジの刃が青く光り出す。そして刀身全てが青く染まると、サイガはドラスの懐に狙いを定めて走り出した！

「ううおおおおおッ！！」

「ギ…？」

ドラスがトンファーエッジの分析を開始する前にサイガはあつという間にドラスと隣接し、両手に構えた青く光り輝くトンファーエッジで、全く容赦の無い動きでドラスの胴体に斬り掛かる！

「おらッ！そら、そら、そら、そらッ！」

「ギッ…ギッ、ギギギッ！？」

サイガの攻撃は頑丈なドラスの外殻に弾かれるも、それを無視した激しい乱舞攻撃の前にドラスも怯んでいた。トンファーエッジの青い刀身は、何重にも重なった直線と曲線の軌跡をドラスの胴体に描く。

「グ…グギ…」

その凄まじい連続攻撃の前に、遂にドラスはぎこちない足取りで後ずさりをした。攻撃を受けた胴体からは煙が立ち、無数の切り傷が確認できる。

倒すまでには至らなかったが、ようやくドラスが怯んだところを確

認すると、サイガはミッションメモリーをサイガフォンにセットし、トンファーエッジもフライングアタッカーに格納した。

…その時、今まで空気がだったザビーが上から何かの気配を察知した。

「気をつけて！上から何か来ます！」

「チツ…、よりによってこんな時にかい…！」

ザビーの注意を聞くと、舌打ちをしながら正面にいるドラスから頭上へと視点を変える。サイガとザビーが見上げた先にいたのは…

「ギチギチギチギチギチツ…！」

交戦していた3人の頭上から、新たに4匹のサナギ体ワームが飛び降りてきた。

「ワーム…最近多いんですね…！」

「くそっ、こんな時に雑魚のお出ましか！」

「ギチギチギチ…」

4匹のワームは地上へ着地すると、ザビー、サイガ、ドラスを睨み付けた。

ワームは3人を攻撃対象と認識すると、鎌状に変化した前足を降りかぶる。

「どっちら、やる気みたいですよ？」

「わかってるさ。面倒なことになったね…！」

ザビーとサイガは面倒臭そうにジロツとワームを睨みつけると、一旦距離を取り、視線をドラスのいる方向に向ける。

「こいつを入れて5人も相手しなきゃいけないのかい？正直なかなか気が立たないね」

「ですが、叩くなら今が絶好のチャンスですよ。ワームなら簡単に倒せますが、この怪人に止めを刺すなら傷ついている今しかありません」

「だよねえ…。なら、まずはコイツから畳んじやおうか。雑魚の相手は後でもできるからね」

「私もそれに賛成します。」

二人はワームに背を向けると、サイガはフライングアタッカーの操縦桿をトンファアエッジへと変形させ、ザビーはゼクターの羽を起こし、ゼクターを回転させマスキドフォームの装甲を廃棄し、再びドラスと向かい合う。

《CAST-OFF CHANGE-WASP》

「この際、早く終わらせましょう！」

電子音とともに装甲が弾け飛び、ザビーはライダーフォームへと姿を変える。それを合図に2人は現在のドラスの急所である胸部の傷口に狙いを定め、互いの必殺技を発動させた。

「さあ、これで最期にしましょうー！」

《RIDER-STING》

「こつちも、あとは一撃かますだけさ」

《EXCEED CHARGE》

サイガのトンファーエッジの刃は青く染まり、ザビーのゼクターはタキオン粒子がチャージされる。それを見ていたドラスは今の状況と相手の技の威力を分析し、2体による同時攻撃のダメージは、ドラスの予想していたダメージ値を遙かに上回っており、現在ダメージを受けた体では防ごうもない為、逃げた方が無難であるという結果が出た。

「ギギ…」

ドラスはサイガとザビーを睨みながら小さく呟くと、ドラスは余力を用いて、何の予備動作もなしに姿を消し、一瞬にして妖怪の山から離脱した。

「なっ…消えた!?!」

「まさか…あいつ、瞬間移動まで使えたなんて!?!」

2人はやっとの思いでドラスを追い詰めるも、そのドラスが突如視界から消えた事に驚きを隠せなかった。

「…一匹減ったのはいいけど、すごく後味の悪い結果になったね…」

「私もまさか、逃げるなんて思いもしなかった…。」

ザビーは行方を眩ましたドラスを能力で散策するも、それらしき姿

は何処を探しても見つからなかった。  
散々自分達を痛みつけた相手を逃したことに、2人は少し苛立ちを  
覚え気を落とすが、もう一つの標的であるワームは、既にサイガと  
ザビーに襲いかかるうとしていた。

「ギチギチギチギチギチ…」

「そっいや、まだこいつらが残ってましたね…」

「今の私は機嫌が悪いつていうのに、よくもまあ私の前に立つ勇氣  
があるね」

ザビーとサイガは再びトンファーエッジとザビーゼクターを構え、  
臨戦態勢を取る。一方のワームも体を丸くして身構えていた。

…そして、ザビーとサイガがワームに先制攻撃を仕掛けようとした  
時だった！

「ハアアアアッ！」

2人がワームに対し攻撃を仕掛けようとした瞬間、突如黒いライダー  
が2人を間を抜けるように現れ、ワーム目掛けて襲い掛かった！

「何だい？また新手が出てきたのかい…って、よくみたらあれは怪  
人というより…」

「…黒いライダーなんて…私達の仲間にはいたかな…？」

サイガとザビーを抜けた黒いライダーはカブトクナイガン・クナイ

モードを手にクロックアップを使用した。

「クロック…アップ…！」

《CLOCK・UP》

黒いライダーがクロックアップを使用した瞬間、黒いライダーのスピードが更に加速する。2人が通常世界で影を目で追う中、黒いライダーは一瞬の内に4匹のワームを切り刻んだ！

「なっ、あいつ…一瞬でワームを倒した！？」

「…正確には、クロックアップという高速移動能力を使ってワームを倒したんです。」

サイガは突如ワームが目の前で爆散したことに驚きを隠せなかったが、同じクロックアップシステムを搭載したザビーは動揺することはなかった。

《CLOCK・OVER》

クロックアップの効果が切れ、黒いライダーはようやく2人の目にその姿をハッキリと見せた…が、ザビーの目に映っていたそのライダーの姿は…

「……黒い……先輩……？」

## 第24話『セカンド・アタック』（後書き）

今回、新たに登場したライダー

仮面ライダーダークカブト

登場作品 仮面ライダーカブト

ドレスを撃退したザビーとサイガの前に現れたワーム達を一掃したライダー。

変身者は現在の段階では不明。

外見はカブトと瓜二つのデザインだが、艶のない深い黒が基本色で、目の色が黄色。また、胸部装甲には電子基盤を思わせるような謎の模様がある。

ワームを倒したとはいえ、情報があまりにも少なすぎるため結局は怪人サイドのライダーなのか、幻想郷サイドのライダーなのかも不明な存在。

## 第25話「寺子屋捜査網」(前書き)

今回も遅れてしまいました…

読者の皆様、本当に申し訳ありませんでした(大汗)

10月は中頃まで忙しいスケジュールが多いので、二週間前後の更新となってしまうそうです(汗)

今回は戦闘シーンがありませんが、話は少し長めです。

## 第25話「寺子屋捜査網」

妖怪の山では、カブトに酷似した新たなライダーが登場した中。

魔理沙は人里へ到着して早々、自分の操るサイドバツシャーで上白沢慧音が開いている寺子屋へ突っ込むという失態を犯し、寺子屋の教室の壁を破壊した上に慧音と阿求の朝食までも台無しにしてしまった。

「お前達という奴は…！」

教室の壁を貫いたサイドバツシャーの上で硬直している二人に向かい、慧音は震えた声で嘆きながら怒りの籠もった目を光らせ、魔理沙と霊夢を睨み付けた。

その視線が発せられた瞬間、慧音の目を直視していた二人はまるで一瞬で凍り付いたかの様に目を丸くしながら全く動かなくなつた、その光景を言葉にするとすれば正に『蛇に睨まれた蛙』と例えるのに相応しい。

「や、やばいぜ…。こんな時、お前だつたらどうするんだ…？」

「私を知るわけ無いじゃない！だいたいあんたがあの際に説明書をちゃんと読んでたらこんな事には…」

魔理沙はダラダラと冷や汗を流し、少しでもこの慧音の怒りに満ちた静寂から生まれる精神的呪縛を和らげようと霊夢に問いかけるも、運が悪かったことに霊夢は気が立っていたため、苛立った口調で魔理沙を怒鳴る。

しかし霊夢が怒鳴り終える前に、場の空気を完全に無視している二人の会話を聴いていた慧音の怒りが頂点に達し…

「お前達、いい加減にしないか！」

「ビクッ!?!」

慧音の口から湯が飛び、霊夢よりも気迫のある声で二人の耳に突き刺さり、強く響いた。二人は慧音の湯が飛んだ瞬間、電池が切れたように再び黙り込んだ。

そして霊夢と魔理沙が完全に沈黙したところを見ると、慧音はふう、と大きな溜息をつく、落ち着いた雰囲気を取り戻し再び口を開いた。

「どちらが悪いにせよ、此処がこんな状態にまで滅茶苦茶にされたら授業なんてとても出来はしない。ちゃんと責任は取って貰おうか」

「責任って言われても、もう夜は開けちまってるぜ。今から直そうにも、授業には間に合いそうにもないぜ…」

慧音の問いかけに、魔理沙は少し参ったような口調で返答する。いくら彼女が寺子屋を破壊した犯人とは言え、今は既に太陽が顔を出している時間だ。もしも今修理に取り組もうとしても、教室一つが

ほぼ全壊の状態に等しく生徒達の通学時間までに直せる確率は非常に低い。

すると、今度は今まで3人の影だった阿求が慧音に案を出した。

「確かに此処まで壊れてしまつては、授業開始までに直すには難しいですよ。ここは急遽通学時間を遅らせるなどの対処をするべきだと思いますが」

「しかし…、それだと連絡網や配布物を書く時間と届ける時間が…」  
休むわけにもいかないため、阿求の案はごもつともだったが、数十枚にも渡る連絡網や学級配布物を今から書き上げるにもかなりの時間を浪費する。

予想もしなかつた事態に、慧音は内心頭を抱えなくなるほど思い悩んでいた。

だが、それでも慧音はどうにかしようと思ひ続ける中…

『ブオオオオオオ…』

「…あれ？何か聞こえない？」

早朝の人里に突如、魔理沙のサイドバツシャー、慧音のオートバジーンとも違うバイクのエンジン音が響いた。

そのエンジン音は、寺子屋の中にいる慧音達の耳にも聞こえていた。

「だんだん此方に近付いて来ますよ」

「私と慧音の乗り物はここにあるから、少なくとも他の奴が乗ってるみたいだな」

徐々に近づいてくるエンジン音。気になった魔理沙達も、寺子屋の窓から音のする場所を覗き込んだ。

そこには、異なる二台のバイクが朝日を背に、里の通りを抜けながら此方に迫っていた。

「おい、二台ともこっちに向かってくるぜ」

「二つとも見たこともない奴ね。誰が乗ってるのかしら？」

どちらのバイクも、霊夢と魔理沙の知らない型のバイクだった。逆光のためライダーの姿までは分からないが、徐々に此方へ近づいて来るにつれて明確になっていく。しかし、場所が悪く輪郭しか確認できず、ただ黒い影が映っているだけだった。

「そろそろ来るな。ちょいと外に出てみようぜ」

「おい！まだ話は終わって…」

慧音は颯爽と玄関へ向かう魔理沙を呼び止めようとしたが、魔理沙は慧音の言葉を聴く様子を見せず、すぐさま靴を履いて出る準備をした。それを見た霊夢達も魔理沙を追うように外へ向かった。

「好都合だぜ。私はさっさと帰りたいし、教室の修理もあの二人に

押しつけてやれば……」

魔理沙は玄関の扉に手を掛け、勢い良く扉が開き寺子屋の外へ足を踏み入れた。

「おっ、来たな……」

…魔理沙が外に出てからすぐ、二台のバイクは寺子屋へ辿り着き、敷地内へと踏み込みエンジンを掛けたまま庭へ停車した。

「どんな奴が乗って……って、こいつらは！」

魔理沙は停車したバイクとライダーを見た瞬間、口から驚きの台詞がこぼれた。二台のうち、一台は全体が青いバイク「ガタツクエクステンダー」、そしてもう一台はカウルにトンボのマークが刻まれている銀色のバイク「マシンゼクトロン」。そしてその二台に乗っていたのは……

「な、なんであんたが此処にいるの!？」

「まあまあリグルちゃん、そんな大袈裟にならないで」

魔理沙が驚いたのは無理もない。停車した二台のバイク・ガタツクエクステンダーにはガタツクことリグル、ゼクトロンにはドレイクこと大妖精が乗っていたのだ。

バイクに乗っていた2人は魔理沙を見つけると、バイクから降り魔理沙へ駆け寄った。

「一体何の用で此処に来たの？」

「あ、あゝ…。最初は慧音に呼ばれてきたんだけどな、ちょっとへマしちやって色々あったんだ…」

リグルの質問に、魔理沙は頭をポリポリと掻きながら寺子屋の方へ指を指した。

リグルと大妖精は指の向いている方へ顔を向けると、寺子屋の壁を突き破ったかのように刺さっているサイドバツシャーと、それを中心に一部分が完全な瓦礫と化し、見るにも無惨な寺子屋の姿が2人の目に衝撃を与えた。

「う…：うわー…：」

「ひ、酷い…：」

2人はその寺子屋を見て、リグルと大妖精は目を点にして愕然とした。その一方で、魔理沙に続き霊夢、慧音、阿求の3人も寺子屋から出てきた。

「成る程、さっきの正体はこいつらだったのね」

「確かあの2人は慧音さんの教え子でした…：よね？私もよく氷精と宵闇の妖怪との4人組で遊んでいるところを見かけたりしますが…」

「しかし、あの2人だけとは珍しいな。しかも授業を始める前からこんな早く来るなんて今までにもなかった」

「あの奇怪な乗り物についての突っ込みはしないの？私はないけど」

外の新鮮な空気を吸ったためか、先程の空気が一転し、落ち着いた3人は呑気に会話をしながら魔理沙、リグル、大妖精の方向に向かって歩きだした。

「あ、リグルちゃん。先生がこっちに来るよ」

「先生が？…あっ！まずは『さっきの事』を先生に話さなきゃ！」

「あ、おい！『さっきの事』って何なんだ!？」

一方のリグルは大妖精から慧音が寺子屋から出てきたと聞いた瞬間、何やら表情を変えて彼女の元へ駆け出した。勿論、魔理沙の問いに応える暇もなく。

「先生…あ、あの…！少し聴きたいことが…」

「ああ、おはよう。こんな朝早くからどうした？」

いきなり走ったためか、リグルは軽い息切れを起こし、何やら思い悩んでいるかの様な表情で慧音の顔を見上げると、再び口を動かして話を続けた。

「…その…、チルノちゃんと、ルーミアちゃんを…先生は…見かけませんでしたか…？」

「いつも一緒にいるあの2人か？何だ、はぐれたりでもしたのか？」

「あの…、いつものように霧の湖に4人で遊んでたら、いきなりワームが出てきて…」

「ワーム…!？」

リグルの口からワームという単語が出た瞬間、慧音は表情を一転させリグルの両肩を掴み、彼女の目を直視しながら焦りを見せている口調で話し掛けた。

ライダーにとっては駆除の対象でしかないワームといえども、一般の人間や低級妖怪にとっては恐ろしく脅威な存在となる。それを熟知している慧音も、教師として教え子が危険な目にあつたとなれば落ち着いているわけにもいかない。

「そ、それで…どうしたんだ!？」

「ワームは…私と大ちゃんの2人で何とか倒しましたが、ワームから逃げたチルノちゃんとルーミアちゃんがまだ…」

「…寺子屋の次は、あの子達が…」

只でさえ先程頭を抱えてしまうくらいの事件が発生したばかりだというのに、今度は生徒の中から行方不明者も出てしまった事をリグルから聴き、自分にとってこんなにも運が悪くなってしまった今日という今日を悔やみ、慧音は心の奥で自分の不幸を何度も、何度も踏みつぶすようにして呪う。

その感情が行動に出ないよう、湧き上がってくるストレスを気合いや精神力で押し殺すようにして必死に押さえ込む。

…だが、いつまでもこうやって硬直しているのは時間の無駄だ。寺子屋は後でどうにでもなるが、今は大事な教え子たちの命にも関わ  
る危険がある。

慧音は子供達の安否を先に確認しておく必要がある、と判断すると、  
不安や苛立ちを押し切ってリグルから事情を詳しく聞き取る。

「…それで、2人がどこかへ行ってしまったてからどれくらい時間は  
経ってるんだ？」

「大体で考えると、太陽が昇る少し前…ですね…」

(…成る程、太陽が昇る前となると…。私が阿求殿とミラーワール  
ドの調査をしていた頃か…?)

話を頭の中で纏め、2人が消えた時間帯とその時自分が何をしてい  
たかを慧音はその情報と記憶を繋ぎ、自分が阿求とミラーワールド  
を探索していた時間帯と推測する。

「それなら、まだ湖の近くににいる可能性も無い訳じゃあないな…」

だいたいこの事情とキーワードを聞き、慧音は消えた2人の安否を確  
かめる為に、今からでも捜査に向かいたい所だが、何せまだ寺子屋  
の件もあり、このまま慧音がリグル、大妖精と共に2人を捜しに行  
ってしまうと、残るは霊夢、阿求、魔理沙の問題の起こりそうな三  
人だけになってしまう。

(私が行くわけにもいかないから…。仕方ない、2人の捜査はこ

の中の誰かに任せるしか方法はないか…)

慧音は自分の代わりに捜査へ適している人物を、残った3人の中から選ぶことにした。

まずは阿求。彼女は能力が優れているが、まだ幼すぎる為強力な疑似ライダーに変身できても彼女自体は非戦闘員であるため、危険な目には遭わせられない。次に魔理沙。教室を破壊した彼女の性格から予想して捜しに行くと思わせかけて逃げ出しそうなので見張っておかなくてはならない。

これで3人中、2人が除外された。

…となると、残った人物は1人しか居ない。

「2人共、先生は生憎これから寺子屋の改修について考えなければならぬから、申し訳ないが一緒に2人を捜すことは出来そうにもない。ただ…」

「ただ…何ですか?」

そこまで話すと慧音は途中で話を区切り、暇そうにしている霊夢へ視線を向け、彼女の顔を見つめた。

すると霊夢も慧音の視線をすぐさま察知し、慧音の方へ振り向き彼女の目を、細た目でジトーツと見つめながら確認をとった。

「ねえ…、もしかすると私に行けとか言うんじゃないでしょうね」

「…少々言いづらいんだが、その考え通りの考えだ」

慧音はそう言うと、霊夢は『やりたくない』と意味を込めた大きな溜息をつく。しかし、更には2人のやりとりを見ていた他の4人も視線を霊夢に向けていた。

面倒臭がりな性格で知られる霊夢としてこの注目は大変迷惑なモノだったが、戦闘回数が少なく体力を温存している上、彼女の持つラルクのスペックも高い。

それに、これほどの注目を受けてしまつては、いくら霊夢とはいえキツパリと断るわけにもいくまい。

「な、何で私があ…」

正直な所内心では今にも逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。だが…

「頼む。もしも2人が無事に見つかったら、私が其方の神社へ行つてお賽銭を入れておくから…」

生徒を思つ慧音が発した言葉が、霊夢のスイッチを切り替えた。

「賽…、銭…?」

霊夢は『賽銭』という単語を慧音の口から確かに聞くと、今まで彼女の体中から発せられていた

怠慢なオーラが一瞬にして消え去り、何やら『欲』の見える強いオーラが霊夢の体から放たれた。

「今、賽銭を入れるって言ったわね…?」

「ああ…、それがどうかしたのか?しかし何でいきなりそんな…」

「とりあえず私の役割は、要するにどっか行つた2人を捜して連れ戻せばいいんでしょう?...この私に任せなさい!」

「あ、ああ...、助かる。だが...」

「二言は無いわ!任せておきなさいって!」

霊夢は慧音の背中をパンパンと叩き、先程とは全然違うテンションで2人の捜査を請け負つた。

しかし、慧音は霊夢の態度の変化を怪しげに感じ、彼女の顔をチラリと覗いた。すると慧音の目に飛び込んできたのは、目をギラリと光らせながら不気味な笑みを浮かべている霊夢の姿だつた。

(...本当に大丈夫なんだろうか...?)

少し不安があるものの、博麗の巫女である博麗霊夢は自由の利かない今の慧音達にとっては貴重な戦力だ。

「よし、これで人員は揃つたな。...時間がない。直ぐに湖へ向かつてくれ」

慧音がリグル、大妖精、霊夢にそう告げると、リグルはガタツクエクステンダーに、大妖精はゼクトロンに乗り里を出る準備をした。しかし、霊夢は自分のバイクを所有していないため、移動の際にはやはり飛んで移動する。かと思いきや...

「おい霊夢!お前ちゃんと『ソレ』動かせるのか!？」

「だから今、説明書を読んでるじゃない!えーと、ここで加速、こ

ここで止まる…」

霊夢はどういう訳か、いつの間にか魔理沙のサイドバツシャーに跨り、その手に説明書を手に取りそれを読んでいた。

「あの…、そろそろ行きませんか？」

「仕方ない、早く来ないと置いてくよ！」

リグルと大妖精は、既にバイクのエンジンを動かし、いつでも出られる状態になっていた。

「もう此処で読んでる時間はないようね。少し説明書借りるわよ！」

「え？あ…おい！」

だが、霊夢は完全に自分の世界に入り込んでしまっており、魔理沙の話の聞く様子も見せず、サイドバツシャーのアクセルを力強く踏むと、後輪が砂埃を上げながら徐々に加速していき、寺子屋の庭の門から勢い良く飛び出した。

「さあ、巫女も準備はできたっばいね」

「じゃあ…、私たちも行こう」

それを見たりグルと大妖精は、ガタツクエクステンダーとゼクトロンのアクセルを踏み込み、霊夢のサイドバツシャーを追うようにして庭から飛び出た。

(…さあ待っていなさい、お賽せえええんツ！…！)

**東方戦仮面 特別番外編第1弾「地獄の決戦 地霊殿の姉妹VSやさぐれ姉妹」**

またしても更新が非常に遅れてしまいました(汗)

元は一話完結のつもりでしたが、更新の停滞に総合文字数が結構長くなってしまいましたので、分担しての投稿という形にさせてもらいました。

なお、今回はタイトルに反し古明地姉妹は登場しません(汗)

東方戦仮面 特別番外編第1弾「地獄の決戦 地霊殿の姉妹VSやさぐれ姉妹」

この物語は、『仮面ライダー』の力を使い地霊殿に住まう妖怪の姉妹と地獄を求める神の姉妹の戦いを描く、本編と沿った展開で送るストーリーである。

地底の世界で『本当の地獄』を支配するのはどちらか…。

チャプター1

『地獄への道』

博麗神社に存在する、地獄へと繋がっている奇妙な大穴。その大穴を降り、ずっと奥へ向かうと、地獄に聳える屋敷『地霊殿』がある。

そして、地獄という名の地底の先にある地霊殿を目指し、2人の神様が旧都を歩んでいた…。

「本当にこんな所へ来るなんて、情けないほど無残な存在になったモンね、私達は」

「でも姉貴、とうとう私達は地獄へ来たんだ。此処が地獄なら、もうこれ以上の地獄は無いかもしれないしね」

八百万の神、秋静葉と秋穰子。

元々は幻想郷の秋を司る明るく活発的な性格だったが、ホッパーゼクターを手にサイガ・王蛇・サソードと戦って以降突如性格が豹変、服装も姉妹揃ってオレンジ色の秋らしい衣装から黒いボロボロの上着に黒いジーンズと随分やさぐれた衣装に変え、髪留めまで外し以前の明るさなど微塵もないネガティブな容姿・性格になっていた。

「本当の地獄は、まだ先か…」

旧都をザクザクと歩く静葉は、視線の先をジッと見つめて呟く。一方の穰子は今まで目にしたことなかった地底世界に興味を持ち、周囲を見渡していた。

旧都の民達は酒を呑み交わしたり賑やかにやっている。しかし、一部の民も自分達にとって見慣れない八百万の神にも興味を抱き、静葉達を見ていた。

「…姉貴、いろいろ周りに見られてるけど」

「注目されてるとでも言うか？…ハッ、どうせ私達なんか…」

周りを気にする穰子に対し、静葉はいたって冷静な態度で周囲の反応に対応する。そしてそのまま二人は、暫く旧都の歩道を淡々と歩き続けた。

すると…

「もしかすつとあんた達かい？地上から来た余所者つてのは」

静葉と穰子の眼前から、いきなり二人を呼ぶ声が大声で聞こえた。その突如、二人を食い止めるかのように一人の人影が二人の道を塞ぐかのように現れた。

二人の前に現れたのは、長い金髪に赤い一本角、そして地味な上着に反し色彩が派手なロングスカートを身につけている女性だった。その女性の名は、嘗て地上で『鬼の四天王』の一人として名を轟かせていた怪力乱心の鬼、星熊勇儀。

「…地底の奴か？私達に何の用だ」

「悪いけど、邪魔をするなら容赦はしないよ…？」

いきなり現れた勇儀の前に、静葉と穰子は彼女を睨み付けながら臨戦体制を取る。

「まあまあ、そう身構えるなって。私は忠告をしに来たただだからさ」

「忠告だって？」

静葉の返答に頷く勇儀は片手に持った皿に注がれた酒をグイッと飲み、再び二人に視線を向けて口を開いた。

「この先には地上の輩が出入りするにやちと厳しい屋敷があつてね。悪いことは言わない。痛い目を見る前に引き返すんだね」

「へえ。要するにこの先が『地獄』だということをやわざわざ私達に教えてくれた訳…」

しかし二人は鬼からの警告を実行しようとはせず小さな笑みを表情に浮かべ、この場を引くどころか勇儀に大きく近づき、彼女の耳元

で小さな声で呟く。

「悪いけど、私達の狙いはその『地獄』にある。この先にそれがあるなら私達は足を止めることはない」

「ここまで来て、収穫無しは流石に虚しいからね。なんならお前も本当の地獄へ堕ちるか？」

そう言い残すと、静葉と穰子は特に絡む様子も見せず、勇儀を通過し、彼女から聞いた『屋敷』を指して一本道を再び歩み始めようとした。矢先。

「待ちな。そんなにあの地獄の屋敷・地霊殿にあんたらは用があるのかい？……もしそうなら、私があんたらの力がこの先を歩むに相応しいか見極めてやるよ」

通り過ぎた二人を背に、勇儀は少し喧嘩口調で背後にいる静葉と穰子に告げる。それは紛れもない闘いの申しでもある。

二人はゆっくりと後ろを振り向き勇儀を睨み付ける。希望の欠片もない冷たい眼光には決して拒否や遠慮などの感情は感じられず、ただ凍えるように激しい敵意と闘志のみが宿っているかに見えた。

「やれやれ、結構好戦的な輩だね。まあ、そうでなくちゃ面白味が無いね！」

勇儀も戦う気になった二人の元へ振り向き、細い見た目とは裏腹に恐ろしい力を秘めている腕を大きく振りかざした。

「面白いか?…ならお前も地獄に墮としてやるとするか」

「お前には私たちが今まで味わってきた地獄の片鱗を見せてやる…」

静葉と穰子も、腰に巻き付けられたZECTバツクルのスイッチを押し、バツクル中央のロゴ部分を展開する。すると二機のホッパーゼクターが旧都の道を飛び跳ねながら現れ、二人の手元に飛び込んだ。

「それは、今流行りの道具か何かかい?まあ、私にやそんなおもちゃはいらないけどね」

「随分と強気だね。ますますその心を折りたくなってくる」

《HENSHIN》

《HENSHIN》

この台詞から察するに、勇儀は『わざと仮面ライダーに変身しないで静葉達と戦う』又は『現段階では変身に用いる道具を所持していない』と考えることが出来る。しかし静葉と穰子は何の躊躇いもなくZECTバツクルにホッパーゼクターをセットした。

《CHANGE - PUNCH HOPPER》

《CHANGE - KICK HOPPER》

勇儀の目の前で『仮面ライダーパンチホッパー』と『仮面ライダーキックホッパー』へ姿を変えた秋姉妹。しかし、勇儀はそんな二人

を目の当たりにしたにも関わらず、驚きを表すことはなかった。

「ほお、そんな感じに姿が変わるのか。じゃあ、準備が出来たみたいだから始めるとするか！」

「面白い。私達に勝てるつもりか!？」

「素手で挑むことは評価するわ。だけど簡単に倒せるほど私達は甘くない……」

チャプター2

『最凶のライダー・浅倉威の復活』

その頃、場所は離れ紅魔館。

先ほどのサイガとの戦いで無茶な動きをした王蛇「パチュリーは、小悪魔により大図書館へ運ばれ、寝たきり状態になっていた。

「こんなに反動が来るなんて…、予想できなかった自分が憎いわ……」

「まあまあ、ゆっくりしていれば治りますよ」

図書館の中、小悪魔は何やらよく分からない緑色の液体を魔導書らしき書物を読みながら制作し、パチュリーは痛む体を動かす事が出来ず、横になったままブツブツと呟いていた。

「あと少しで完成します。それまで安静にしてくださいね」

「そんな事は分かってるわ。それにしても、自分が少し情けなくな

ってきた…」

小悪魔はそう言うと、地面に魔法陣を描き、ブツブツと何やらよく分からない言葉を小声で唱え始めた。すると、先程までは緑色だった液体が徐々に鮮やかな黄色へ変色していく。

…どうやら小悪魔が作っているのは、肉体過労に効果のある薬らしい。魔法陣や呪文らしき言葉を発している辺りから察すると、この薬は魔力を糧にするみたいだ。

「ふう、第二液がこれで完成…。あとはこの第一液と混ぜれば…」

小悪魔はたった今完成した液体を、既に完成していた紫色の奇妙な液体の入ったビンに注ぎ、細長いガラス棒を使ってかき混ぜる。すると今度は二つの液体が混ぜ合わさり、容器の中に入った液体は紅く染まっていく。

そして液体が完全な真紅に染まると、小悪魔はその液体の入った容器を横たわっているパチュリーに渡した。

「たった今完成しました。さあパチュリー様、グイッと呑んじやつてください」

「…ありがとう。じゃあ、いただくわ」

パチュリーは小悪魔から薬を受け取ると、そのままゴクゴクと薬を飲み始めた。やはり味は悪かったのか口に含んだ瞬間少し表情が歪んだが、ビンの中の薬を一滴も残さずに飲み干すと、薬の効果は早々現れた。

「…あら？足を動かしても、痛くない…」

「もう効き始めたんですか？」

先程まで自分の体を蝕んでいた激痛は、神経そのものを抜け道にするかのようにどんどん体から抜け出していく。最初は足の痛みが抜け、次に胴体、腕、頭と次々と痛みと披露が退いていく。

そしてパチユリーは薬を飲んで二分も経たないうちに、面白いぐらいに体が動くようになったことを実感できる位に回復した。

「助かったわ。これでやっと…」

しかし喜んでいるのも束の間、この様に早く効果の出る薬には強力な『副作用』が付きものである。

パチユリーはその場で立ち上がろうとすると、今度は激しい目眩が彼女を襲う。

「え…？今度は何…？」

「どっかなされましたか？」

目眩は徐々に強くなっていき、同時に睡魔にも似た感覚に襲われる。この『副作用』により少しずつ自我を奪われていく中、遂にパチユリーは立ったままの体制を維持できなくなり、糸の切れた操り人形のようにドサリと倒れ込んだ。

「う、うう…っ…」

「え…嘘！？パチユリー様！！」

小悪魔が気付いたときには既にパチユリーは気を失い、ピクリとも動かなくなっていた。小悪魔は先程の魔導書を読み直し、薬の製作

工程を読み直す。すると、一つ読み落としていた場所があった所を偶然発見したのだ。

「…『この薬は、他の精神体の力を利用し、自らの体と同調させる事で肉体疲労を抑える薬』ですって…?」

その箇所を読み、小悪魔はパチュリーが倒れた原因がある程度理解できた。彼女が真つ先に思いついた結論の一つは、

『何か強力な精神がパチュリーの体に憑依し、彼女の精神はその精神体の力に負け、自我を保てなくなった』というものだった。

小悪魔はその結論を確信すると、パチュリーの服や体中をゴソゴソ探り、この精神体の『本体』を探り出した。

その時、小悪魔はパチュリーの懐から紫色の四角いカードケースを取り出し、手に取った。

それは紛れもなく『仮面ライダー王蛇』のデッキケースであった。

「もしかして、これが原因かも…ツ!？」

小悪魔はそのままデッキケースを持ち出そうとすると、突如小悪魔は何者かに右足を強く掴まれる感覚に襲われた。

恐る恐る、ゆつくりと足元を確認する。そこにいたのは鋭い目つきで小悪魔を睨み、ガツシリと彼女の足を掴んでいたパチュリーだった。

「何だお前は…。それを何処へ持っていくつもりだ…？」

「え…パチュリー…様…？」

突然目覚めたパチュリーはヨロヨロとした動きでゆっくりと立ち上がり、呆然としている小悪魔からデッキケースを取り上げる。次に床に積み上げられた本を見るや、いきなりその本を豪快に蹴り崩した。

「イライラすんだよ…。こんな所でジツとしてんのはア…！」

「あ、あわわ…」

…パチュリーは既に『彼女』としての人格を持っていなかった。此処にいるパチュリーは行動から性格まで、外見を除く全てが荒くなり最早『動かない大図書館』の風格など微塵もない。今の彼女は既に『苛ついた凶悪な狂人』でしか無かった。

彼女は本棚に置かれている本を手当たり次第に漁り落ししながらゆっくり出口に向かった。

チャプター3

『地獄の姉妹、鬼との戦い』

紅魔館でパチュリーの体が浅倉威の人格に乗っ取られた同時刻。既に二体のホッパーと勇儀は戦闘を始めていた。

「そらそらっ！そんなんじゃあこの先を目指しても無駄におつ死ぬだけだよ！？」

「く…、流星は鬼つて所か…」

「あつちは生身なのに、パワーではこっちと互角以上…？」

鬼の中でも最強のパワーを誇る勇儀は、生身とはいえパンチホッパ―とキックホッパ―の二人を圧倒していた。対する秋姉妹も予想以上の力を持つ勇儀を相手に、少々驚きを露わにする。

だが、この2人には目の前で対峙している鬼には無い、最強の切り札がある。

二人は一時勇儀から離れ、互いの顔を見る。そしてキックホッパ―がホッパ―ゼクターに触れると、パンチホッパ―もそれに合わせてゼクターに触れた。

自分達を凌駕する近接戦闘技術と高い攻撃力を持つ勇儀を相手に、秋姉妹はホッパ―の通常攻撃では太刀打ちできそうもないと判断する。

となると、リスクは付くが二人同時にホッパ―の強力な必殺攻撃を同時に叩き込み、一回で仕留める他無い。

「もう遊んでる時間はない。終わらせてもらっ」

「さあ、地獄に堕ちるがいいわ！」

《RIDER - JAMP》

《RIDER - JAMP》

秋姉妹は勇儀から距離を置き、腰のZECTバツクルにセットされたホッパーゼクターの足を引く。パンチホッパーには右腕に、キックホッパーには右足にタキオン粒子が収束される。

「何を考えてるか分からないけど、隙が大きすぎるさね！」

タキオン粒子をチャージしている間、秋姉妹は完全に動きを止めていた。その一点を突けば勇儀にも勝機がある。

タキオン粒子をチャージアップしている時のホッパーは完全に無防備に等しい。

勇儀は右腕を振り上げ、空気を握りつぶすように拳に力を込めていく。

「一発ずつブチかますよ、骨のダメージは覚悟しときな！」

ホッパーのタキオン粒子チャージ時間は非常に短い。だが、この隙は非常に大きなチャンスでもある。勇儀は全力で二人に近づき、破壊力を極限にまで高めた拳によるパンチを繰りだそうとする。

だが…

「遅い…」

勇儀が拳を振り下ろし二人に殴り掛かろうとした時、既にホッパーのタキオン粒子は二人の脚に充填、チャージは完了していた。跳躍力が高まった二人は同時に地を蹴り、斜め後ろに力強く、勢いをつけながら高く飛び上がる。

「しまっ…ッ!？」

勢いを付けた勇儀の拳は回避され、ホッパーがたっていた足場に命

中。彼女の持つ強力なパワーにより、地面には隕石が墜ちた後のようにクレーター状のひびが入り、陥没していた。

これだけでも彼女の力は尋常では無いことが伺える。空中でその様子を見ていた秋姉妹もその破壊力を目の当たりにし、チャージが少しでも遅れていたら、自分達はどうなっていたかを想像し、幾ら自分自身を卑下している秋姉妹とはいえ肝を冷やしていた。

「くっ…！」

すかさず拳を地面から引き抜き、勇儀はキツとした目つきで空中にいる二体のホッパーを見上げる。対するホッパーも空中から勇儀を見下し、ホッパーゼクターのゼクターレバーを元に戻した。

「私達には見上げる存在しか居ない…。私達に見下させるな！」

「これで…、トドメかなあ!？」

《RIDER - KICK》

《RIDER - PUNCH》

今度はタキオン粒子が二人の右腕と左足に備えたアンカージャッキに集中し、チャージされたタキオン粒子は技の威力を高める為スーッ内で波動化していく。そして一気に勇儀目掛けて流星の如く急降下し、破壊力が数段に増した左足と右腕を勇儀目掛けて繰り出す！

「うおおりゃあッ…！」

「そおおりゃああ…！」

「え…ちよ…ぐはあああつ?!?!?」

勇儀は破壊力抜群のライダーパンチとライダーキックを受け後方へ吹っ飛び、近くの居酒屋に激突、そのまま居酒屋の壁をバキバキと貫いた。

幸いこの居酒屋は既に廃業、中にも誰も居なかった為大きな問題にはならなそうだ。

「…姉貴、もしかしたらアイツ死んだかな？」

「いや、鬼はそんな簡単にポツクリ逝くほど弱い妖怪じゃない…」

二人のホットパーライダーはベルトからゼクターを外し、変身を解除する。ベルトから離れた二機のゼクターは、秋姉妹の手元から離れ何処かへ走り去っていった。

秋姉妹は暫く大破した居酒屋に目を向けるも、勇儀が再び此方へ来る気配はない。二人はこれ以上彼女に構っていても何だか時間が勿体無いと感じ、居酒屋から出てこない彼女をスルーし本来の目的地である地霊殿へと向かった。

勿論、勇儀がこの潰れた居酒屋の中で一体何をやっていたかを知るものはいない…

**東方戦仮面 特別番外編第1弾「地獄の決戦 地霊殿の姉妹VSやさぐれ姉妹」**

3ヶ月も更新を疎かにしてしまい、申し訳ありませんでした(汗)

今回は秋姉妹と古明地姉妹の対面です。

本格的なバトルは次回からとなりそうです。

チャプター4

『秋姉妹・地霊殿到着』

生身とはいえ高い身体能力と強力な戦闘力を誇る鬼・星熊勇儀を倒し、地霊殿へ向かって数十分の時間が経過した頃。

秋姉妹が旧都を抜けると、人工物が一切無く、地底の世界に相応しく薄暗いイメージの風も吹かない古びた小さな一本道に出た。その道はかなり先まで続いていて、道を目で辿っていくと薄暗い視線の先に、うつすらと洋館のような、巨大な建造物が2人の視界の前に現れた。

「彼処か…」

二人はあの館から、うつすらとだが今まで感じたことがない『タイプ』の妖気を感じ取っていた。静葉はその建造物が先程勇儀の話していた『地霊殿』であることを確信した。

「あそこで間違いないみたいだね」

「ああ…。遂に『地獄の果て』にたどり着いたんだな…」

後はこの道に沿って足を運べば、あの館へ嫌でも脚を踏み入れることになるだろう。この先にどんな恐怖や地獄が待っていたとしても、その恐怖や苦悩を受け止め、『本当の地獄』を我が物にする事が彼女達の狙いなのだ。

二人は歩調を変えることなく、自分達の目指す洋館を見上げながら、ザクザクと足音を立てながら長い一本道を歩み続けた。

一方、秋姉妹の目指している地霊殿の中では…

「むぐむぐ…お姉ちゃん、さっきから何か感じない？」

「やっぱり貴女も感じていたみたいね。この感じからして、どうやらまた地上からお客様が来たのかしら？」

地霊殿の主、古明地さとりとその妹・古明地こいしは、従者である霊鳥路空と火焰猫燐らと共に食事や茶を取りながら、此方へ近付いてくる異様な妖気を感じ取っていた。

「あたかもよく仕事場で怨霊の会話をよく聞くんだけど、何だかやつぱり此処らも可笑しくなってるみたいだよ」

「最近こつちの世界も物騒になってきたからね。…あ、これ食べてもいいかな？」

得体の知れない妖気が此方に近づいてきていると言うのに、四人の行動は実にのんびりとしたものだった。だが、主であるさとりは既に、この妖気の正体が目指しているのは、この地霊殿だということを感じていた。

…しかし、彼女はその妖気を警戒するどころか、手元にあるカップに紅茶を注ぎ、音を立てずにそれをゆっくりと呑み始めた。

地霊殿の危機となりうる存在がもう近くまで迫り来ているというの

に、何故これほどの余裕を持っていられるのかは、彼女のスカートに備えられたポケットから見えている朱色の箱…、『仮面ライダーライア』のカードデッキがそれを証明していた。

「セイロン茶もなかなか美味しいわね。今度他の種類も飲んでみようかしら」

…とは言えども、いくら何でもこれでは余裕どころか、ただ単に『油断』している様に見えてしまう。さとりはそれ程自分の腕に自信があるのか、それとも何か策があるのか。何にせよ常人には理解しがたい行動の多い彼女の考えは油断ならない。

この雰囲気から把握できることはただ一つ、『古明地姉妹』という幼き地獄の重鎮が此処にいる限り、この平穏な一時は決して崩される事はない、という事であった。

…しかし、既にその『脅威』がこの館の敷地内にまで及んでいた事に気付いていたのは、さとり以外誰も知る者は居なかった…。

一方の秋姉妹は、既に地霊殿の庭へと足を踏み入れていた。護衛の怨霊や亡霊達も彼女の気配を察知するや、弾幕を張りながら迎撃行動を取るものの、秋姉妹はそれをいとも簡単に交わしながら、弾幕を張らず力強い拳と蹴りで次々と怨霊達を薙ぎ倒していく。

「…お出迎えに怨霊とはな、流石地獄のお屋敷と言ったところか」

「地獄だけに、ね。そこらの妖精や妖怪じゃあ地獄に来たって実感が持てないかもしれないし」

二人は現れた護衛を全て撃破すると、敵がもう出てこないか念入りに周囲を見渡す。二人が見たところ、もう障害や敵らしき者はどこ

にも見当たらない。

二人はとうとう地霊殿の入り口に立ち、静葉は左足を振り上げ、『  
礼儀作法など知ったことか』と言わんばかりに入り口を荒々しく蹴  
り破り、穰子を連れながら中に進入した。

地霊殿の中は、地底の館に相応しく薄暗い。太陽など射し込むはず  
の無い世界だが、天井付近に張り巡らされたステンドグラスの窓は、  
まるで無いはずの太陽光を取り込んでいるかのように、うっすらと  
輝き秋姉妹の黒い上着を照らしていた。

「地獄と随分とイメージが違うね。本当に此処で合ってるのかな？」

「見掛けによらずって言葉があるだろう？この強力な妖気がある以  
上、この館は只の館じゃない」

二人は奥に向かって歩き続ける中、静葉は奥へ進むにつれて増幅し  
ていく強い妖力を感じていた。

屋敷の中は異常に静かで、静葉と穰子の足音以外は全く耳の鼓膜に  
反響しない。

更には先に進むに連れられてもステンドグラスの光が照らされた、同じ  
ような廊下の景色が無限回廊の如く二人の瞳中に広がっていた。

とうとう館内に侵入してきた秋姉妹に、さとりもようやく動きを見  
せる。ゆつたりとした雰囲気の中、彼女は椅子から立ち上がり、呑  
気に紅茶を呑むこいしを見る。

「お客様、とうとう此処まで来たみたいね。さあ、お出迎えに行き

ましょう」

「分かったわ、お姉ちゃん」

こいしもその場からゆっくり立ち、さとりは廊下へと続く扉を開いた。そして館内に侵入した秋姉妹を『歓迎』すべく2人は燐と空を置いて部屋を後にした。

チャプター5

『古明地姉妹出陣・決戦の序章』

「それにしても、無駄に長い廊下だね…」

「…流石に、長いな…」

秋姉妹は未だ、最深部を目指し長い廊下を歩いていた。先程から奥に進んでいる感覚はあるものの、気配は愚か部屋一室の扉すら発見できていなかった。

「これ以上進んでも、キリがないんじゃない…」

侵入して数時間、未だ2人の興味を引くものは全然見つからない。故に、妹という立場だけに静葉より感情や判断力の緩い穰子は、とうとうピタリと足を止めてしまった。

しかし、静葉はそんな穰子を一瞬だけ横目でチラリと覗き込むと、再び長い廊下を歩もうと穰子の手を取り、歩きだそうとした…瞬間。

「ようこそ、地霊殿へ」

突如2人の目指す先から、幼い少女の声が響き渡った。しかし、その声には客人を敬う感情など微塵も感じられない。

その冷徹な、無感情の冷たい声色は2人の心に突き刺さるような感覚を植え付ける。

…その刹那、2人の体中を震撼させるような底抜けの妖気が秋姉妹を飲み込むように畳掛かる。

「…!？」

秋姉妹は自分達の前方を鋭い目つきで睨み付ける。そこには並の妖怪の有する妖気とは比べものにならないくらい強い気を漂わせながら此方に向かって歩んでくる地底の妖怪…古明地さとりと古明地こいしの姿が。

「姉貴、まさか…アレ」

「この感じ…成る程、私達がウロウロしている所を察してわざわざ向かってきたオチか？」

遂に、秋姉妹の前に姿を現した古明地姉妹。2人とも外観こそは幼い少女の姿をしており、地上の妖怪と外観上の大差はない。しかし、彼女達の胸辺りに存在する不気味な雰囲気を持った「第3の目」は、秋姉妹を相手に威圧感を植え付けるには十分すぎる。

「いらつしゃい、お客様：と言いたいところだけど、何時かの巫女も同じだったけどノックもせずに強行突破でこの屋敷に入ってくるなんて…」

「ほんと。地上は結構礼儀知らずな人が多いみたいね、お姉ちゃん」

古命地姉妹は秋姉妹の顔を、呆れた表情で睨み付ける。その反応に秋姉妹は一緒表情を曇らせたが、さとりの針のように鋭い視線に、蛇に睨まれた蛙の如く固まってしまった。

そして、さとりはこの2人の目的を知るべく、強気な目つきで此方を睨む静葉の心を自分の能力を用いて読み取った。

(…ふうん、あらゆる場面で「負け」が続いて、自分達の価値を見落として此処にやって来た…成る程、良くわかったわ)

さとりは一度瞳を閉じ、一息つくくとゆっくりと目を開き、もう一度静葉の目を見つめ口を開いた。

「貴女達…何があつたのかは大体分かりました。ですが此処は私の館です。そんな理由で暴れられたら此方も困るんですよ」

「…へえ、お前は私達の考えている事が分かるのか？」

地上の世界にも変わった能力を持つ人妖霊神は沢山いる為、静葉はさとりの能力に動揺を示すことなく、ハッと軽く笑うと左足を一歩引き、独自の足技の体制を取り戦闘態勢に入った。

「そつちの都合なんて知らないさ。それに…お前達二人も『地獄の試練』であるのであれば、私達はお前達を叩きのめすまで」

「今更後戻りはできないからね」

目の前には、相手の心を読み取る妖怪「さとり」の姉妹が2人。もしこのまま戦闘に持ち込むことになるのなら、相手の「手」を読むことの出来る古明地姉妹が断然有利。

しかし、それを承知に秋姉妹は敵意と闘争本能を隠すどころか、曇り1つ見えないほど剥き出しにする。古明地姉妹を見る秋姉妹の眼は一層鋭さを増す。

「あら…まさか、私達と戦うつもりかしら？…いや、もうそのつもりでいるみたいね…」

「お姉ちゃん、なら少しだけ遊んであげようよ。でも…この人達あれだけ言っておいてアツサリ負けるようなことがあったら、それはそれで笑い者だよねー」

こいしは何を想像したのか、秋姉妹の顔を見ると、クスツと笑いがこぼれた。

…だが、既にその瞬間が、秋姉妹のスイッチを入れる原因、入れる決定的な瞬間となった。

「お前…今、私達を笑ったな…!？」

「姉貴…こいつらに地獄に住むこと以上の地獄を見せてやるっよ！」

笑われたことで、とうとう秋姉妹は闘争本能を制御できずにいられなくなり、2人の意志に呼応して2機のホッパーゼクターが地霊殿の壁を破壊して現れ、静葉と穰子の手に収まる。

「なる程、貴女達はスペルカード方式の戦いよりこちらの戦いで勝

負しようよ…」

「受けて立とうよ、お姉ちゃん」

「そのつもりです」

対する古明地姉妹もポケットから互いにカードデッキを取り出し、さとりは朱色のカードデッキを、こいしは黒いカードデッキを天井のステンドグラスに翳してミラーライダーのベルトにVバックルを呼び寄せた。

秋姉妹は古明地姉妹もライダーであることを黙認すると、ゼクターをゼクトバックルにセットする。

「もつと笑え…笑えよ！」

《CHANGE・KICKHOPPER》

「お前達も絶望一色で染めてやる！」

《CHANGE・PUNCHHOPPER》

「その行動が、裏目にでるかもしれないというのに…」

「その時はその時だよ、お姉ちゃん」

静葉がキックホッパーに、穰子がパンチホッパーに変身すると、秋姉妹もカードデッキをVバックルに装填し、さとりは仮面ライダーライアに、こいしは銀色のサイを連想させる分厚い装甲を纏ったライダー、『仮面ライダーガイ』に変身した。

「お前も地べたに這い蹲れ…！」

「その余裕、ムカつくなあ…！」

「全く…流石にもう口では止められませんか…！」

「あははっ、そうみたいだね。…行くよ、お姉ちゃん！」

開始早々、ライアとガイに突撃するパンチホッパーとキックホッパー。パンチホッパーはガイに、キックホッパーはライアに狙いを定め、ホッパー共通の唯一かつ基本戦術である近接格闘に持ち込むべく、変則的な技を用いるミラーライダーにリスクを感じながらも距離を詰める。

…地獄に住まう姉妹と、地獄を追い求める姉妹の戦いが開幕した瞬間だ。

東方戦仮面 特別番外編第1弾「地獄の決戦 地霊殿の姉妹VSやさぐれ姉妹」

今回、新たに登場したライダー

仮面ライダーガイ

登場作品：仮面ライダー龍騎

地霊殿に住む古明地姉妹の妹、古明地こいしが変身する。他のミラーライダーと比較しても極めて重厚な容姿を持ち、専用の召喚機「メタルバイザー」は左肩と一体化している。契約モンスターはサイの姿をしたモンスター『メタルガラス』で、ファイナルベントはメタルガラスに飛び乗り、突進技を繰り出す『ヘビープレッシャー』。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6995g/>

---

東方戦仮面

2010年10月9日15時04分発行